

# 独立行政法人国立美術館の平成20年度に係る業務の実績に関する評価

## 全体評価

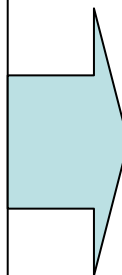
### ①評価結果の総括

- (イ) 限られた予算と人員の中で最大限の努力を重ね、わが国の美術文化を担うナショナルセンターにふさわしい活動を、展覧会事業、収集保管事業を通じて展開していることや、児童から大学生までを対象にした鑑賞教育活動及び各種普及講座を多様に展開し、次世代鑑賞者層の育成・拡大をめざして取り組んでいることは高く評価できる。
- (ロ) 伝統的な美術を再検討する方向を堅持しつつも、建築・工芸など美術領域を横断し、写真・デザイン分野にも関心を払うなど、わが国の現代美術の多様化に対して柔軟に対応していることや、映画等の映像芸術に関し、国内唯一最大の施設であるフィルムセンターが多様な企画を展開していることは高く評価できる。
- (ハ) 法人全体がデジタル化による美術情報の集積と発信拠点であるという認識のもとに、国民の期待に十分応え、その役割を果たしているものと認められる。

- <参考>**
- I 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置 A
  - II 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置 A
  - III 財務、人事、施設整備に関する目標を達成するためにとるべき措置 A

### ②評価結果を通じて得られた法人の今後の課題

- (イ) デジタル復元を含めたフィルム収集は、ナショナル・コレクションの形成に等しい重要な事業であるため一層の推進をはかり、また、児童・学生に特化した映画文化普及プログラムの充実をはかるなど、映像教育のボトムアップ方策を検討する必要がある。(項目別P.11、42)
- (ロ) 法人のコレクションは、国民の資産であり、収蔵庫など保存施設の狭隘化・老朽化対策については、各館共通の重要課題として、今後とも引き続き検討する必要がある。(項目別P. 21、23)
- (ハ) アジアをはじめ、世界の美術館との交流拠点としての役割をより一層重視し、国際交流のあり方や日本文化の発信に関して、長期の展望と戦略をもつ必要がある。(項目別P. 27)
- (ニ) 多様化する事業に対応するためにも、ナショナルセンターにふさわしい人材育成と確保は、法人全体の取り組むべき重要課題である。(項目別P.40、51)



### ③評価結果を踏まえ今後の法人が進むべき方向

- (イ) フィルム収集の一層の推進や映像教育の更なる充実を目指すためには、フィルムセンターがより機動的かつ柔軟な運営を行うことが可能となるよう、法人内の他の美術館と同列の独立した一館となるよう、引き続き検討することが期待される。(項目別P.11、42)
- (ロ) 法人のコレクションは、国民の資産でもあり、今後の安全な保管体制の確保など、有効な解決策の検討について、最優先で実施することが期待される。(項目別P. 21、23)
- (ハ) 世界の美術館との交流をさらに深め、単に例年の行事参加にとどまらず、長期的な展望や文化的戦略をもって取り組む必要がある。(項目別P. 27)
- (ニ) インターンシップやキュレーター研修などを通じ外部に対する人材育成をはかる一方、法人内の各種研修体制を充実させ、専門分野の調和を考慮しつつ、実務を通じて研究員の資質向上を計画的に進める必要がある。(項目別P.40、51)

- ④特記事項** 総務省の2次評価で指摘のあった事項については、適切に対処がなされ、努力の成果が表れているものと認められる。

# 文部科学省独立行政法人評価委員会 文化分科会国立美術館部会委員名簿

## ＜正委員＞

池田 弘一 アサヒビール株式会社代表取締役会長兼CEO

竹内 順一 財団法人永青文庫館長、茨城県陶芸美術館館長

## ＜臨時委員＞

安藤 紘平 映画監督、早稲田大学教授

前田 富士男 慶應義塾大学名誉教授

宮島 博和 公認会計士

山梨 俊夫 神奈川県立近代美術館館長

(以上6名)

# 独立行政法人国立美術館の平成20年度に係る業務の実績に関する評価

## 項目別評価総表

項目名	中期目標期間中の評価の経年変化					項目名	中期目標期間中の評価の経年変化				
	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度		18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
(大項目名)国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A			(小項目名)ナショナルセンターとしての人材育成	B	B	B		
(中項目名)美術振興の中核的拠点としての多彩な活動の展開	A	A	A			(小項目名)フィルムセンターの取組状況	A	A	A		
(小項目名)展覧会への取組(常設展)	A	A	A			(大項目名)業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A		
(小項目名)展覧会への取組(企画展)	A	A	A			(中項目名)業務の効率化の状況	A	A	A		
(小項目名)国立新美術館の取組	B	A	A			(大項目名)財務、人事、施設整備に関する目標を達成するためにとるべき措置	A	A	A		
(小項目名)情報の発信	A	A	S			(中項目名)財務の状況	A	A	A		
(小項目名)教育普及活動の実施状況	A	A	A			(中項目名)短期借入金の限度額	A	A	A		
(小項目名)調査研究の実施状況	B	B	A			(中項目名)重要な財産の処分等に関する計画	A	A	A		
(小項目名)観覧環境の提供	B	A	A			(中項目名)剰余金の使途	A	A	A		
(小項目名)国立新美術館の開館	B					(中項目名)人事の状況	A	A	B		
(中項目名)我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承	A	A	A			(中項目名)施設整備の状況	A	A	A		
(小項目名)収蔵品の収集	A	A	A			(中項目名)関連公益法人	A	A	A		
(小項目名)収蔵品の保管・管理	B	A	A								
(小項目名)収蔵品の修理	A	A	A								
(小項目名)収集・保管のための調査研究	A	A	A								
(中項目名)我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与	B	A	A								
(小項目名)ナショナルセンターとしての国内外の美術館等との連携・協力	B	A	A								

当該中期目標期間の初年度から経年変化を記載。

備考(法人の業務・マネジメントに係る意見募集結果の評価への反映に対する説明等)

本法人の業務・マネジメントに係る意見募集を実施した結果、意見は寄せられなかった。

【施策目標】芸術文化の振興

【参考資料1】予算、収支計画及び資金計画に対する実績の経年比較

(単位:百万円)

区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
収入						支出					
運営費交付金	5,158	4,984	6,779	6,042	5,790	運営事業費	5,669	6,011	7,274	13,417	16,133
展示事業収入	528	733	744	1,485	1,311	人件費	1,187	1,197	1,181	1,267	1,112
受託収入	6	38	42	18	33	管理部門 1	-	-	420	441	331
寄附金収入	15	6	29	11	35	事業部門 1	-	-	761	826	781
消費税等還付税額	0	0	0	0	0	業務経費	4,482	4,814	6,093	5,757	5,771
施設整備費補助金	0	0	0	6,393	9,250	一般管理費	1,200	979	816	1,960	1,607
						展覧事業費	2,583	2,981	2,183	2,906	2,964
						調査研究事業費	208	209	201	233	201
						教育普及事業費	398	410	489	658	999
						国立新美術館 2	93	235	2,404	0	0
						施設整備費補助金	0	0	0	6,393	9,250
計	5,707	5,761	7,594	13,949	16,419	計	5,669	6,011	7,274	13,417	16,133

1 平成18年度より管理部門と事業部門を分けて記載

2 国立新美術館設立等準備事業費(平成18年度は国立新美術館開館準備等事業費等)

(単位:百万円)

区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
費用						収益					
経常費用	3,970	4,105	5,886	6,097	5,930	運営費交付金収益	3,537	3,605	5,231	4,802	4,485
収集保管事業費	345	359	316	339	323	資産見返運営費交付金戻入	51	86	109	140	145
展覧事業費	1,129	1,131	1,468	1,901	1,861	資産見返寄付金戻入	0	0	0	0	1
調査研究事業費	236	313	444	382	296	資産見返物品受贈額戻入	50	38	21	14	15
教育普及事業費	496	525	714	788	1,154	入場料収入	461	646	601	921	774
新館設置対応費	60	128	554	0	0	その他事業収入	65	86	139	563	533
受託事業費	6	36	41	18	33	受託収入	6	38	42	18	33
一般管理費	1,590	1,488	2,217	2,509	2,083	寄附金収益	15	5	16	16	10
減価償却費	98	125	131	156	164	施設費収益	0	0	0	11	127
臨時損失	10	0	1	4	16	雑益	1	1	4	2	6
						臨時利益	0	0	1	8	8
計	3,970	4,105	5,886	6,097	5,930	計	4,186	4,505	6,164	6,495	6,137
						純利益	216	400	278	398	207
						目的積立金取崩額	0	43	0	0	0
						総利益	216	443	278	398	207

(単位:百万円)

区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
資金支出						資金収入					
業務活動による支出	5,300	5,174	7,315	7,213	6,972	業務活動による収入	5,692	5,761	7,557	7,628	7,111
投資活動による支出	332	237	430	6,355	8,486	運営費交付金収入	5,158	4,984	6,779	6,042	5,790
財務活動による支出	0	0	0	4	3	入場料収入	458	648	605	919	774
国庫納付金の支払額	0	0	1,499	0	0	その他事業収入	63	90	136	605	479
翌年度への繰越金	2,746	3,096	1,409	1,765	1,777	寄附金収入	13	6	27	12	35
						受託収入	0	33	10	50	33
						投資活動による収入	0	0	0	6,300	8,362
						前年度よりの繰越金	2,686	2,746	3,096	1,409	1,765
計	8,378	8,507	10,653	15,337	17,238	計	8,378	8,507	10,653	15,337	17,238

## 【参考資料2】貸借対照表の経年比較

(単位:百万円)

区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
資産						負債					
流動資産	2,770	3,124	1,487	1,910	2,840	流動負債	1,025	1,619	1,202	1,351	2,061
固定資産	85,449	86,292	121,326	127,036	135,218	固定負債	890	924	1,265	1,192	1,144
						負債合計	1,915	2,543	2,467	2,543	3,205
						資本					
						資本金	45,949	45,949	81,019	81,019	81,019
						資本剰余金	38,608	39,044	38,668	44,327	52,570
						利益剰余金	1,747	1,880	659	1,057	1,264
						(うち当期末処分利益)	(216)	(443)	(278)	(398)	(207)
						資本合計	86,304	86,873	120,346	126,403	134,853
資産合計	88,219	89,416	122,813	128,946	138,058	負債・資本合計	88,219	89,416	122,813	128,946	138,058

## 【参考資料3】利益(又は損失)の処分についての経年比較 (単位:百万円)

区分	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
当期末処分利益	216	443	278	398	207
当期総利益	216	443	278	398	207
利益処分額	216	443	278	398	207
積立金	122	443	278	398	207
独立行政法人通則法第44条第3項により主務大臣の承認を受けた額	94	0	0	0	0
美術作品購入・修理積立金	94	0	0	0	0
設備積立金	0	0	0	0	0

備考:平成15・16年度の利益処分において独立行政法人通則法第44条第3項により主務大臣の承認を受けた額165百万円は、中期計画に基づき、美術作品の購入・修理、入館者サービス、情報提供の質的向上、老朽化対応のための施設・設備の充実等のため、前中期目標期間中に使用したものである。なお、平成18年度からの今中期目標期間については、通則法44条第3項の目的積立金の申請は行ったものの、認定されなかった理由として「独立行政法人の経営努力認定について(平成18年7月21日(平成19年7月4日改訂)総務省行政管理局)」の(3)「独立行政法人の経営努力認定の基準」、「経営努力認定の対象案件の利益の実績が原則として前年度実績額を上回ること(ただし、前年度実績が前々年度の実績を下回っている場合には、その理由を合理的に説明することが必要。)」に対する合理的説明が認められなかったことにより、全額積立金への計上となっている。

また、平成20年度においては、入場料収入等が収入予算額を上回ったことにより207百万円の利益が生じたが、昨年度よりも利益が下がっており、「独立行政法人の経営努力認定について」に対する合理的な理由を見つけることが難しいため、目的積立金の申請を行わないこととした。

【参考資料4】人員の増減の経年比較(過去5年分を記載) (単位:人)

職種	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度
定年制研究系職員	60	60	61	61	61
定年制事務系職員	68	70	70	70	70

## 独立行政法人国立美術館の平成20年度に係る業務の実績に関する評価

段階的評定の区分及び定量的な評価を行う際の各段階別評定の達成度の目安については、次の考え方とする。

- S : 特に優れた実績を上げている。(客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評定を付す。)
- A : 中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。  
(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が100%以上)
- B : 中期計画通りに履行しているとは言えない面もあるが、工夫や努力によって、中期目標を達成し得ると判断される。  
(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70%以上100%未満)
- C : 中期計画の履行が遅れており、中期目標達成のためには業務の改善が必要である。(当該年度に実施すべき中期計画の達成度が70%未満)
- F : 評価委員会として業務運営の改善その他の勧告を行う必要がある。(客観的基準は事前に設けず、業務改善の勧告が必要と判断された場合に限りFの評定を付す。)

## 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

評定 A

中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。

中項目の評価	評定
1. 美術振興の中核的拠点としての多彩な活動の展開	A
2. 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承	A
3. 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与	A

### 【中項目評価】

## 1. 美術振興の中核的拠点としての多彩な活動の展開

評定 A

中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。

### 評価のポイント

各館の努力は高度な成果と業績を生みだしている。今後、ナショナルセンターたる法人としての協働、国際的連携などの新しい取り組みが必要な局面であるため、より一層の斬新なアイデアと工夫により、特色ある展覧会の実施が期待される。



中期目標			評価基準					主な実績及び自己評価	評価	評価委員会によるコメント																																				
中期計画	年度計画	指標又は評価項目	S	A	B	C	F																																							
<p><b>1 美術振興の中心的拠点として、多様な鑑賞機会の提供、美術創造活動の活性化の推進など、現代の美術を取り巻く状況の変化に対応した多様な活動を展開し、我が国の美術振興に寄与</b>          国立美術館は、我が国の美術振興の中心的拠点として、現代の美術を取り巻く状況の変化に対応した多様な活動を展開していることが求められている。このため、展覧会等を通じた多様な鑑賞機会の提供、美術創造活動の活性化の推進などに積極的に取り組むこととする。</p>																																														
<p>(1) 多様な鑑賞機会の提供          国立美術館は、美術振興の中心的拠点として、学術的意義、国民の関心、国際文化交流の推進等に配慮しつつ、多様で秀逸な美術作品の鑑賞機会をより多くの国民に提供すること。          また、展覧会は、次の観点から実施するものとし、中期目標期間全体としてバランスのとれたものとなるようにすること。          (イ) 国家的規模で行う主導的な展覧会の実施          (ロ) 全国の美術館に方向性を示す先導的な展覧会の実施          (ハ) 新しい芸術表現を取り入れた先端的な展覧会の実施          展覧会を開催する際は、企画段階から開催目的、期待する成果、学術的意義等を明確にするとともに、専門家からの意見や入館者の満足度を踏まえた事業評価を行い、それ以降の展覧会の充実に反映させる。          地方における鑑賞機会の確保のため、受け入れ側の要望を十分踏まえつつ、地方巡回展を積極的に行うこと。          個々の展覧会においては、実施目的、内容、良好な観覧環境の確保、過去の入館者数の状況等を踏まえた適切な入館者数の目標を設定し、その達成に努めること。          フィルムセンターにおいては、映画フィルム等の所蔵作品の活用を図った上映展示機能の充実に図ること。</p>																																														
<p>(1) 多様な鑑賞機会の提供          ・1 利用者のニーズ、学術的動向を踏まえ、各館において魅力ある質の高い常設展・企画展や企画上映を実施する。          ・2 常設展は、国立美術館の各館の特色を十分に発揮したものとともに、最新の研究成果を基に、美術に関する理解の促進に寄与することを目指す。          ・3 企画展は、積年の研究成果に基づき、時宜を得たものを企画し、学術水準の向上に寄与するとともに、利用者のニーズに対応しつつ、特に次の観念に留意して実施する。          (イ) 国際的視野に立ち、海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。          (ロ) 展覧会テーマの設定やその提示方法等について新しい方向性を示すことに努める。          (ハ) メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。          (ニ) 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に努める。          なお、企画展の開催回数は概ね以下のとおりとする。          (東京国立近代美術館)          本館 年3回～5回程度          工芸館年2回～3回程度          フィルムセンター 年5番組～6番組程度          (京都国立近代美術館)          年6回～7回程度          (国立西洋美術館)          年3回程度          (国立国際美術館)          年5回～6回程度          (国立新美術館)          年6回～7回程度          (公募展を除く。)</p>			<p>(1) 多様な鑑賞機会の提供          国立美術館は、利用者のニーズ、研究成果を踏まえ、各館の所蔵作品を活かした所蔵作品展を開催するとともに、日本のみならず、海外の美術館と連携しながら、近現代の作家の個展、新しい芸術表現の領域として注目されてきたメディアアート、さらにはアジアに眼を向けた展覧会などの企画展を開催する。          また、各館の企画・連携のあり方を検討し、各館における展覧会企画等の連絡調整、5館共同の展覧会開催の調整・実施等について検討する。          映画については、映画保存活動の成果を最大に活用しつつ、作家や時代、国やジャンルなど様々な切り口による企画上映を実施して、多様な鑑賞機会の提供を図る。また、映画産業の枠外で製作された日本映画の上映に着手する。          なお、入館者に対するアンケート調査を行い、そのニーズや満足度を分析し、結果を展覧会等に反映させるよう努める。</p>		<p>展覧会への取組          (常設展)          (定性的に評価)</p>					<p>(1) 多様な鑑賞機会の提供  <b>所蔵作品展</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>開催日数</th> <th>展示替回数</th> <th>入館者数</th> <th>目標数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館(本館)</td> <td>284</td> <td>5</td> <td>207,499</td> <td>198,000</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館(工芸館)</td> <td>270</td> <td>5</td> <td>73,676</td> <td>48,000</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>226</td> <td>11</td> <td>264,680</td> <td>231,000</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>309</td> <td>1</td> <td>394,300</td> <td>250,000</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>175</td> <td>3</td> <td>261,079</td> <td>157,000</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>1,264</td> <td>25</td> <td>1,201,234</td> <td>884,000</td> </tr> </tbody> </table>		館名	開催日数	展示替回数	入館者数	目標数	東京国立近代美術館(本館)	284	5	207,499	198,000	東京国立近代美術館(工芸館)	270	5	73,676	48,000	京都国立近代美術館	226	11	264,680	231,000	国立西洋美術館	309	1	394,300	250,000	国立国際美術館	175	3	261,079	157,000	計	1,264	25	1,201,234	884,000
館名	開催日数	展示替回数	入館者数	目標数																																										
東京国立近代美術館(本館)	284	5	207,499	198,000																																										
東京国立近代美術館(工芸館)	270	5	73,676	48,000																																										
京都国立近代美術館	226	11	264,680	231,000																																										
国立西洋美術館	309	1	394,300	250,000																																										
国立国際美術館	175	3	261,079	157,000																																										
計	1,264	25	1,201,234	884,000																																										
<p>(イ) 国際的視野に立ち、海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。          (ロ) 展覧会テーマの設定やその提示方法等について新しい方向性を示すことに努める。          (ハ) メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。          (ニ) 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に努める。          なお、企画展の開催回数は概ね以下のとおりとする。          (東京国立近代美術館)          本館 年3回～5回程度          工芸館年2回～3回程度          フィルムセンター 年5番組～6番組程度          (京都国立近代美術館)          年6回～7回程度          (国立西洋美術館)          年3回程度          (国立国際美術館)          年5回～6回程度          (国立新美術館)          年6回～7回程度          (公募展を除く。)</p>			<p>(東京国立近代美術館)          本館:工芸館 目標入館者数計:59万4千人          &lt;本館&gt;          所蔵作品展では、近代日本美術の流れを通史的に展開するという当館の役割を果たす。また、所蔵作品の研究成果に基づいて、北脇昇、近藤浩一、今村紫紅らの作家の小企画展や、大正期の東京の文化的土壌や、コラージュという手法が近代美術に開いた新展開などについて小企画展を実施する。また、横山大観(生々流転)の全巻展示を実施する。企画展は、時代(戦前・戦後)、地域(国内・海外)、ジャンル(絵画・彫刻・写真等)のバランスを考慮しつつ編成する。具体的には、戦後活躍した日本画家の回顧展(「東山魁夷展」)、建築家のドローイング展(「建築が生まれるとき ベーター・メルクリと青木淳」展)、メディアアートなど最先端の表現を含む現代美術展(「エモーション・ドローイング」及び「ヴィデオ・アート展」)、これまで取り上げられる機会の少なかった沖縄美術の展覧会、日本人写真家の個展(「高梨豊展」)などを開催する。          目標入館者数計:51万3千4百人          ア 所蔵作品展 目標入館者数計:19万8千人          「近代日本の美術」展 5回展示替え          10回程度の小・中規模の特集展示          イ 企画展 目標入館者数計:31万5千4百人          (ア)「東山魁夷展」 目標入館者数:27万2千人(うち平成20年度25万3千人)          (イ)「建築が生まれるとき ベーター・メルクリと青木淳」 目標入館者数:1万6千人          (ウ)「現代美術への視点」エモーション・ドローイング; 目標入館者数:1万5千人          (エ)「沖縄から」沖縄へのまなざし; 目標入館者数:1万5千人          (オ)「高梨豊展」 目標入館者数:1万6千人          (カ)「ヴィデオ・アート展」 目標入館者数:2万2千人(うち平成20年度4千人)          &lt;工芸館&gt;          所蔵作品展では、素材分野や主題などによって特集展示を</p>		<p>各館の特徴          ア 東京国立近代美術館          (本館)          所蔵作品展「近代日本の美術」では、絵画・彫刻・水彩・素描・版画・写真等、約9,900点のコレクションから、毎回170～220点の作品を選び、20世紀初頭から現代に至る日本の近代美術の流れが概観できるよう展示している。          また、4F特集コーナー、3F版画コーナー・写真コーナー、2Fギャラリー4では、特定の作家に絞った展示や特定のテーマによる小企画を設けることにより、編年順の所蔵作品展とは異なった視点を導入し、新鮮さと会期ごとの変化を印象づけるよう努めた。また、重要文化財については、見やすいキャプションを追加するとともに、年度当初に年間展示計画を立て、いつ来館しても重要文化財複数点が鑑賞できるよう調整を行った。          鑑賞の向上に資するため「鑑賞/スヌメ」(持ち歩き式の解説カード)の解説作品数を各会期の出品作に合わせて追加し、また、音声ガイドにおける作家インタビューの編集・追加するとともに、館内表示を見やすいデザインに一新し、利用の呼びかけを積極的に行った。          現代美術を身近に感じてもらうため、作品の前で作家本人が語るアーティスト・トークを5回実施した。アンケートでは、作家の人生観や具体的な制作方法を知ることのできるこのトークは、きわめて好評であった。          所蔵作品展広報のため、ホームページ内に重要文化財作品解説ページの新設や新聞広告において新聞読者層に合わせた作品1点に的を絞って季節感を強調する等の工夫を行った。あわせて読書新聞都内版と連携し、各研究員が作品解説を執筆してきたコラム「近代美術の東京」について、平成20年度末より「近代美術の眼」と名称変更するよう働きかけ、東京というはりを離れ、いっそう自由に所蔵作品展の見所を伝えることが可能となった。</p>					<p>A</p> <p>・近現代美術の通史が俯瞰できる展示が行われている。さらに、冒険的精神を反映する建築と素描、メディアの横断的な試みなどについては、コレクション展(常設展)の可能性を開拓する意欲が十分うかがえ、その成果は高く評価できる。          ・コレクション展(常設展)への入館者数が前年度に比べ50%増加したことや、来館者の反応には、各館の努力による成果が反映され、高く評価できる。</p> <p>【よりよい事業とするための意見】          ・名品の展示を基軸にしたコレクション展においては、美術館の存在をアピールするためにも、一層ヴァリエーションに富んだ所蔵品の活用を図ることが望まれる。          ・広報においては、ホームページを活用し、コレクション展の内容や特徴、コメントなどを追記するなど、より一層の充実を望む。</p>																																				
<p>(イ) 国際的視野に立ち、海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。          (ロ) 展覧会テーマの設定やその提示方法等について新しい方向性を示すことに努める。          (ハ) メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。          (ニ) 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に努める。          なお、企画展の開催回数は概ね以下のとおりとする。          (東京国立近代美術館)          本館 年3回～5回程度          工芸館年2回～3回程度          フィルムセンター 年5番組～6番組程度          (京都国立近代美術館)          年6回～7回程度          (国立西洋美術館)          年3回程度          (国立国際美術館)          年5回～6回程度          (国立新美術館)          年6回～7回程度          (公募展を除く。)</p>			<p>(東京国立近代美術館)          本館:工芸館 目標入館者数計:59万4千人          &lt;本館&gt;          所蔵作品展では、近代日本美術の流れを通史的に展開するという当館の役割を果たす。また、所蔵作品の研究成果に基づいて、北脇昇、近藤浩一、今村紫紅らの作家の小企画展や、大正期の東京の文化的土壌や、コラージュという手法が近代美術に開いた新展開などについて小企画展を実施する。また、横山大観(生々流転)の全巻展示を実施する。企画展は、時代(戦前・戦後)、地域(国内・海外)、ジャンル(絵画・彫刻・写真等)のバランスを考慮しつつ編成する。具体的には、戦後活躍した日本画家の回顧展(「東山魁夷展」)、建築家のドローイング展(「建築が生まれるとき ベーター・メルクリと青木淳」展)、メディアアートなど最先端の表現を含む現代美術展(「エモーション・ドローイング」及び「ヴィデオ・アート展」)、これまで取り上げられる機会の少なかった沖縄美術の展覧会、日本人写真家の個展(「高梨豊展」)などを開催する。          目標入館者数計:51万3千4百人          ア 所蔵作品展 目標入館者数計:19万8千人          「近代日本の美術」展 5回展示替え          10回程度の小・中規模の特集展示          イ 企画展 目標入館者数計:31万5千4百人          (ア)「東山魁夷展」 目標入館者数:27万2千人(うち平成20年度25万3千人)          (イ)「建築が生まれるとき ベーター・メルクリと青木淳」 目標入館者数:1万6千人          (ウ)「現代美術への視点」エモーション・ドローイング; 目標入館者数:1万5千人          (エ)「沖縄から」沖縄へのまなざし; 目標入館者数:1万5千人          (オ)「高梨豊展」 目標入館者数:1万6千人          (カ)「ヴィデオ・アート展」 目標入館者数:2万2千人(うち平成20年度4千人)          &lt;工芸館&gt;          所蔵作品展では、素材分野や主題などによって特集展示を</p>		<p>(イ) 国際的視野に立ち、海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。          (ロ) 展覧会テーマの設定やその提示方法等について新しい方向性を示すことに努める。          (ハ) メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。          (ニ) 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に努める。          なお、企画展の開催回数は概ね以下のとおりとする。          (東京国立近代美術館)          本館 年3回～5回程度          工芸館年2回～3回程度          フィルムセンター 年5番組～6番組程度          (京都国立近代美術館)          年6回～7回程度          (国立西洋美術館)          年3回程度          (国立国際美術館)          年5回～6回程度          (国立新美術館)          年6回～7回程度          (公募展を除く。)</p>					<p>A</p> <p>・近現代美術の通史が俯瞰できる展示が行われている。さらに、冒険的精神を反映する建築と素描、メディアの横断的な試みなどについては、コレクション展(常設展)の可能性を開拓する意欲が十分うかがえ、その成果は高く評価できる。          ・コレクション展(常設展)への入館者数が前年度に比べ50%増加したことや、来館者の反応には、各館の努力による成果が反映され、高く評価できる。</p> <p>【よりよい事業とするための意見】          ・名品の展示を基軸にしたコレクション展においては、美術館の存在をアピールするためにも、一層ヴァリエーションに富んだ所蔵品の活用を図ることが望まれる。          ・広報においては、ホームページを活用し、コレクション展の内容や特徴、コメントなどを追記するなど、より一層の充実を望む。</p>																																				

<p>-4各館で展覧会を開催するにあたっては、実施目的、期待する成果、学術的意義を明確にし、専門家等からの意見を聞くとともに、入館者に対するアンケート調査を実施、そのニーズや満足度を分析し、それらを展覧会に反映させることにより、常に魅力あるものとなるよう努める。</p> <p>-5 各館の連携による共同企画展の実施について検討し推進する。</p> <p>地方における鑑賞機会の充実、所蔵作品の効果的活用を図る観点から、地方のニーズを反映させた地方巡回展を積極的に行う。</p> <p>また、公立文化施設等と連携協力して、所蔵映画フィルムによる優秀映画鑑賞会を実施する。</p> <p>入館者数については、各館で行う展覧会ごとに実施目的、想定する入館者層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境の確保、広報活動、過去の入館者等の状況等を踏まえて入館者数の目標を設定し、その達成に努める。</p> <p>映画フィルム、資料の所蔵作品を活用した上映、展示等の活動に重点的に取り組む。</p>	<p>行う、具体的には、花の主題と人形作品による「近代工芸の名品 花と人形」、近年の収集で充実してきたアール・デコやモダンデザイン作品を中心としたコレクションによる「ヨーロッパの近代工芸とデザイン/新収蔵品2006-07、夏休み企画としての「こども工芸館」、漆と木竹の名品を特集する「うるし・木竹/近代工芸の名品」展を開催する。夏季に開催する「こども工芸館」では会場に参考資料等を設置するとともに、セルフガイドの作成、鑑賞教室を実施するなど小・中学生にも親しみやすい内容を提供するほか、教員研修を行うなど教育機関との連携を深めよう努める。</p> <p>企画展では、これまで日本ではあまり知られていないイタリア現代陶芸の4大巨匠の筆頭である陶芸家、カルロ・ザウリの全貌を紹介する初めての回顧展を開催する(会場:本館)とともに、戦後のクラフト・デザイン、ジュエリー制作で戦後工芸界をリードしてきた平松保城の回顧展、現代デザイン展として陶磁器デザイナーの小松誠の主要な作品を紹介する展覧会を開催する。</p> <p>目標入館者数計:7万7千人 ア 所蔵作品展 目標入館者数計:4万9千人 「近代工芸の名品」:5回展示替え イ 企画展 目標入館者数計:2万9千人 (ア)「カルロ・ザウリ展 イタリア現代陶芸の巨匠」 目標入館者数:1万人 (イ)「平松保城展」 目標入館者数:9千人 (ウ)「小松誠展」 目標入館者数:1万人 &lt;フィルムセンター&gt; 上映会では、収集と研究の成果に基づいて映画人や製作陣、ジャンルなどのテーマ別に企画上映を実施する。所蔵作品を活用した上映会と海外同種機関との連携により外国作品を紹介する上映会を開催する。また、外国映画の紹介などで映画文化に多大な貢献をした川喜多かしの生誕100年を記念した上映会を開催するほか、日本の映画産業の枠外で製作された日本映画を取り上げるシリーズの第1回として「びあフィルム・フェスティバルの30年」を開催する。</p> <p>展覧会では、ステル写真やポスターの所蔵コレクションを活用しつつ、文学という切り口を導入した「映画の中の日本文学Part1」や、ソ連時代初期の貴重なオリジナル・ポスターによる「無声時代ソビエト映画ポスター展」を開催する。また、上述の上映会と関連させて「川喜多かし展」を開催する。</p> <p>上映会 展覧会 目標入館者数計:12万2千人 ア 上映会 目標入館者数計:11万1千人(大ホール) (ア)「ルノワール+ルノワール展、開催記念 ジャン・ルノワール映画の世界 ジャン・ルノワール監督名作選」 目標入館者数:9千人 (イ)「発掘された映画たち2008」 目標入館者数:1万人 (ウ)「EUフィルムデーズ2008」 目標入館者数:1千人 (エ)「スターと監督 長谷川一夫と衣笠貞之助」 目標入館者数:1万5千5百人 (オ)「生誕100年 川喜多かしとヨーロッパ映画の黄金時代」 目標入館者数:2万5千人 (カ)「生誕110周年 スターと監督 大河内傳次郎と伊藤大輔」 目標入館者数:1万2千人 (キ)「第9回東京フィルメックス 特集上映」 目標入館者数:3千5百人 (ク)「生誕百年 映画監督 亀井文夫」 目標入館者数:4千人 (ケ)「カナダアニメーション映画名作選」 目標入館者数:2千人 (コ)「日本オランダ年2008-2009 オランダ映画祭」 目標入館者数:3千人 (サ)「日本映画史横断 怪獣SF映画特集」 目標入館者数:1万2千5百人(小ホール) (シ)「映画の中の日本文学Part1」 目標入館者数:1千5百人 (ス)「EUフィルムデーズ2008」 目標入館者数:2千人 (セ)「日本インディペンデント映画史シリーズ びあフィルム・フェスティバルの30年」 目標入館者数:4千人 (ソ)「アンコール特集:2007年度上映作品より」 目標入館者数:2千人 (タ)「映画の教室2008」 目標入館者数:2千5百人 (チ)「アメリカ映画史研究」 目標入館者数:1千5百人 イ 展覧会 目標入館者数計:1万1千人 (ア)「映画資料でみる 映画の中の日本文学Part1」(併設:「展覧会 映画遺産」) 目標入館者数:4千人 (イ)「生誕100年記念 川喜多かし展」(併設:「展覧会 映画遺産」) 目標入館者数:4千5百人 (ウ)「無声時代ソビエト映画ポスター展」(併設:「展覧会 映画</p>	<p>また、京都教育大学との連携によって、「『書』ことと『描』ことの間-京近美コレクションとこどもたちの出会い-」展をコレクション・ギャラリーの一部を使用して開催するとともに、関連シンポジウムも開催し、「学習支援」の観点から外部機関との連携を行った。</p> <p>ウ 国立西洋美術館 松方コレクション(印象派の絵画及びロダンの彫刻を中心とするフランス美術コレクション)を中心に中世末期から20世紀初頭にかけての西洋美術に関する作品の中から、絵画、素描、版画、彫刻等約100点の作品を選び、西洋美術の流れを概観できる展示を行った。なお、平成19年9月14日以降は、新館空調改修工事のため、新館展示室を閉鎖して所蔵作品展の規模を縮小し、本館及び前庭における展示のみで行った。</p> <p>平成20年度より、所蔵作品展の作品リスト(日本語版及び英語版)を作成し、所蔵作品展会場内での配布はもとより、展示作品の入替えにあわせて更新を行い、ホームページに掲載される所蔵作品展情報とともに、展示作品に関する正確な情報を来館者に提供できるよう努めた。</p> <p>また、所蔵作品展の作品解説を増やしてほしい、英語の作品解説がほしいという来館者の要望に応えるため、「美術展示物の鑑賞を助ける音声・映像案内の高度化にかかる調査研究事業」(文化庁委託業務)により、端末にiPod touchを用いて、美術館を訪れる幅広い年齢を想定した新たなガイドシステムを試作り、実証実験を行った結果、今後の美術展示物の音声・映像案内における一つのモデル・ケースを確立した。</p> <p>エ 国立国際美術館 平成20年度の所蔵作品展は、言葉とモノをテーマとし、美術作品において日常の事物や言葉がどのように取り扱われているかを紹介した「コレクション1」、「コレクション2」では、同時開催の企画展「塩田千春 精神の呼吸」展にあわせて、皮膚に残った傷跡が時間や記憶を感じさせる石内都と、塩田が在住しているベルリンの廃墟などを撮影し、記憶の問題に取り組んでいる宮本隆司の二人を選び、塩田とゆるやかに共通するテーマをもつ作家の作品を同時に観ること、鑑賞体験がより豊かなものとなることを狙った。「コレクション3」では、同時開催の特別展「アジアとヨーロッパの肖像 SELF and OTHER」展にあわせて、「肖像」をテーマに「人物」、「都市」、「美術館」の肖像表現を扱ったが、さらに展示室ごとにテーマを設定し、リーフレットに記載することで、内容が分かりにくい作品の鑑賞の手助けとなるよう努めた。</p>	<p>..... A ..... ・入館者数の多寡とは別に、企画性や視点の斬新さが見られる展覧会が実現され、各館とも、それぞれ特色ある充実した内容であった。なかでも、伝統的な企画と、作品領域を横断する野心的な企画とが、それぞれ高水準な展覧会となっており、充実した年間活動は特筆に値する。</p> <p>・フィルムセンターの上映企画についても、多様に企画されており評価に値する。</p> <p>・ホームページにおけるアートコモンズ、「想-IMAGINE」等の充実は際立っており、単なる情報獲得にとどまらず、人文知への関心を新たに展開させる機能も持ち、その点でも、アクセス件数の増加は、高く評価できる。</p> <p>・満足度の相対的に高さ、アクセス数の驚異的な多さは、国立美術館への期待が大きいことを物語っていると判断できる。</p> <p>【よりよい事業とするための意見】 本年の意欲的な試みをさらに今後も継承していくことが望まれる。一方、昨今の社会動向と経済状況に鑑み、企業の姿勢も近い将来変化が予想され、わが国独自の展覧会システムである、いわゆる「共催展」のあり方を、法人はもとより各方面から素直に検討することが望まれる。</p>																																																																																																																	
<p>展覧会への取組(企画展) 【定性的に評価】</p>	<p><b>企画展</b> 企画展は、利用者のニーズに応え、以下の観点に留意して実施した。</p> <p>イ 国際的視野に立ち、海外の主要美術館と連携し、確固たる評価を得ている世界の美術を紹介するとともに、我が国の作家や芸術的動向を海外に紹介する展覧会等に積極的に取り組む。</p> <p>ロ 展覧会テーマの設定やその提示方法等について新しい方向性を示すことに努める。</p> <p>ハ メディアアート、アニメ、建築など我が国が世界から注目される新しい領域の芸術表現を積極的に取り上げ、最先端の現代美術への関心を促す。</p> <p>ニ 過去の埋もれていた作家・作品・動向の発見や再評価に努める。</p> <p>ホ その他</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>展覧会名</th> <th>開催日数</th> <th>入館者数</th> <th>目標数</th> <th>企画趣旨</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="10">東京国立近代美術館(本館)</td> <td>生誕100年 東山魁夷展</td> <td>44</td> <td>256,486</td> <td>253,000</td> <td>□</td> </tr> <tr> <td>建築がうまれるとき ベーター・メルクリと青木淳</td> <td>54</td> <td>19,970</td> <td>16,000</td> <td>□,ハ</td> </tr> <tr> <td>現代美術への視点6エモーショナル・ドロ잉</td> <td>43</td> <td>13,459</td> <td>15,000</td> <td>□,ハ</td> </tr> <tr> <td>沖繩・プリズム1872-2008</td> <td>45</td> <td>10,554</td> <td>15,000</td> <td>□</td> </tr> <tr> <td>高梨豊 光のフィールドノート</td> <td>42</td> <td>9,449</td> <td>16,000</td> <td>ニ,ホ</td> </tr> <tr> <td>ビデオを待ちながら 映像,60年代から今日へ</td> <td>1</td> <td>115</td> <td>400</td> <td>□,ハ</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>229</td> <td>310,033</td> <td>315,400</td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="3">東京国立近代美術館(工芸館)</td> <td>カルロ・ザウリ展 イタリア現代陶芸の巨匠</td> <td>42</td> <td>11,676</td> <td>10,000</td> <td>ニ</td> </tr> <tr> <td>かたちのエッセンス 平松保城のジュエリー</td> <td>56</td> <td>12,969</td> <td>9,000</td> <td>イ</td> </tr> <tr> <td>小松誠 デザイン+ユーモア</td> <td>48</td> <td>12,791</td> <td>10,000</td> <td>□</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>146</td> <td>37,436</td> <td>29,000</td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="10">京都国立近代美術館</td> <td>生誕100年記念 秋野不矩展</td> <td>31</td> <td>56,307</td> <td>21,000</td> <td>ホ</td> </tr> <tr> <td>ART RULES KYOTO</td> <td>13</td> <td>3,469</td> <td>3,000</td> <td>ハ,ホ</td> </tr> <tr> <td>ルノワール+ルノワール</td> <td>55</td> <td>182,354</td> <td>201,000</td> <td>イ,□</td> </tr> <tr> <td>「日本画」再考への序章 没後10年 下村良之介展</td> <td>30</td> <td>12,714</td> <td>10,000</td> <td>□,ニ</td> </tr> <tr> <td>没後30年 W・ユージン・スミスの写真</td> <td>30</td> <td>15,345</td> <td>10,000</td> <td>ニ</td> </tr> <tr> <td>生活と芸術 アーツ&amp;クラフツ展 ウィリアム・モリスから民芸まで</td> <td>50</td> <td>63,810</td> <td>75,000</td> <td>イ</td> </tr> <tr> <td>現代美術への視点-エモーショナル・ドロ잉</td> <td>30</td> <td>10,776</td> <td>13,000</td> <td>ハ</td> </tr> <tr> <td>「上野伊三郎+リチ コレクション展」ウィーンから京都へ、建築から工芸へ</td> <td>30</td> <td>12,375</td> <td>14,000</td> <td>ニ</td> </tr> <tr> <td>椿昇 2004-2009: GOLD/WHITE/BLACK</td> <td>36</td> <td>8,577</td> <td>13,000</td> <td>□,ハ</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>305</td> <td>365,727</td> <td>360,000</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	館名	展覧会名	開催日数	入館者数	目標数	企画趣旨	東京国立近代美術館(本館)	生誕100年 東山魁夷展	44	256,486	253,000	□	建築がうまれるとき ベーター・メルクリと青木淳	54	19,970	16,000	□,ハ	現代美術への視点6エモーショナル・ドロ잉	43	13,459	15,000	□,ハ	沖繩・プリズム1872-2008	45	10,554	15,000	□	高梨豊 光のフィールドノート	42	9,449	16,000	ニ,ホ	ビデオを待ちながら 映像,60年代から今日へ	1	115	400	□,ハ	計	229	310,033	315,400		東京国立近代美術館(工芸館)	カルロ・ザウリ展 イタリア現代陶芸の巨匠	42	11,676	10,000	ニ	かたちのエッセンス 平松保城のジュエリー	56	12,969	9,000	イ	小松誠 デザイン+ユーモア	48	12,791	10,000	□	計	146	37,436	29,000		京都国立近代美術館	生誕100年記念 秋野不矩展	31	56,307	21,000	ホ	ART RULES KYOTO	13	3,469	3,000	ハ,ホ	ルノワール+ルノワール	55	182,354	201,000	イ,□	「日本画」再考への序章 没後10年 下村良之介展	30	12,714	10,000	□,ニ	没後30年 W・ユージン・スミスの写真	30	15,345	10,000	ニ	生活と芸術 アーツ&クラフツ展 ウィリアム・モリスから民芸まで	50	63,810	75,000	イ	現代美術への視点-エモーショナル・ドロ잉	30	10,776	13,000	ハ	「上野伊三郎+リチ コレクション展」ウィーンから京都へ、建築から工芸へ	30	12,375	14,000	ニ	椿昇 2004-2009: GOLD/WHITE/BLACK	36	8,577	13,000	□,ハ	計	305	365,727	360,000		<p>..... A .....</p>
館名	展覧会名	開催日数	入館者数	目標数	企画趣旨																																																																																																															
東京国立近代美術館(本館)	生誕100年 東山魁夷展	44	256,486	253,000	□																																																																																																															
	建築がうまれるとき ベーター・メルクリと青木淳	54	19,970	16,000	□,ハ																																																																																																															
	現代美術への視点6エモーショナル・ドロ잉	43	13,459	15,000	□,ハ																																																																																																															
	沖繩・プリズム1872-2008	45	10,554	15,000	□																																																																																																															
	高梨豊 光のフィールドノート	42	9,449	16,000	ニ,ホ																																																																																																															
	ビデオを待ちながら 映像,60年代から今日へ	1	115	400	□,ハ																																																																																																															
	計	229	310,033	315,400																																																																																																																
	東京国立近代美術館(工芸館)	カルロ・ザウリ展 イタリア現代陶芸の巨匠	42	11,676	10,000	ニ																																																																																																														
		かたちのエッセンス 平松保城のジュエリー	56	12,969	9,000	イ																																																																																																														
		小松誠 デザイン+ユーモア	48	12,791	10,000	□																																																																																																														
計	146	37,436	29,000																																																																																																																	
京都国立近代美術館	生誕100年記念 秋野不矩展	31	56,307	21,000	ホ																																																																																																															
	ART RULES KYOTO	13	3,469	3,000	ハ,ホ																																																																																																															
	ルノワール+ルノワール	55	182,354	201,000	イ,□																																																																																																															
	「日本画」再考への序章 没後10年 下村良之介展	30	12,714	10,000	□,ニ																																																																																																															
	没後30年 W・ユージン・スミスの写真	30	15,345	10,000	ニ																																																																																																															
	生活と芸術 アーツ&クラフツ展 ウィリアム・モリスから民芸まで	50	63,810	75,000	イ																																																																																																															
	現代美術への視点-エモーショナル・ドロ잉	30	10,776	13,000	ハ																																																																																																															
	「上野伊三郎+リチ コレクション展」ウィーンから京都へ、建築から工芸へ	30	12,375	14,000	ニ																																																																																																															
	椿昇 2004-2009: GOLD/WHITE/BLACK	36	8,577	13,000	□,ハ																																																																																																															
	計	305	365,727	360,000																																																																																																																

遺産) 目標入館者数: 2千5百人  
(京都国立近代美術館)  
所蔵作品展については、関西を中心とした近・現代美術の調査・研究成果の公開を主とするとともに、「ルノワール・ルノワール」「アーツ&クラフツ展」「上野伊三郎・リチ コレクション」などの企画展と連動する、テーマ性の高い小企画をより充実させる。  
企画展については、近代日本変革運動「バリエール美術協会」の中心作家の一人「下村良之介」の回顧、工芸では国際アーツ&クラフツ運動の中での日本の民芸運動の貢献を検証、建築・デザインでは日本近代建築黎明期の中心の一人であった上野伊三郎の業績をウィーン工房との関係で再評価するなど、日本作家を国際動向との相関において研究した成果を、建築空間の再構成などにより、鑑賞者に理解されやすいよう展示の工夫を行う。また、最新メディア・アート的重要作家「梶井」を特別展として開催する。  
目標入館者数計: 59万1千人  
ア 所蔵作品展 目標入館者数計: 23万1千人  
コレクション展「近代の美術・工芸・写真」(306日間)8回  
展示替え  
企画展と関連した小企画及びコレクション展単独での特集企画  
イ 企画展 目標入館者数計: 36万人  
(ア)「生誕100年記念 秋野不矩展」  
目標入館者数: 2万1千人  
(イ)「ART RULES KYOTO」 目標入館者数: 3千人  
(ウ)「ルノワール・ルノワール」 目標入館者数: 20万1千人  
(エ)「没後10年 下村良之介展」 目標入館者数: 1万人  
(オ)「没後30年 ユージン・スマスの写真展」  
目標入館者数: 1万人  
(カ)「生活と芸術 アーツ&クラフツ展」  
目標入館者数: 7万5千人  
(キ)「現代美術への視点6 エモーション・ドローイング」  
目標入館者数: 1万3千人  
(ク)「上野伊三郎・リチ コレクション」新収蔵記念 ウィーンから京都へ、建築から工芸へ 目標入館者数: 1万4千人  
(ケ)「梶井展」 目標入館者数: 1万3千人  
(国立西洋美術館)  
所蔵作品展では、美術館コレクションの中核である松方コレクションを中心に据えつつ、中世末期以降20世紀初頭に到る西洋美術の流れを概観できる展示を行う。また、所蔵作品を多様な視点から楽しむプログラムとして宗教・芸術家・修復をテーマにした「Funwith Collection'08」を開催し、「児童・生徒向けプログラム等を実施する。企画展では、西洋美術史上の傑作として名高いティツィアーノの「ウルビーノのヴィーナス」を中心にイタリア美術におけるヴィーナス図像の系譜を網羅的に紹介する「ウルビーノのヴィーナス展」、フランスの風景画の巨匠コロッセが20世紀にまで与えた影響を回顧する「コロッセ」、日本で初めての本格的な紹介となるデンマーク19世紀末の画家「ハンマースホイ展」、ルーヴル美術館から17世紀のヨーロッパ絵画を集めた「17世紀ヨーロッパ絵画展」を開催する。  
目標入館者数計: 75万人  
ア 所蔵作品展 目標入館者数計: 25万人  
「ルネッサンス以降のヨーロッパ近世絵画」  
「近・現代絵画と彫刻」  
Fun with Collection'08(平成20年7～8月)  
イ 企画展 目標入館者数計: 50万人  
(ア)「ウルビーノのヴィーナス 古代からルネサンス、美の女神の系譜」  
目標入館者数: 24万人(うち平成20年度18万人)  
(イ)「コロッセ 光と追憶の変奏曲」 目標入館者数: 20万人  
(ウ)「ヴィルヘルム・ハンマースホイ」 目標入館者数: 6万人  
(エ)「ルーヴル美術館 17世紀ヨーロッパ絵画展」  
目標入館者数: 42万人(うち平成20年度6万人)  
(国立国際美術館)  
所蔵作品展については、同時開催の企画展の内容に関連付けた作品を展示するほか、代表的な作品の展示を行う。  
企画展については、現在、世界で最も注目されている中国の現代美術を歴史的な視点を含めながら紹介する展覧会を開催するとともに、アジアとヨーロッパの古今の美術を自己と他者との関係の中に捉える展覧会を国立民族学博物館と共同開催する。  
また、独自の会場構成で知られる若手作家の塩田千春の近作を紹介するほか、新しいメディアアートの現況を示す「液晶絵画Still/Motion」展並びに近代絵画の巨匠「モディリアーニ」の回顧展を開催し、幅広い観客層の関心に応じる。  
目標入館者数計: 43万1千人  
ア 所蔵作品展 目標入館者数計: 15万7千人  
「コレクション1-4」4回展示替え

館名	展覧会名	開催日数	入館者数	目標数	企画趣旨	
国立西洋美術館	ウルビーノのヴィーナス 古代からルネサンス、美の女神の系譜	43	158,343	180,000	イ	
	コロッセ 光と追憶の変奏曲	69	286,173	200,000	イ、ロ	
	ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情	60	179,556	60,000	イ	
	ルーヴル美術館展 17世紀ヨーロッパ絵画	27	216,758	60,000	イ、ロ	
	計	199	840,830	500,000		
国立国際美術館	エミリー・ウングワレー展 アポリジニが生んだ天才画家	12	12,013	4,000	イ	
	液晶絵画 Still/Motion	43	32,167	15,000	ハ	
	モディリアーニ展	67	174,297	100,000	イ、ロ	
	塩田千春 精神の呼吸	67	185,088	100,000	ロ	
	アジアとヨーロッパの肖像 SELF and OTHER	49	27,922	15,000	イ、ロ、ニ	
	新国誠一の 具体詩 詩と美術のあいだに	85	20,813	20,000	ニ	
	アヴァンギャルド・チャイナ <中国当代美術>二十年	83	17,759	20,000	イ	
		計	406	470,059	274,000	
	国立新美術館	アーティスト・ファイル2008 現代の作家たち	31	16,818	15,000	ホ
モディリアーニ展	60	243,381	182,000	イ		
エミリー・ウングワレー展 - アポリジニが生んだ天才画家 -	54	100,221	50,000	イ		
ウィーン美術史美術館所蔵静物画の秘密展	66	132,403	150,000	イ、ロ		
アヴァンギャルド・チャイナ - <中国当代美術>二十年 -	54	18,570	50,000	イ		
巨匠ピカソ 愛と創造の軌跡	62	312,390	250,000	イ		
DOMANI・明日展2008 - 未来を担う美術家たち	28	14,985	15,000	ホ		
加山又造展	36	123,065	100,000	ロ		
平成20年度(第12回)文化庁メディア芸術祭	11	51,505	20,000	ハ		
アーティスト・ファイル2009 - 現代の作家たち	24	18,493	12,000	ホ		
ルーヴル美術館展 美の宮殿の子どもたち	6	20,641	20,000	イ		
	計	432	1,052,472	864,000		
合計		1,717	3,076,557	2,342,400		

巡回展					
企画展	展覧会名	開催館	開催日数	入館者数	
東京国立近代美術館	名作と出会う 明治・大正・昭和の美術	福井県立美術館	29	7,126	
	展覧会巡回展	高知県立美術館	65	8,810	
東京国立近代美術館(工芸館)	感じる鼓動 東京国立近代美術館所蔵人形展	碧南市藤井達吉現代美術館	41	7,324	
		佐野美術館	33	5,900	
東京国立近代美術館(フィルムセンター)	平成20年度優秀映画鑑賞推進事業	全国193会場	343 (延べ日数)	100,232	
	「川喜多かしこ生誕100年記念」日本映画海外巡回特集上映	9会場	42	20,994	
	「生誕百年 映画監督 マキノ雅弘」巡回事業	2会場	8	833	
	日本アニメーション映画史	1会場	6	-	
計			567	151,219	

東京国立近代美術館フィルムセンター映画上映等  
【上映会】

タイトル	会場	上映回数	日数	入館者数	目標数	企画趣旨
「ルノワール・ルノワール展」開催記念 ジャン・ルノワール映画の世界 ジャン・ルノワール監督名作選	大ホール	40	20	8,566	9,000	イ・ホ
発掘された映画たち2008	大ホール	56	28	6,047	10,000	ロ・ニ
EUフィルムフェーズ2008	大ホール・小ホール	36	18	4,906	3,000	ホ
スターと監督 長谷川一夫と衣笠貞之助	大ホール	126	42	19,434	15,500	ロ・ニ
生誕100年 川喜多かしこヨーロッパ映画の黄金時代	大ホール	171	57	29,163	25,000	ホ

イ 企画展 目標入館者数計：27万4千人  
 (ア)「エミリー・ウングラー展 - アポリジニが生んだ天才画家 -」 目標入館者数：1万4千人(うち平成20年度4千人)  
 (イ)「液晶絵画Still/Motion」 目標入館者数：1万5千人  
 (ウ)「モデリアーニ展」 目標入館者数：10万人  
 (エ)「塩田千春 精神の呼吸」 目標入館者数：10万人  
 (オ)「アジアとヨーロッパの肖像 Self and Other」 目標入館者数：1万5千人  
 (カ)「アヴァンギャルド・チャイナ - <中国当代美術>二十年 -」 目標入館者数：2万人  
 (キ)「新園誠一の(具体詩)」 目標入館者数：2万人  
 (国立新美術館)

自主企画展においては、近年世界的に注目を集めている中国の1980年代以降の現代美術を紹介する「アヴァンギャルド・チャイナ展」、日本と世界の新しい現代美術の現況について若手作家の先鋭な活動を毎年定期的にグループ展で紹介する「アーティスト・ファイル」(2008、2009)を開催し、現代の多様な美術動向の紹介に努める。

共催展においては、広く近現代美術を対象とし、新たな視点による展覧会を実現する。

オーストラリアのアポリジニ出身の現代作家による個展やモデリアーニやピカソといった近代の巨匠の全貌を紹介する回顧展、ウィーン美術史美術館のコレクションを通じてヨーロッパの静物画の成立と展開を探る展覧会の開催。また、国内では伝統的な表現や美意識を現代的な感性と融合させ高い評価を受けた加山又造の回顧展を開催し、国内外の優れた作品を幅広く紹介する。

目標入館者数計：86万4千人  
 (ア)「アーティスト・ファイル2008 - 現代の作家たち」 目標入館者数：2万7千人(うち平成20年度1万5千人)  
 (イ)「モデリアーニ展」 目標入館者数：20万人(うち平成20年度18万2千人)  
 (ウ)「エミリー・ウングラー展 - アポリジニが生んだ天才画家 -」 目標入館者数：5万人  
 (エ)「ウィーン美術史美術館所蔵 静物画の秘密」 目標入館者数：15万人  
 (オ)「アヴァンギャルド・チャイナ - <中国当代美術>二十年 -」 目標入館者数：5万人  
 (カ)「巨匠ピカソ - 愛と創造の軌跡」 目標入館者数：25万人  
 (キ)「DOMANI」 明日展2008 - 未来を担うアーティスト」 目標入館者数：1万5千人  
 (ク)「加山又造展」 目標入館者数：10万人  
 (ケ)「平成20年度(第12回)「文化庁メディア芸術祭」 目標入館者数：2万人  
 (コ)「アーティスト・ファイル2009」 目標入館者数：2万7千人(うち平成20年度1万2千人)  
 (サ)「ルーヴル美術館展 ルーヴルの子供たち」 目標入館者数：20万人(うち平成20年度2万人)  
 国立美術館 目標入館者数計：334万8千4百人  
 所蔵作品展(展示)：89万5千人  
 企画展(企画上映)：245万3千4百人

-2 企画機能強化のため、各館における展覧会企画等について連絡・調整を行うとともに、各館の企画・連携のあり方を検討する。

-3 平成22年度に国立新美術館において開催予定の、国立美術館全体の所蔵作品を最大限に活かした展覧会について、具体的な企画の内容や運営方法の検討を行う。

地方における鑑賞機会の充実を図るため、全国の公私立美術館等と連携して、地方巡回展を行うとともに、全国の公立文化施設等を会場にして優秀映画鑑賞推進事業を実施する。

ア 国立美術館巡回展  
 「近代日本洋画のながれ」(担当館：東京国立近代美術館)  
 国立美術館が所蔵する主要な洋画作品のうち、明治期から昭和戦前期の代表的作品を展示し、近代日本美術の流れを紹介する。  
 (ア)期間：平成20年11月14日(金)～12月14日(日)  
 会場：福井県立美術館  
 (イ)期間：平成20年12月21日(日)～平成21年3月1日(日)  
 会場：高知県立美術館

イ 各館の巡回展  
 (ア)巡回展「東京国立近代美術館工芸館所蔵 人形、東京国立近代美術館工芸館が所蔵する、人形作品を展示し、昭和初期から現代までの人形作品の変遷や現代の人形制作をめぐる動向などを紹介する。  
 a 期間：平成20年12月23日(火・祝)～平成21年2月15日(日)

生誕110周年 スターと監督 大河内傳次郎と伊藤大輔	大ホール	112	39	15,990	12,000	二
第9回東京フィルメックス 特集上映 蔵原惟繕監督特集 ～狂熱の季節～	大ホール	24	8	3,000	3,500	イ・二
生誕百年 映画監督 亀井文夫	大ホール	46	23	4,704	4,000	二
日本映画史横断 怪獣・SF映画特集	大ホール	84	42	11,616	12,500	二
日本オランダ年2008-2009 オランダ映画祭2009	大ホール	36	18	3,465	3,000	イ・八
カナダ・アニメーション映画名作選	大ホール	24	12	1,778	2,000	イ・八
映画の中の日本文学 Part 1	小ホール	18	9	2,450	1,500	ロ
日本インディペンデント映画史シリーズ PFF30回記念 ぴあフィルムフェスティバルの軌跡 vol.1	小ホール	44	22	1,302	4,000	ロ・二
アンコール特集：2007年度上映作品より	小ホール	18	9	2,278	2,000	ホ
映画の教室2008	小ホール	18	9	1,692	2,500	ホ
アメリカ映画史研究	小ホール	18	9	1,720	1,500	イ・二
計		871	365	118,111	111,000	

【展覧会】

展覧会名	日数	入館者数	目標数	企画趣旨
映画資料でみる 映画の中の日本文学 Part 1	93	3,946	4,000	ロ・二
生誕100年 川喜多かしこ展	127	5,709	4,500	ロ
無声時代ソビエト映画がスター展	70	4,251	2,500	イ・ロ
計	290	13,906	11,000	

- S:特に優れた実績を上げている。(客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評価を付す。)
- F:評価委員会として業務運営の改善その他の勧告を行う必要がある。(客観的基準は事前に設けず、業務改善の勧告が必要と判断された場合に限りFの評価を付す。)

<p>会場：碧南市藤井達吉現代美術館（愛知県） b 期間：平成21年2月21日（土）～3月末日頃 会場：佐野美術館（静岡県） （イ）国立西洋美術館は、版画コレクションによる地方巡回展について、平成21年度・22年度の巡回先を募集する。 ウ 優秀映画鑑賞推進事業 国民の映画文化や映画芸術への関心を高め、映画フィルム保存の重要性について、理解を促進するため、文化庁との共催事業として、教育委員会、公共文化施設等と連携・協力して、全国各地で映画の巡回上映を実施する。 プログラム：88作品21プログラム（1プログラム4作品） 日本映画史を彩る名匠たちの代表作や、スターが活躍するヒット作、時代劇、青春映画などジャンルごとにそれを代表する名作、時代を画した話題作などで構成する。同時に、地域の特色を持った構成を工夫する。 期間：平成20年7月14日（月）～平成21年3月15日（日） 会場：全国130会場以上 国立美術館は、展覧会ごとに実施目的、想定する入館者層、実施内容、学術的意義、良好な観覧環境の確保、広報活動、過去の入館者等の状況等を踏まえて入館者数の目標を設定し、その達成に努める。</p>	東京国立近代美術館（本館） （工芸館）	1	3回以上 2回以上	3回未満 2回未満	2	実績：6回 （前年度実績：7回） 実績：3回 （前年度実績：3回）	A A
	(フィルムセンター)		5番組以上	4番組	4番組未満	実績：16番組 （前年度実績：15番組）	A
	京都市立近代美術館		6回以上	5回	5回未満	実績：9回 （前年度実績：11回）	A
	国立西洋美術館		3回以上		3回未満	実績：4回 （前年度実績：4回）	A
	国立国際美術館		5回以上	4回	4回未満	実績：7回 （前年度実績：7回）	A
	国立新美術館		6回以上	5回	5回未満	実績：11回 （前年度実績：11回）	A

(2)美術創造活動の活性化の推進  
国立新美術館は、全国的な活動を行っている美術団体等に展覧会会場の提供を行うとともに、新しい美術の動向を紹介することなどを通じて、美術に関する新たな創造活動の展開やアーティストの育成等を支援し、我が国の美術創造活動の活性化を推進すること。  
また、メディアアート、アニメ、建築など世界から注目される新しい芸術表現の国内外に向けた拠点的な役割を果たすことを目指し、その取組みを積極的に進めること。

<p>(2)美術創造活動の活性化の推進 国立新美術館は、全国的な活動を行っている美術団体等に展覧会会場の提供を行うとともに、新しい美術の動向を紹介することなどを通じて、美術に関する新たな創造活動の展開やアーティストの育成等を支援し、我が国の美術創造活動の活性化を推進すること。 また、メディアアート、アニメ、建築など世界から注目される新しい芸術表現の国内外に向けた拠点的な役割を果たすことを目指し、その取組みを積極的に進める。</p>	<p>(2)美術創造活動の活性化の推進 国立新美術館は、美術団体等が行う展覧会(公募展)に対して、会場を提供する業務を行う。 ア 平成20年度及び平成21年度に施設を使用する美術団体(ア)平成20年度に施設を使用する美術団体等に会場を提供する。 （イ）美術団体等が作品搬入や審査等を行う作品整理室及び審査室等について、効率的な使用が可能となるよう利用調整を図る。 （ウ）使用についての手引き（資料や備品一覧）の検証を行い、効率的かつ円滑な実施が図られるよう充実に努める。 （エ）施設及び備品等の維持管理及び保全に関する態勢を整える。 （オ）美術団体等が行う展覧会の入館者数等の報告管理の態勢を整える。 （カ）美術団体等と連携した教育普及事業の態勢を整える。 イ 平成22年度以降の準備 （ア）平成22年度に施設を使用する美術団体等の決定 （イ）平成23年度に施設を使用する美術団体等の募集 ウ 平成19年度に施設を使用した美術団体等の展覧会開催状況等について実態を把握するためアンケート調査を実施する。 メディアアートなど、国際的にも注目される新しい領域の芸術表現作品の展覧会等について、以下のとおり実施する。 ア 東京国立近代美術館及び京都国立近代美術館では、メディアアートなど先端的な表現領域を探り上げる展覧会として「エモーションal・ドローイング」展を、また、東京国立近代美術館ではビデオアートの歴史と現状をテーマとした展覧会として「ビデオ・アート展」を開催する。 イ 東京国立近代美術館では、建築作品の生成過程に光を当て、ドローイングや模型による展覧会として「建築がうまれるとき ベーター・メルクリと青木淳」展を開催する。 ウ 京都国立近代美術館は、平成20年度にマルチメディアとロボット工学の成果を駆使する現代美術家・椿昇の個展を開催する。 また、欧米を拠点に活動するメディア・ミックスの女性作家グループ「チックス・オン・スピード」の映像と音楽のコンサートを核とした短期の展覧会を開催する。 「ルノワール・ノワール」において、会場内における絵画と映画との同時展示を試みる。 エ 国立西洋美術館は、建築専門の客員研究員を招へいし、本館の設計者で近代建築の巨匠であるル・コルビュジエについて、平成21年の資料展実施に向けて館内資料調査及び海外調査を進める。 オ 国立国際美術館は、ビデオによる表現の新たな可能性を</p>	<p>(2)美術創造活動の活性化の推進 <b>公募団体等への展覧会会場の提供（国立新美術館）</b> 公募展団体数：69団体 年間利用室数：延べ7,000室/年 稼働率：100% 入館者数：1,309,747人 公募団体等への展覧会会場の提供も2年目となり、受入体制の整備を進めてきたこと、また、公募団体等やその受託陳列業者も施設の使用等に慣れてきたこともあり、全体的に円滑な運営を行うことができた。 公募団体等との協議により以下のとおり取組みを行った。 ・前年度より公募団体等から寄せられた意見・要望も参考とし効果的、効率的な展覧会の実施が可能となるよう広範、多岐にわたる支援。 ・作品搬入のための車両の出入や駐車等の取り扱いについて、公募団体等に周知徹底を図った。特に前年度一部に混乱を生じた団体については事前に十分な協議を行い、再発を防止した。 ・審査台の補助台等の備品の充実を図った。 ・陳列・撤去等作業のための作品用エレベーターの使用時間の割振りや使用備品の事前配置等により展覧会準備の円滑化を図った。 ・施設の管理運営上問題を生じる可能性のある展示作品の素材については、事前に又は陳列作業中に公募団体等と協議を行い、運営上の問題の解消に努めた。 ・公募展サポートセンターへの指示・連絡を密に行い、公募団体等の作品搬入から陳列、撤去作業及び備品貸出並びに施設の管理等を一元的に管理ができる体制を整えることにより、公募展の円滑な運営をサポートした。 ・公募展サポートセンターでは、使用団体に関する問い合わせ及び電話取次等も行い、公募展が円滑に運営できる体制を整えた。 ・館内サインの見直しを行い、来館者に対する公募団体展等のポスター掲示場所の充実を図るとともに、展覧会開催案内のチラシ作成・配布の充実を図った。 ・同館ホームページのリニューアルを行い、公募展の周知方法の充実など広報の改善に努めた。</p> <p><b>新しい芸術表現への取組</b> 【東京国立近代美術館本館】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>展覧会名</th> <th>日数</th> <th>ジャンル</th> <th>入館者数</th> <th>目標数</th> <th>共催者</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>「建築がうまれるとき ベーター・メルクリと青木淳」(企画展)</td> <td>54</td> <td>建築</td> <td>19,970</td> <td>16,000</td> <td></td> </tr> <tr> <td>「現代美術への視点6 エモーションal・ドローイング」(企画展)</td> <td>43</td> <td>アニメーション</td> <td>13,459</td> <td>15,000</td> <td>京都国立近代美術館、国際交流基金</td> </tr> <tr> <td>「ビデオを待ちながら 映像、60年代から今日へ」(企画展)</td> <td>1</td> <td>ビデオ・アート</td> <td>115</td> <td>400</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>	展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者	「建築がうまれるとき ベーター・メルクリと青木淳」(企画展)	54	建築	19,970	16,000		「現代美術への視点6 エモーションal・ドローイング」(企画展)	43	アニメーション	13,459	15,000	京都国立近代美術館、国際交流基金	「ビデオを待ちながら 映像、60年代から今日へ」(企画展)	1	ビデオ・アート	115	400		<p>A</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・公募展への会場提供をはじめ、企画展の多彩な活動は意欲的であり、独自性を創り出そうとしている姿勢が大きく評価できる。</li> <li>・図書館やICT（情報通信技術）の活用は大きな成果をあげているほか、公募展サポートセンターの円滑な機能の確保など取り組みも多様であり、評価に値する。</li> </ul> <p>【よりよい事業とするための意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・身近なメディアを取込んで展示する姿勢を堅持することが望まれる。</li> <li>・立地性を生かすために、ショップにおいては、たとえばミニ展示、ミニファクション・ショウなど斬新な企画の検討が望まれる。</li> </ul>
展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者																						
「建築がうまれるとき ベーター・メルクリと青木淳」(企画展)	54	建築	19,970	16,000																							
「現代美術への視点6 エモーションal・ドローイング」(企画展)	43	アニメーション	13,459	15,000	京都国立近代美術館、国際交流基金																						
「ビデオを待ちながら 映像、60年代から今日へ」(企画展)	1	ビデオ・アート	115	400																							

<p>切り開きつつある国内外の作家を紹介し、新しいメディアアートの現状を示す「液晶絵画Still/Motion」展の開催や「アヴァンギャルド・チャイナ展」においてビデオアート作品を紹介する。</p> <p>国立新美術館は、「アーティスト・ファイル2008」や「アヴァンギャルド・チャイナ展」においてビデオアート作品を紹介し、また、「文化庁メディア芸術祭」においてメディアアートなどを紹介する。</p> <p>また、CG-ARTS協会等の協力を得て、館内モニターを活用しメディアアートの上映を推進する。</p>	計	98	33,544	31,400		
	<p>・平成20年度科学研究費補助金(基盤研究(B))「1960～70年代のビデオ・アート:作品の所在調査とデータベース構築」を得て、調査と資料収集を実施した。また、ビデオ・アート作品の収集に向け、調査と候補作品のリスタアップを行った。</p>					
	<p>【東京国立近代美術館フィルムセンター】</p>					
	展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
	カナダ・アニメーション映画名作選(上映会)	12	アニメーション	1,778	2,000	シネマテーク・ケベコワーズ
	日本アニメーション映画史(海外巡回上映)	6	アニメーション	-	-	ミュンヘン市博物館・映画博物館
	計	18		-	-	
	<p>【京都国立近代美術館】</p>					
	展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者
	ART RULES KYOTO(企画展)	13	音楽、映像、パフォーマンスのメディア・ミックスの展覧会+コンサート	3,469	3,000	
計	13		3,469	3,000		
<p>・本企画展は、展覧会+ライブ・パフォーマンスを繰り広げる新しい形の芸術表現であり、ニューヨーク近代美術館・ボンビドウ・センターなどに続いて日本において唯一開催した。</p>						
<p>【国立西洋美術館】</p>						
展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者	
ル・コルビュジエ資料展(平成21年度実施に向けた準備)	-	建築	-	-	-	
計	-		-	-	-	
<p>・建築専門の客員研究員の招へい及び教育普及担当職員による海外調査を行った。</p> <p>・ル・コルビュジエ設計の本館建物が世界遺産に推薦されたことに伴い、美術作品の鑑賞だけでなく、美術館の建築を鑑賞し楽しむための建築探検マップ(日・英・中・韓)を作成し無料配布した。また、FUN DAYでは、本館を巡るツアーを2日間で5回行った。さらに台東区と協力して、定期的にレクチャーと本館ツアーをセットにしたプログラムを24回開催した。</p>						
<p>【国立国際美術館】</p>						
展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者	
液晶絵画 Still/Motion(企画展)	43	ビデオ・アート	32,167	15,000	朝日新聞社	
計	43		32,167	15,000		
<p>・ロズギャラリーによる車のエンジン音や風の音などの走行音を用いた「ガソリンミュージック&amp;クルージング」の小企画を行った。</p> <p>・映像・メディアアート担当客員研究員による収集候補作品のリスタアップを行った。</p>						
<p>【国立新美術館】</p>						
展覧会名	日数	ジャンル	入館者数	目標数	共催者	
アーティスト・ファイル2008(企画展)	31	ビデオ・アート、アニメーション	16,818	15,000		
アヴァンギャルド・チャイナ(企画展)	54	ビデオ・アート	18,570	50,000	国際交流基金	
DOMANI展(企画展)	28	ビデオ・アート、ホログラフ	14,985	15,000	文化庁	
文化庁メディア芸術祭(企画展)	11	ビデオ・アート、アニメーション、マンガ、ゲーム、インタラクティブ・アート	51,505	20,000	文化庁、CG-ARTS協会	
アーティスト・ファイル2009(企画展)	24	ビデオ・アート	18,493	12,000		
計	148		120,371	112,000		
<p>・「アーティスト・ファイル2008」関連事業として、同展出品作家さわひらき氏による子ども向けワークショップを開催した。</p> <p>・「アニメ」など新しい視覚表現を紹介するための試みとして、「館内ディスプレイにおける映像上映プログラム」では、館内B1Fに設置されたディスプレイで「文化庁メディア芸術祭」の関連映像やICAF2008出品作品を先行上映した。また、「インターカレッジアニメーションフェスティバル(ICAF)2008」を共催し、国内の大学などの学生によるアニメーション作品120点に加え、韓国とヨーロッパの作品を4日間に亘り、講堂スクリーンで上映したほか、「スカイ・クロラ」監督の押井守氏や「つみきのいえ」監督の加藤久仁生氏らを迎えた対談・シンポジウムなどを開催した。</p>						
<p>(3)美術に関する情報の拠点としての機能の向上 国民の美術に関する理解促進に寄与するため、国立美術館に関する情報公開を進めるとともに、国内外の美術に関する情報を収集・提供し、美術に関する情報拠点としての機能を高めることとする。 ICT(情報通信技術)を活用した積極的な情報発信やホームページの充実を行い、ホームページのアクセス件数の目標を設定し、その達成に努めること。 国内外の美術に関する情報の収集、記録の作成・蓄積及びデジタル化を進めるとともに、レファレンス機能を充実させること。</p>						

(3) 美術に関する情報の拠点としての機能の向上

国立美術館について、所蔵作品、展覧会活動、その他の活動状況を積極的に広く社会に紹介し、国立美術館についての理解を得るよう努める。

ICT(情報通信技術)を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等の積極的な情報発信やホームページの充実を図り、ホームページのアクセス件数の年間の平均が、前中期目標期間の年間平均を上回る実績となるよう努める。

1 美術史その他の関連諸学に関する基礎資料、国内外の美術館や展覧会に関する情報及び資料を収集し、展覧会活動の推進に役立てるとともに、図書室等において芸術文化の情報サービスを広く提供できるよう努め、その利用者数が前中期目標期間の年間平均を上回るよう努める。

2 所蔵作品データ、所蔵資料データのデジタル化を一層推進し、ネットワークを通じてより良質で多様なコンテンツの提供を進めるとともに、本5年間の中期目標期間中のインターネット上での公開件数の実績が、前中期目標期間の実績を上回るよう努める。

(3) 美術に関する情報の拠点としての機能の向上

国立美術館は、所蔵作品、展覧会活動、その他の活動状況を積極的に広く社会に紹介し、国立美術館についての理解を得るよう努める。

ア 国立西洋美術館においては、ホームページと収蔵作品検索システムとの連携により、展示中の作品の適切な情報更新に努める。

イ 国立新美術館においては、国内の美術館等で開催される展覧会に関する情報を収集し、インターネット等を介して提供するシステム(「アート commons」)の収録対象先も含め一層の充実を図る。また、海外美術研究拠点(フリア美術館、ハイデルベルク大学図書館、コロンビア大学エイヴリー建築美術図書館及びシドニー大学フィッシャー図書館)に国内美術展カテゴリーを寄贈する。

法人本部のホームページについて内容の充実を図り、国立美術館の活動について周知広報を強化する。

また、各館の日本語版・英語版ホームページの内容の充実にも努め、展覧会情報や調査研究成果の公表等、積極的な情報発信に努める。

(東京国立近代美術館)

研究紀要掲載の論文全文をホームページの研究紹介のページから閲覧できるようにする。

(京都国立近代美術館)

展覧会図録を寄贈している京都府立図書館、大阪府立中央図書館、滋賀県立図書館、兵庫県立図書館、奈良県立図書館の蔵書リストを同館ホームページに掲載し、随時更新する。

(国立西洋美術館)

ホームページの活用を促進する。

ア イベントへの直接予約システムを導入する。

インターネット上で国立西洋美術館の所蔵作品画像が添付されたメッセージカードを送付することができるグリーティングカードシステムという利用者サービスを行う。

(国立国際美術館)

ア 所蔵作品、展覧会情報、講演会、教育普及事業等のイベント情報を掲載する。

イ 情報コーナーのパソコンによる所蔵作品閲覧の充実を図る。

ウ 託児サービス実施情報を掲載する。

(国立新美術館)

ア 展覧会事業、情報収集・提供事業、教育普及事業など、館の事業情報等を広く普及広報するため、ホームページの掲載情報の充実を図るとともに、適切に更新する。

イ 英語版ホームページに加え、多言語による情報提供の充実を図る。

ウ 国立新美術館ニュースなどをホームページに掲載し、研究成果を発信する。

美術史その他関連諸学に関する資料、国内外の美術館や展覧会に関する情報及び資料を収集し、各館の情報コーナー、アトライブラリー、資料閲覧室等において、情報サービスの提供を実施する。

ア 東京国立近代美術館、国立西洋美術館及び国立新美術館は、美術図書館連絡会による美術図書館横断検索システムに参加し、自館図書資料のみならず、東京国立博物館、東京都現代美術館なども館が所蔵する図書資料全体について横断検索を可能とし、美術図書館室の所蔵図書情報へのアクセスをより容易なものにする。

イ 国立西洋美術館においては、通常の書籍流通では入手困難な美術館刊行物やチラシ等散逸しやすい資料の収集・公開に努める。また、所蔵作品ガイド映像を拡充するとともに、作品情報端末を新たに設置する。

ウ 国立国際美術館においては、情報コーナーにおける国内外の美術図書充実とパソコンによる所蔵作品閲覧の充実を図る。

エ 国立新美術館においては、アトライブラリーの図録・図書資料の充実にも努めるとともに、別館内の特別資料閲覧室において研究者向けに貴重図書等の閲覧サービスの充実にも努める。

所蔵作品データのデジタル化及び公開を推進する。特に国内洋画家に続き、国内彫刻家の著作権許諾手続きを進め、国立美術館所蔵作品総合目録検索システムの掲載画像の増加に努める。併せて、同システムにおいて、作家及び作品に関わる解説文の閲覧を可能にするようコンテンツの充実を図る。また、ネットワークの一元管理を実施した上で、各館の所蔵作品管理システムの統合について検討を進

情報の発信

[定性的に評価]

(3) 美術に関する情報の拠点としての機能の向上

情報通信技術( ICT )を活用した展覧会情報や調査研究成果などの公表等

ア ホームページアクセス件数

館名	アクセス件数	目標数(第1期平均)
本部	14,767,139	74,434
東京国立近代美術館(本館・工芸館・フィルムセンター含む)	12,196,684	4,341,163
京都国立近代美術館	2,169,835	222,502
国立西洋美術館	7,242,549	720,126
国立国際美術館	2,604,089	366,054
国立新美術館	8,288,090	
計	47,268,386	5,724,279

イ 各館のICT活用の特徴

(ア) 本部

前年度リニューアルした本部のホームページにおいて、引き続き国立美術館5館の開催展覧会及び各種催事等トピックスを掲出した。なお、継続してアクセス数は増加している。

独立行政法人国立美術館所蔵作品総合目録検索システムについては、新収蔵作品の文字画像データを追加するとともに、著作権のある作品画像掲載を進めるため、許諾を得た油彩その他作品1,288点について画像を新規登録した。また、彫刻についての著作権者情報を整備するとともに、著作権許諾申請手続を開始した。

(イ) 東京国立近代美術館

前年度より稼働のコンテンツ・マネジメント・システム(CMS)を用いて、ホームページ・コンテンツの追加更新を迅速化し、平成20年度は特に企画展等の英文情報の充実化を進める体制を整えた。

美術図書館横断検索を維持する美術図書館連絡会ALC参加館とともに共監修した「展覧会カタログ総覧」を日外アソシエーツから刊行した。

フィルムセンターでは、CMSの機能をさらに高めて最新情報のアップデートを円滑にできるようにした。また、事業関連の情報を提供する「NFCメールマガジン」の登録者も着実に増えている。NFCD(フィルムセンターデータベース)については、ウェブ化開始以来の懸案であった人物データのコンパートのための準備作業を進め、テストの段階に達した。

また、映画関連資料へのアクセス希望に対しては、図版提供をすみやかに行うためにデジタル・データの形で提供する傾向が定着した。

(ウ) 京都国立近代美術館

コレクション・ギャラリーの小企画、テーマ展示に関する小論文をホームページに毎回掲載し、情報発信の充実にも努めている。

(エ) 国立西洋美術館

親しみやすく魅力的なホームページを目指し、以下のような取り組みを行った。

・収蔵作品データベースにパーマリンク機能(検索のたびに変わるURLに代わり、各作品情報に固定のURLを割り当てる機能)を追加して、個々の作品へのリンクやブックマーク登録ができるようにした。

・履歴情報(来歴、掲載文献、展覧会歴)や画像情報の追加・更新を行った。これらコンテンツ入力費の捻出のため、科学研究費補助金を獲得した(科研費による入力データ数:文字 のべ2,900件、和英二ヶ国語、画像1,070件)。

・広く海外へも情報を発信するため、展覧会情報(所蔵作品展・企画展)やイベント(講演会・シンポジウム等)、教育プログラムなどの日英二ヶ国語による情報提供を行った。

・収蔵作品検索と「過去の展覧会」(開催時から現在までの開催展覧会情報)の英語版メニューを作成・公開した。

このほか国立西洋美術館開館五十周年記念サイトを特設し、記念事業や美術館活動の多角的な紹介に努めるとともに、年間を通じて活動支援を受けているエプソンのウェブサイトでは所蔵作品に関する連載やダウンロードサービスを開始するなど、館内外のウェブサイト幅広く活用して情報発信に努めた。

(オ) 国立国際美術館

展覧会等の情報を利用者に分かりやすく提供するため、展覧会の内容や館の周知、特にバリアフリー情報、託児サービスなど利用案内情報の充実にも努めた。

また、展覧会毎に英語版を作成し、海外への情報発信にも努めた。

(カ) 国立新美術館

全国の展覧会情報を収集・提供する情報サービス「アート commons」のデータの活用を進めるため、展覧会情報と国立美術館の所蔵作品情報並びに国立新美術館、東京国立近代美術館の所蔵図書情報を横断的に検索するための検索システムの構築を国立情報学研究所の協力の下、国立美術館本部と共に行った。

インターネットを通じた情報発信をより分かりやすく、魅力的に行うためにホームページのリニューアル作業を行った(平成21年4月1日公開予定)。また、メニュー構成やデザインの見直しのほか、より円滑な更新を行うためのコンテンツ管理システムの導入、携帯電話・携帯情報端末向けのホームページ、音声合成ソフトウェア/装置等バリアフリーなホームページ閲覧を実現する環境に対応するためのホームページの準備を進めた。

美術情報の収集、記録の作成・蓄積、デジタル化、レファレンス機能の充実

ア 図書資料等の収集

館名	収集件数	累計件数	利用者数	目標数

S

・紙媒体やウェブ媒体とともに、きわめて高度な水準にあり、諸外国にくらべて遜色がなく、また凌駕する内容もある。特にホームページなどの充実には目覚ましいものがあり、アクセス件数を見ても利用度は高く、高い評価に値する。

・国立美術館のホームページ「遊歩館」はグッドデザイン賞を受賞した。国立情報学研究所との連携、収蔵図書検索のシステム共有なども軌道にのり、情報の発信についても新たな方策の研究が熱心に遂行されていると認められる。

・インターネットによる調査研究成果の発信については、進展が認められる。

【よりよい事業とするための意見】  
情報システムのメンテナンス、共通ソフト経費等が国立美術館の本来業務の制約にならないよう、法人内での自己点検や議論をさらに積み重ねていくことが望まれる。

める。

東京国立近代美術館(本館)	3,037	105,553	2,860	1,853
東京国立近代美術館(工芸館)	1,553	17,448	395	317
東京国立近代美術館(フィルムセンター)	1,423	28,929	3,621	3,085
京都国立近代美術館	1,527	17,280		
国立西洋美術館	1,317	42,658	262	119
国立国際美術館	784	32,593		
国立新美術館	16,314	135,435	59,315	
計	25,955	379,896	66,453	5,374

注1 京都国立近代美術館は4階、国立西洋美術館は1階、国立国際美術館は地下1階に図録等が閲覧できる情報コーナーを設け、入館者が自由に閲覧できるようにしており、その場所については、利用者数の把握はしていない。

注2 国立新美術館は、目標数を設定していない。

イ 特記事項

(ア) 東京国立近代美術館

本館では、前年度開催のアリ・ミショー展を契機としてミショー関連資料159点の寄贈を受入れた。

フィルムセンターでは、平成17年度から19年度にかけて行われた「国際映画新聞」の復刻への原本提供に続き、戦前期の重要な映画雑誌である「キネマ旬報」の復刻(ゆまに書房刊行)に際し、1号～138号(136号を除く)までの137冊の原本提供を行った。(今回復刻される259冊のうち平成20年度内に第1回～第3回分を配本。)

(イ) 国立西洋美術館

国内の他の美術館図書館に先駆けて、電子ジャーナルのアーカイブJSTORと欧米で開催された美術競売カタログのオンライン総覧(Art sales catalogues online)を導入し、同館研究資料センターでの利用に供するとともに、国内の美術館関係者に対する広報(全国美術館会議の情報資料部会における情報提供等)、ホームページでの案内等を積極的に行った。

このほか引き続き、通常の書籍流通では入手困難な美術館刊行物や新聞記事、展覧会チラシ等の散逸しやすい資料(「エフェメラ」)の収集及び公開準備を進めた。

(ウ) 国立国際美術館

国内外の現代美術に関連する図書資料等を中心に収集を継続して行った。特に近年は企画展や所蔵作家関連文献に加え、国際展に関する文献などの積極的な収集に努めている。

(エ) 国立新美術館

「JAC(Japan Art Catalog)プロジェクト」として、海外では入手が困難な日本の展覧会カタログをとりまとめ、欧米の日本美術研究の拠点(4機関)に寄贈し、日本の美術館による研究成果を発信した。(平成20年度送付実績2,258冊)

また、「JACプロジェクト」として、展覧会カタログを寄贈した機関から、海外で開催された日本の美術に関する展覧会カタログの寄贈を受けた。(平成20年度受入実績154冊)

ウ 所蔵作品データ等のデジタル化

館名	画像データ				テキストデータ			
	デジタル化件数	デジタル化累計	公開件数	目標公開件数	デジタル化件数	デジタル化累計	公開件数	目標公開件数
東京国立近代美術館	355	9,960	3,427	1,394	143	10,194	9,580	9,144
工芸館	320	3,154	125	23	170	3,623	2,759	2,516
フィルムセンター(映画関連資料)	-	-	-	-	5,991	99,969	-	-
京都国立近代美術館	500	6,350	1,250	517	156	9,501	8,200	5,612
国立西洋美術館	1,124	4,994	202	202	49	4,564	4,320	4,058
国立国際美術館	185	5,967	1,411	2,356	191	6,910	5,864	5,101
計	2,484	30,425	6,415	4,492	6,700	134,761	30,723	26,431

注「公開件数」は、所蔵作品総合目録における画像及びテキストデータの公開件数である。なお、国立西洋美術館は「国立西洋美術館所蔵作品データベース」で画像データ4,210点を公開している。フィルムセンターについては、映画フィルムを除いた映画の関連資料についての件数を掲載している。

エ インフォメーションデータセンター(IDC)の確立

国立美術館5館全体においてVPN(Virtual Private Network:暗号化された通信網)を採用し、情報ネットワークの安定かつ高速化を実現するとともに、VPNを用いたグループウェア及びテレビ会議システムの稼働について平成21年度上半期において実施する体制を築いた。

東京国立近代美術館及び国立西洋美術館は、美術図書館横断検索を推進する美術図書館連絡会ALC参加館とともに共監修した「展覧会カタログ総覧」を日外アソシエーツから刊行した。

リーフレット型電子企画展表示システム「国立美術館 遊歩館」が財団法人日本産業デザイン振興会の2008年度グッドデザイン賞を受賞した。

国立美術館所蔵作品総合目録検索システムを国立国会図書館デジタルアーカイブポータル(PORTA)に登録して、国立国会図書館並びに関連機関作成のデジタルアーカイブとの横断検索を可能にした。

情報資源の多面的・効果的提供システムとして国立情報学研究所と国立美術館版「想-IMAGINE」の試行版を共同開発して、国立美術館の所蔵作品、図書、展覧会に関する情報資源の連携検索のための試験公開を行った。

1 S:特に優れた実績を上げている。(客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評価を付す。)

2 F:評価委員会として業務運営の改善その他の勧告を行う必要がある。(客観的基準は事前に設けず、業務改善の勧告が必要と判断された場合に限りFの評価を付す。)



	ホームページアクセス件数 〔定量的に評価〕	1	5,724,279件以上	4,006,995件以上 5,724,279件未満	4,006,995件未満	2	実績:47,268,386件 (前中期平均:5,724,279件)	A	
			5,374人以上	3,762人以上 5,372未満	3,762人未満		実績:66,453人 (前中期平均:5,374人)		
	図書室の利用者数 〔定量的に評価〕						実績:66,453人 (前中期平均:5,374人)	A	
	コンテンツの提供 〔参考指標〕						本中期期間中の累積公開件数 30,723件 (所蔵作品数に対するデジタル化の割合 93.9%) [前年度実績:本中期期間中の累積公開件数 30,215件[所蔵作品数に対するデジタル化の割合 94.5%]		

(4) 国民の美的感性の育成  
美術作品や作家についての理解を深め、鑑賞者の美的感性の育成に資するよう、国立美術館における美術教育に関する調査研究の成果を踏まえ、ギャラリートーク、ワークショップ等に取り組むこととする。  
学校や社会教育施設等との連携により、子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供すること、ボランティアや支援団体を育成し、相互の協力により美術館における教育普及事業の充実を図ること、フィルムセンターにおいては、映画フィルム等の所蔵作品の活用を図った教育普及機能の充実を図ること。

(4) 国民の美的感性の育成  
国立美術館における美術教育に関する調査研究の成果を踏まえ、学校や社会教育施設等との連携強化により、子どもから高齢者までを対象とした幅広い学習機会を提供し、各館の年間平均参加者数が前中期目標期間の年間平均の実績を上回るよう、所蔵作品展においてガイドスタッフ(ボランティア)によるガイドツアーなどを実施するほか、以下の教育プログラムを実施する。  
ア 小・中・高等学校からの要請に応じて、児童・生徒に対するギャラリートークやガイダンスの実施  
イ 企画展における小・中学生用セルフ・ガイドの配布と学校への送付、小・中学生を対象とする鑑賞プログラム(夏休み)の実施及びその実践例の教員への提示  
ウ 教員等に鑑賞授業の提案等を行い、また、鑑賞教育の場としての美術館の普及に資するため、小・中・高等学校の教員に対する企画展の解説・鑑賞機会の提供(年2回程度)  
エ 企画展に関する講演会(8回)、及びギャラリートーク(6回)等の実施並びに研究員・作家等による所蔵作品展に関するギャラリートーク(5回)の実施  
＜工芸館＞  
美術館を利用した鑑賞教育の充実に資するため、学校等との連携協力を推進するとともに、対象年齢や経験に応じた指導案の提供、教材の開発を行う。また、来館者の興味や関心を高めるため、展覧会ごとにギャラリートーク等を実施する。  
ア 夏季の「こども工芸館」展の会場に小・中学生の作品理解を促すための参考資料の設置  
イ 工芸作品の鑑賞補助資料の作成  
ウ 教員等向けの指導案の開発や研修による教育機関との連携  
エ 児童・生徒を対象とした陶芸の技法体験を通じた、鑑賞教育のモデルケースの開発  
オ 美術大学などの教員、学生の特別観覧(熱覧)の推進  
カ 工芸課研究員のほか、外部研究者や作家によるギャラリートーク(17回)及び講演会(2回)の実施  
＜フィルムセンター＞  
ア 上映会・展覧会におけるギャラリートーク等の実施  
イ 研究員の解説や弁士の公演なども交えながら映画の多様な性に触れる機会をつくることを目指すため、小・中学生を対象とした「こども映画館」を実施(夏休み期間、4日間程度)  
ウ 相模原市内の小・中学生を対象とした上映会を実施(相模原市教育委員会との連携事業、2～3回程度)  
(京都国立近代美術館)  
美術鑑賞教育への関心を高めることを重点目標に置き、外部からの自発的要望を積極的に支援し、現場指導者の質の向上及び指導者の数的拡大を目指す。  
ア 学校等からの要請による美術館利用についての教員研修会等の受入れの促進  
イ 教員やNPO団体の美術館利用プログラムに対する支援  
ウ 学校、各種団体からの要請による解説の受入れ  
エ 高等学校・大学の授業現場との積極的連携を図る  
オ 企画展に関連した講演会(10回程度)の実施  
カ 東京国立近代美術館フィルムセンターとの共催による映

(4) 国民の美的感性の育成  
幅広い学習機会の提供(講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トーク等)

館名	実施回数	参加者数	目標数
東京国立近代美術館(本館)	94	6,562	2,718
東京国立近代美術館(工芸館)	40	1,347	1,285
東京国立近代美術館(フィルムセンター)	156	9,705	1,470
京都国立近代美術館	64	4,244	1,590
国立西洋美術館	164	11,182	5,582
国立国際美術館	59	4,203	2,662
国立新美術館	117	11,697	-
計	694	48,940	15,307

ア 各館の特徴  
(ア) 東京国立近代美術館  
(本館)  
所蔵作品展の解説プログラムへの参加者が増加傾向にあることから、来館者の認知度が高まってきていると考えられる。特に、作家がギャラリー内で自作を語るアーティスト・トークへの参加者が増加している。このトーク内容は、編集後の映像を会期後半にギャラリーで放映するほか、美術館ニュース「現代の眼」に要約を掲載するとともに、ライブラリで資料化するなど、有効に活用している。企画展では、「エモーションal・ドローイング」展で国際シンポジウムを開催したこと、「沖繩プリズム」展の関連企画として演劇「人類館」公演を早稲田大学の協力を得て大隈講堂で上演したことが特記される。大学や学校教職員への研修協力は、児童生徒への鑑賞教育普及のために不可欠であるため重要視した。  
(工芸館)  
現存作家の個展開催時に、作家自身によるギャラリートークを実施し、経験に裏打ちされたトークは一般の観衆にも分かりやすく、大変好評であった。また、「工芸館名品集 染織」刊行にあわせ、雑誌「美しいキモノ」(アセット婦人画報社)や着物専門店との連携によるギャラリートークを実施した。  
(フィルムセンター)  
上映作品に関する映画人や研究者、評論家を招いてのトークも多く開催しているが、とくに平成20年度は、「発掘された映画たち2008」で研究員が上映作品の発掘や復元の経緯について解説を行い、映画保存業務の重要性をアピールした。「こども映画館」は7回目を迎え、平成20年度も、映画上映に施設見学や弁士・伴奏付きの無声映画上映などを組み合わせるスタイルを踏襲した。あわせて、子どもたちが日常テレビやDVDなどでは接する機会を持ちにくい映画遺産に触れる機会を作るとともに、写真画像などの投影も活用しながら平易な解説を行うよう心がけた。また、常設展「展覧会 映画遺産」の会場で、日本映画史を解説した子ども向けのセルフガイドを配布した。  
(イ) 京都国立近代美術館  
京都教育大学との共催で開催した小企画「『書く』ことと『描く』ことの間」展は、美術教育を専門的に学ぶ大学院生や現役の教諭によって企画され、同館学芸課監修のもとで開催された展覧会であり、小学生を対象とした作品解説パネルの提示や、独自の視点で作品同士を比較する配置など、子どもの作品鑑賞に向けた工夫を試行した。また、期間中には、小学生を対象としたギャラリートークを数回実施するなど、展覧会全体を通して意欲的なプログラムを提供した。さらに関連企画として、京都教育大学教授がコーディネーターしたシンポジウム「子どもの鑑賞と美術館」を開催し、海外の鑑賞教育の研究者による基調講演や、国内の美術館学芸員による先進的な教育普及事業の事例と、小学校教諭による鑑賞教育の実践などが紹介され、今後の美術館における鑑賞教育のあり方を模索するための、機会を提供した。  
(ウ) 国立西洋美術館  
所蔵作品展をさまざまな切り口で楽しむ「Fun with Collection」について、平成20年度は、「宗教・芸術家・修復編」と題し、西洋美術と関連の深いキリスト教の主題に関するギャラリートークや、収蔵作品の作家を中心に取上げた講演会、修復の専門家によるデモンストレーションなど、トークから体験型まで様々なアプローチを用意するとともに、前年開始した(1)普段美術館に足を運ばない層を美術館に呼び込むプログラムFUN DAY、(2)障害者を対象とする鑑賞プログラム、(3)都立高校の奉仕の課外授業の受け入れの3種類の事業を引き続き行った。

A  
・講演会、ギャラリートーク、アーティスト・トークへの参加者の増加は評価に値する。通常のギャラリー・トークばかりでなく、アーティスト・トークを積極的に取り入れていることは多いに評価できる。「ぐるっとパス(関東・関西)」の地域的な広がりを持った普及活動や学校教育との連携などには、国立美術館の側からの主体的な働きかけがあったことが認められる。  
・東京国立近代美術館の「沖繩・プリズム1872-2008」における早稲田大学との協力は、高く評価する。  
・フィルムセンターの活動は順調であり、教材開発や支援者育成は成果をあげているが、中核の人材の育成については、より一層明確な方法論と取り組みが必要である。  
【よりよい事業とするための意見】  
・フィルムセンターの鑑賞授業など教育上映活動は極めて有意義であり、より一層の普及拡大に努めることが望まれる。  
・新たな美術教材の開発がさらに推進されることが望まれる。

画上映(1回)の実施  
 (国立西洋美術館)  
 児童・生徒を対象としたプログラムをはじめ、多くの人々に美術と美術館に親しんでもらうためのプログラム、コレクションを活用したテーマ性のある企画、対象を限定したプログラムなど、それぞれの効果を考慮した幅広いレベルと内容のプログラムを提供する。  
 ア Fun with Collection'08、また、これに関連した講演会及び創作・体験プログラムなどの実施(6回)  
 イ Fun Day'08 開催時に、美術館と作品を楽しむ自由参加型プログラムの実施(4回程度)  
 ウ 企画展に関連した「先生のための鑑賞プログラム」の実施(小・中・高等学校の教員対象)(4回)  
 エ ファミリー・プログラム「どよびじゅつ」の実施(18回)  
 オ 「スクール・ギャラリートーク」(小・中・高等学校の団体対象)の実施(予約制)  
 カ クリスマス・プログラムの実施(4回)  
 キ 障害者を対象とする特別プログラムの実施(1回)  
 ク 企画展に関連した講演会(8回程度)、スライドトーク(12回程度)及び音楽プログラム(1回)の実施  
 (国立国際美術館)  
 幅広い層の人々に美術鑑賞の機会をより身近に感じてもらえるよう、企画展ごとに関連講演会、ギャラリートークなどを開催するとともに、子ども向けプログラムを実施する。また、近隣の美術担当教員との意見交換の場を持ち、生徒を美術館にひきつける方策について検討を行う。  
 ア 鑑賞支援教材制作に関連した「ジュニア・セルフガイド」の発行(1回)  
 イ 鑑賞実践プログラムに関連した「こどもびじゅつあー」の実施(6回)  
 ウ 鑑賞支援制作プログラムに関連した「こどものためのワークショップ」の実施(4回)  
 エ 大学の課外授業及びスクーリングによる団体鑑賞の受入れ  
 オ 小・中・高等学校団体鑑賞の受入れ  
 カ 教員研修の実施(予約制)  
 キ 教員と美術館の関係を活性化し、美術館の効果的活用及び生徒の来館機会の増加を図るため、「先生のための国立国際美術館活用ガイド」の発行  
 ク 企画展に関連した講演会(5～6回)、ギャラリートーク(5～6回)及びアーティストトーク(3回)の実施  
 (国立新美術館)  
 来館者の作品鑑賞の充実を目的として、展覧会ごとに講演会やギャラリートークを実施するほか、より多くの人々が美術に触れ、美術に親しむ機会を提供するためのプログラムを幅広い層を対象に実施する。  
 ア 展覧会に合わせた講演会及びギャラリートーク等の開催(14回)  
 イ 作家等によるワークショップ及び講演会の開催(4回)  
 ウ 子どもを対象としたワークショップ及び美術ツアーの実施(2回)  
 エ 中学生以上を対象とした鑑賞ガイドの配付(1回)  
 オ 公務団体等との連携によるワークショップ及びギャラリートークの実施  
 カ 学校、各種団体への鑑賞ガイダンスの実施  
 ボランティアや支援団体の育成と相互協力による教育普及事業の充実を図る。  
 (東京国立近代美術館)  
 <本館>  
 ア ガイドスタッフ(ボランティア)約40名により、所蔵作品展の所蔵作品ガイド(毎日)及び「ハイライトツアー」(10回程度)を実施する。  
 イ ガイドスタッフによる小・中学生グループの受入れなど、鑑賞プログラムの充実を図る。  
 <工芸館>  
 ア ガイドスタッフ(ボランティア)30人程度により、展示解説並びに展示品と同等の参考作品や重要無形文化財保持者が使用していた資料等に触れる鑑賞教室(一般及び子ども向け)を実施する。  
 イ 外国人及び国際的な文化交流に関心を持つ日本人を対象とした英語による鑑賞教室を実施する。  
 ウ 研究員によるフォローアップ研修や作家によるレクチャーを開催して、ボランティアスタッフの意欲とガイドテクニックの向上を図る。  
 (京都国立近代美術館)

企画展のない時期に美術館を無料開放して様々なプログラムを用意したFUN DAYは、好評を博し、当日の成果だけでなく、これが契機となってファミリープログラムへ応募する家族があるなど、美術館が意図した未来の来館者発掘に貢献する結果を得ることができた。

(工)国立国際美術館

企画展ごとに講演会、ギャラリートークを実施するとともに、アヴァンギャルド・チャイナ展シンポジウムでは、「中国アヴァンギャルドについて」、「ポスト・アヴァンギャルド」と題して、中国から美術評論家、4人の出品作家、同館館長などをパネリストとして開催し、あわせて78人の参加者を得た。  
 また、教諭向け美術館活用ガイド「先生のための国立国際美術館活用ガイド」を作成の上、大阪市内の小・中学校に配付することにより、教諭との連携とともに、児童生徒の美術鑑賞の質の深化と機会の増加を図った。  
 その他、以下の教育プログラムを実施した。

- ・ 鑑賞支援教材制作に関連した「ジュニア・セルフガイド」の発行(コレクション2及び3、「塩田千春」展、「モディリアーニ」展で発行)
- ・ 大学の課外授業及びスクーリングによる団体鑑賞の受入れ
- ・ 小・中・高等学校団体鑑賞の受入れ
- ・ 教諭研修の実施(2回 合計60名)

(オ)国立新美術館

展覧会に合わせた講演会や解説会、アーティストトークのほか、子どもから大人まで幅広い層を対象にワークショップを開催した。ワークショップでは、現在活躍中の作家やデザイナーを講師に招き、広くアートに親しむ機会を提供した。一方、国際的に知られるフランスの現代美術家であるクリスチャン・ボルタンスキー氏を迎えた講演会を開催するなど、現代を代表する作家と触れ合う貴重な機会を提供した。また、マイケル・シェリダンの講演会とアーティスト・ワークショップ「デザインって何だろう?」は、デザインの普及を目的にパブリック・スペースに設置されたデンマーク製什器に関連して企画した。

ボランティアや支援団体の育成等による教育普及事業

ア ボランティアによる教育普及事業

館名	ボランティア登録者数	ボランティア参加者数	事業参加者数
東京国立近代美術館(本館)	36	416	3,383
東京国立近代美術館(工芸館)	27	242	1,525
京都国立近代美術館	23	189	-
国立西洋美術館	34	358	2,804
国立国際美術館	53	118	-
国立新美術館	70	143	143
計	243	1,466	7,855

イ 各館の特徴

(ア)東京国立近代美術館

本館では、前年度募集・養成したMOMATガイドスタッフ3期生13名が、6月より順次デビューし所蔵品ガイドに加わったことにより、平日の小・中学生へのギャラリートークにも、余裕を持って対応できるようになった。11月から3月にかけて行ったハイライトツアーの参加者アンケートでは、9割以上の満足度を得ており、無料観覧日の解説プログラムとしてリピーターも多いことが判明した。

工芸館では、前年度研修を行った3期メンバーが加わって、平成20年度の登録者は総勢27名となり、学校等の団体受入れを前年度以上に充実させることができ、また、(財)ポーラ伝統文化振興財団との共催で、同財団制作のフィルム上映とタッチ&トークを連携させた鑑賞プログラムを実施したが、受入人数に制限があったため、多数の応募のなかから抽選により参加者を決定した。

(イ)京都国立近代美術館

ボランティアによる聞き取りアンケートの実施等の活動を行った。

(ウ)国立西洋美術館

ボランティアによる従来からのプログラムは、周知されるにつれ実施回数も増加している。平成20年度は、FUN DAYやクリスマス・プログラムの一環として、「10分トーク」と題した一般向けトークを新たに実施するとともに、FUN DAYではボランティア・コーナーを設け、来館者にこれまでのボランティア活動の紹介を行った。前年度より開始した「絵でたのしむクリスマス」を平成20年度も引き続き行った。また、活動の充実を目指して、新規にボランティアを募集して研修を行った。

(エ)国立国際美術館

学生ボランティアを広く募り、教育普及事業の実施補助、広報資料の発送、図書資料等の整理などの美術館運営の補助業務を実施することを通して、美術館活動に接する機会を提供した。

(オ)国立新美術館

学生ボランティアによる美術館事業の支援を目的とした、サポート・スタッフ制度により、講演会やワークショップをはじめとする教育普及事業のほか、情報資料室や広報の業務補助等、様々な活動に参加することにより、美術館の活動に関心を持つ学生(大学生、大学院生)に実務体験の機会を幅広く提供した。

ウ 支援団体等の育成と相互協力による事業

(ア)コンサート等の実施

新国立劇場、京都市立芸術大学、東京のオペラの森実行委員会、ダイキン工業現代美術振興財団等との協力により、各館においてコンサートやオペラ、落語会、演劇などを開催した(21回)。

<p>ア「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」を主催する京都市教育委員会等との連携による、ボランティアの受け入れ及び活動の充実を図る。 イ 友の会の活動において、京都市立芸術大学との連携による定期演奏会、見学会及びワークショップ等の事業を実施する。</p> <p>(国立西洋美術館) ア ボランティアスタッフによる、ファミリープログラム及び小・中・高等学校生の団体を対象とした所蔵作品展でのスクール・ギャラリートークを実施する。ファミリープログラムの「どようびじゅつ」(18回)については企画から参加してもらうことでボランティアの育成にもつながるようにする。その他に、Fun withCollection に関連したプログラム補助や、クリスマス・プログラムの補助(4回)を行う。また、今年度はボランティアの新規募集を実施する。 イ ボランティアの育成を目的として、プログラム遂行のためのスキルアップ研修及び広く美術に関する知識を学ぶための研修を実施する(月1回程度)。また、プログラムの拡大に伴い新規に募集したボランティアについても、年度の後半に研修を行う。 ウ 都立上野高校の「専任」課外授業に協力し、高校生ボランティアを活用する。</p> <p>(国立国際美術館) ア 学生ボランティアを受け入れ、展覧会、講演会及びワークショップ等のプログラムに参加させる等、活動の充実を図る。また、美術資料の整理を通じ、美術館活動の基本を学べるようにする。 イ 友の会については、会員参加型のイベントの開催等、活動内容等の充実を図るとともに、法人会員の加入に努める。</p> <p>(国立新美術館) ア 美術館の事業に関心を持つ学生を対象に実務経験の機会の提供を目的に、国立新美術館サポートスタッフとして学生ボランティアを受け入れる。 イ 教育普及事業や情報収集提供事業等への企業協賛制度の導入を検討する。 ウ 近隣関係施設と連携、協力し、マップの作成・配布等を実施する。</p> <p>京都国立近代美術館において、東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵フィルムを用いた上映会を開催し、鑑賞機会の拡大と映画文化の普及を図る。(東京国立近代美術館フィルムセンター及び京都国立近代美術館の共同開催)</p>	<p>ア「京都市博物館ふれあいボランティア養成講座」を主催する京都市教育委員会等との連携による、ボランティアの受け入れ及び活動の充実を図る。 イ 友の会の活動において、京都市立芸術大学との連携による定期演奏会、見学会及びワークショップ等の事業を実施する。</p> <p>(国立西洋美術館) ア ボランティアスタッフによる、ファミリープログラム及び小・中・高等学校生の団体を対象とした所蔵作品展でのスクール・ギャラリートークを実施する。ファミリープログラムの「どようびじゅつ」(18回)については企画から参加してもらうことでボランティアの育成にもつながるようにする。その他に、Fun withCollection に関連したプログラム補助や、クリスマス・プログラムの補助(4回)を行う。また、今年度はボランティアの新規募集を実施する。 イ ボランティアの育成を目的として、プログラム遂行のためのスキルアップ研修及び広く美術に関する知識を学ぶための研修を実施する(月1回程度)。また、プログラムの拡大に伴い新規に募集したボランティアについても、年度の後半に研修を行う。 ウ 都立上野高校の「専任」課外授業に協力し、高校生ボランティアを活用する。</p> <p>(国立国際美術館) ア 学生ボランティアを受け入れ、展覧会、講演会及びワークショップ等のプログラムに参加させる等、活動の充実を図る。また、美術資料の整理を通じ、美術館活動の基本を学べるようにする。 イ 友の会については、会員参加型のイベントの開催等、活動内容等の充実を図るとともに、法人会員の加入に努める。</p> <p>(国立新美術館) ア 美術館の事業に関心を持つ学生を対象に実務経験の機会の提供を目的に、国立新美術館サポートスタッフとして学生ボランティアを受け入れる。 イ 教育普及事業や情報収集提供事業等への企業協賛制度の導入を検討する。 ウ 近隣関係施設と連携、協力し、マップの作成・配布等を実施する。</p> <p>京都国立近代美術館において、東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵フィルムを用いた上映会を開催し、鑑賞機会の拡大と映画文化の普及を図る。(東京国立近代美術館フィルムセンター及び京都国立近代美術館の共同開催)</p>	<p>講演会 ガラリートーク、アーティスト等々の年間平均参加者数 [各館ごとに定量的評価]</p>	<p>(イ)ぐるっとバスへの参加 東京の美術館・博物館等 61 館が実施する共通入館券事業「東京・ミュージアムぐるっとバス 2008」及び関西の美術館・博物館等 66 館が実施する「ミュージアムぐるっとバス 関西 2008」に参加し、所蔵作品展観覧料の無料化などを実施した。また、平成 20 年度から新たに国立新美術館が参加した。</p> <p>(ウ)NPO法人との連携 東京国立近代美術館において、平成 21 年 1 月 2 日にNPO法人「美術ファンクラブ」との連携により、本館所蔵作品展「近代日本の美術」及び工芸館所蔵作品展「きもの輝き/漆・木・竹工芸の美」の無料観覧を実施した。(入館者：本館 1,480 人、工芸館 2,923 人) フィルムセンターでは、NPO法人東京フィルメックス実行委員会との共催による上映会が 6 年目を迎えた。本企画は毎回日本の優れた映画を選び、すべての作品に英語字幕を付して上映するもので、本企画の開催をきっかけとして、海外の映画祭やアーカイブ機関を対象としたフィルムの貸与が活発化するなど、日本映画の普及に成果を上げている。平成 20 年度文化庁委託事業の一環として開かれたシンポジウム「映像アーカイブの未来」では、NPO法人映像メディア創造機構との共同主催により、カナダ、フランス、韓国並びに国内の映像アーカイブなどから専門家を招き、映画の保存と活用についてプレゼンテーションとパネルディスカッションを行った。</p> <p>(エ)企業との連携 国立西洋美術館では、前年度に引き続き、セイコーエプソン株式会社とエプソン販売株式会社の支援を受け、OPEN museum(美術を通して人々が出会う開かれた美術館をみざすプロジェクト)事業を実施し、美術館無料開放日「FUN DAY」の開催、映像ガイドの上映、クリスマスプログラムの実施等各種プログラムの充実を図った。 国立国際美術館では、企業とのタイアップによる前売券の発券、企業等が発行する印刷物への展覧会情報の掲載等を実施し、企業との連携を進めた。</p> <p><b>映画フィルム・資料を活用した教育普及活動</b> 平成 20 年度で 2 回目となるフィルムセンターと京都国立近代美術館の主催による映画の上映会については、美術館駐車場に特設された会場で「イワン雷帝」(ソビエト)の野外上映を行った。 ・「京都国立近代美術館 + 東京国立近代美術館フィルムセンター共催フィルム・プロジェクト野外上映会「イワン雷帝」(1 回) 167 名 また、「児童生徒を対象とした「こども映画館」は、「児童・生徒を対象とした単なる上映企画にとどまらず、上映・展示・研究員の解説を組み合わせた。 ・「こども映画館 2008 年の夏休み」(4 回) 330 人 ・相模原市内の小・中学生を対象とした上映会(由野台中学校)(2 回) 222 人</p>	<p>1 S:特に優れた実績を上げている。(客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評価を付す。) 2 F:評価委員会として業務運営の改善その他の助言を行う必要がある。(客観的基準は事前に設けず、業務改善の助言が必要と判断された場合に限りFの評価を付す。)</p> <table border="1"> <tr> <td>1</td> <td>2,718人以上</td> <td>1,903人以上 2,718人未満</td> <td>1,903人未満</td> <td>2</td> <td>実績:6,562人 (前中期平均:2,718人)</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td></td> <td>1,285人以上</td> <td>900人以上1,285人未満</td> <td>900人未満</td> <td></td> <td>実績:1,347人 (前中期平均:1,285人)</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td></td> <td>1,470人以上</td> <td>1,029人以上 1,470人未満</td> <td>1,029人未満</td> <td></td> <td>実績:9,705人 (前中期平均:1,470人)</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td></td> <td>1,590人以上</td> <td>1,113人以上 1,590人未満</td> <td>1,113人未満</td> <td></td> <td>実績:4,244人 (前中期平均:1,590人)</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td></td> <td>5,582人以上</td> <td>3,907人以上 5,582人未満</td> <td>3,907人未満</td> <td></td> <td>実績:11,182人 (前中期平均:5,582人)</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td></td> <td>2,340人以上</td> <td>1,638人以上 2,340人未満</td> <td>1,638人未満</td> <td></td> <td>実績:4,203人 (前中期平均:2,340人)</td> <td>A</td> </tr> <tr> <td></td> <td>-</td> <td>-</td> <td>-</td> <td></td> <td>実績:11,697人 (前中期平均:-人)</td> <td>A</td> </tr> </table>	1	2,718人以上	1,903人以上 2,718人未満	1,903人未満	2	実績:6,562人 (前中期平均:2,718人)	A		1,285人以上	900人以上1,285人未満	900人未満		実績:1,347人 (前中期平均:1,285人)	A		1,470人以上	1,029人以上 1,470人未満	1,029人未満		実績:9,705人 (前中期平均:1,470人)	A		1,590人以上	1,113人以上 1,590人未満	1,113人未満		実績:4,244人 (前中期平均:1,590人)	A		5,582人以上	3,907人以上 5,582人未満	3,907人未満		実績:11,182人 (前中期平均:5,582人)	A		2,340人以上	1,638人以上 2,340人未満	1,638人未満		実績:4,203人 (前中期平均:2,340人)	A		-	-	-		実績:11,697人 (前中期平均:-人)	A	<p>・展覧会開催や普及活動として美術館活動に反映される調査研究は、費用、時間や人員等が極めて厳しいなか、展覧会図録の作成や図録に収録された研究員の論考などに具体的な成果として表われ、高い質を有している点で、評価に値する。 ・京都国立近代美術館の「上野伊三郎+リチ コレクション展」にむけた調査のほか、展覧会カタログの充実を評価</p>
1	2,718人以上	1,903人以上 2,718人未満	1,903人未満	2	実績:6,562人 (前中期平均:2,718人)	A																																																
	1,285人以上	900人以上1,285人未満	900人未満		実績:1,347人 (前中期平均:1,285人)	A																																																
	1,470人以上	1,029人以上 1,470人未満	1,029人未満		実績:9,705人 (前中期平均:1,470人)	A																																																
	1,590人以上	1,113人以上 1,590人未満	1,113人未満		実績:4,244人 (前中期平均:1,590人)	A																																																
	5,582人以上	3,907人以上 5,582人未満	3,907人未満		実績:11,182人 (前中期平均:5,582人)	A																																																
	2,340人以上	1,638人以上 2,340人未満	1,638人未満		実績:4,203人 (前中期平均:2,340人)	A																																																
	-	-	-		実績:11,697人 (前中期平均:-人)	A																																																
<p>(5) 調査研究成果の反映 展示、教育普及活動その他の美術館活動を行うために必要な調査研究を計画的に行い、その成果を国立美術館の業務の充実、文化の振興に反映させること。</p>	<p>(5) 調査研究成果の反映 各館の役割・任務に従い、展示、教育普及その他の美術館活動の推進のため、計画的に調査研究を実施するとともに、これらの成果を確実に美術館活動に反映させる。なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館及び大学等の機関とも連携を図るものとする。</p>	<p>調査研究の実施状況 [定性的に評価]</p>	<p>(5) 調査研究成果の美術館活動への反映 ア 東京国立近代美術館</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>調査研究テーマ</th> <th>美術館活動への反映</th> <th>連携機関</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東山魁夷に関する調査研究</td> <td>平成19 - 20年度に展覧会を開催し、連携機関と共同でカタログを編集・発行</td> <td>長野県信濃美術館</td> </tr> <tr> <td>建築家のドーイングに関する調査研究</td> <td>平成20年度に展覧会を開催し、カタログを編集・発行</td> <td></td> </tr> <tr> <td>アジアを中心とする線描表現に関する調査研究</td> <td>平成20年度に展覧会を開催し、カタログを編集・発行</td> <td>京都国立近代美術館、国際交流基金</td> </tr> </tbody> </table>	調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関	東山魁夷に関する調査研究	平成19 - 20年度に展覧会を開催し、連携機関と共同でカタログを編集・発行	長野県信濃美術館	建築家のドーイングに関する調査研究	平成20年度に展覧会を開催し、カタログを編集・発行		アジアを中心とする線描表現に関する調査研究	平成20年度に展覧会を開催し、カタログを編集・発行	京都国立近代美術館、国際交流基金	<p>A</p>	<p>・展覧会開催や普及活動として美術館活動に反映される調査研究は、費用、時間や人員等が極めて厳しいなか、展覧会図録の作成や図録に収録された研究員の論考などに具体的な成果として表われ、高い質を有している点で、評価に値する。 ・京都国立近代美術館の「上野伊三郎+リチ コレクション展」にむけた調査のほか、展覧会カタログの充実を評価</p>																																					
調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関																																																				
東山魁夷に関する調査研究	平成19 - 20年度に展覧会を開催し、連携機関と共同でカタログを編集・発行	長野県信濃美術館																																																				
建築家のドーイングに関する調査研究	平成20年度に展覧会を開催し、カタログを編集・発行																																																					
アジアを中心とする線描表現に関する調査研究	平成20年度に展覧会を開催し、カタログを編集・発行	京都国立近代美術館、国際交流基金																																																				

<p>立近代美術館等との共同研究)</p> <p>エ 沖縄の美術に関する調査研究(沖縄県立博物館・美術館との共同研究)</p> <p>オ 高梨豊に関する調査研究</p> <p>カ ヴィデオ・アートに関する調査研究</p> <p>キ ボール・ゴーガンに関する調査研究(名古屋ポストン美術館との共同研究)</p> <p>ク 河口龍夫に関する調査研究</p> <p>ケ 権鎮圭と韓国の近代彫刻に関する調査研究(武蔵野美術大学等との共同研究)</p> <p>コ 小野竹喬に関する調査研究(笠岡市竹喬美術館、大阪市立美術館との共同研究)</p> <p>教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。</p> <p>ア 鑑賞教育に関する美術館と学校の連携や、学校の授業と美術館での鑑賞の連続性に関する調査研究(東京都版画工作研究会等との共同研究)</p> <p>イ 国立美術館の情報資源と文化遺産オンライン、国立情報学研究所のWebcatPlus及び国立情報学研究所「想 - IMAGINE」とが連携して検索・閲覧できるシステムの公開を実施する。</p> <p>&lt;工芸館&gt;</p> <p>展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。</p> <p>ア カルロ・ザウリに関する調査研究(京都国立近代美術館との共同研究)</p> <p>イ ルーシー・リーに関する調査研究(益子陶芸美術館、大阪市立東洋陶磁美術館との共同研究)</p> <p>ウ 戦後クラフト運動の調査研究</p> <p>エ 近・現代の人の形に関する調査研究(碧南市藤井達吉現代美術館、佐野美術館との共同研究)</p> <p>オ 戦後デザインの成立と展開についての調査研究(武蔵野美術大学、多摩美術大学との共同研究)</p> <p>教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。</p> <p>ア 工芸作品の鑑賞方法や美術館教育のあり方の調査研究(多摩美術大学、女子美術大学との共同研究)</p> <p>イ 陶芸制作体験によって児童・生徒が、より質の高い作品理解を得るための鑑賞教育のあり方に関する調査研究(倉敷市立美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館との共同研究)</p> <p>&lt;フィルムセンター&gt;</p> <p>収集・保存のための調査研究を次のとおり実施する。</p> <p>ア 海外の国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会員のうち、コレクション調査を行っていない団体や国内同種機関、現像所等からの情報に基づく未発見の映画フィルムの所在調査及び文化庁との共同事業による「近代歴史資料調査」の結果に基づき、新たに残存が確認された映画フィルムの詳細調査</p> <p>イ 映画フィルムの保存、デジタル技術を活用した復元に関する調査研究(FIAF同種研究機関、国内の映画研究教育機関、映像機器メーカー、現像所等との共同研究)</p> <p>上映会、展覧会及び教育普及事業のための調査研究を次のとおり実施する。</p> <p>ア ジャン・ルノワール監督に関する調査研究</p> <p>イ 衣笠貞之助監督と長谷川一夫に関する調査研究</p> <p>ウ 川喜多かしこと東映映画に関する調査研究(川喜多記念映画文化財団との共同研究)</p> <p>エ 伊藤大輔監督と大河内傳次郎に関する調査研究</p> <p>オ 亀井文夫監督に関する調査研究</p> <p>カ カナダのアニメーション映画に関する調査研究</p> <p>キ オランダ映画史と近年のオランダ映画に関する共同研究</p> <p>ク 日本のジャンル映画(怪獣映画、SF映画等)に関する調査研究</p> <p>ケ 映画産業の枠外で製作された日本映画・インディペンデント映画等の歴史に関する調査研究</p> <p>コ 戦前期のハリウッド映画に関する調査研究</p> <p>サ 大正期までの日本文学と日本映画の関係に関する調査研究</p> <p>シ 無声時代のソビエト映画とソビエト映画がスター、また、それらの日本への紹介に関する調査研究</p>	<p>沖縄の美術に関する調査研究</p> <p>高梨豊に関する調査研究</p> <p>ヴィデオ・アートに関する調査研究</p> <p>ボール・ゴーガンに関する調査研究</p> <p>河口龍夫に関する研究</p> <p>権鎮圭と韓国の近代彫刻に関する調査研究</p> <p>ウィリアム・ケントリッジに関する調査研究</p> <p>小野竹喬に関する調査研究</p> <p>日本の中堅建築家に関する調査研究</p> <p>上村松園に関する調査研究</p> <p>麻生三郎に関する調査研究</p> <p>鑑賞教育に関する美術館と学校の連携や、学校の授業と美術館での鑑賞の連続性に関する調査研究</p> <p>国立美術館の情報資源と文化遺産オンライン、国立情報学研究所のWebcatPlus及び国立情報学研究所「想 - IMAGINE」とが連携して検索・閲覧できるシステムの調査研究</p> <p>1960～70年代のヴィデオ・アートに関する研究</p> <p>カルロ・ザウリに関する調査研究</p> <p>ルーシー・リーに関する調査研究</p> <p>近・現代の人の形に関する調査研究</p> <p>戦後デザインの成立と展開についての調査研究</p> <p>工芸作品の鑑賞方法や美術館教育のあり方の調査研究</p> <p>陶芸制作体験によって児童・生徒が、より質の高い作品理解を得るための鑑賞教育のあり方に関する調査研究</p> <p>海外の国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)会員のうち、コレクション調査を行っていない団体や国内同種機関、現像所等からの情報に基づく未発見の映画フィルムの所在調査及び文化庁との共同事業による「近代歴史資料調査」の結果に基づき、新たに残存が確認された映画フィルムの詳細調査</p> <p>映画フィルムの保存、デジタル技術を活用した復元に関する調査研究(FIAF同種研究機関、国内の映画研究教育機関、映像機器メーカー、現像所等との共同研究)</p> <p>ジャン・ルノワール監督に関する調査研究</p> <p>衣笠貞之助監督と長谷川一夫に関する調査研究</p> <p>川喜多かしこと東映映画に関する調査研究</p> <p>伊藤大輔監督と大河内傳次郎に関する調査研究</p>	<p>平成20年度に展覧会を開催し、カタログを編集・発行</p> <p>平成20年度に展覧会を開催し、カタログを編集・発行</p> <p>平成20～21年度に展覧会を開催し、カタログを編集・発行</p> <p>平成21年度の展覧会の開催に向け、連携機関と共同で調査研究を実施</p> <p>平成21年度の展覧会の開催に向け、調査研究を実施</p> <p>平成21年度の展覧会の開催に向け、調査研究を実施</p> <p>平成21年度の展覧会の開催に向け、調査研究を実施</p> <p>平成21～22年度の展覧会の開催に向け、調査研究を実施</p> <p>平成22年度の展覧会の開催に向け、調査研究を実施</p> <p>平成22年度の展覧会の開催に向け、調査研究を実施</p> <p>平成22年度の展覧会の開催に向け、調査研究を実施</p> <p>教育普及事業における鑑賞教育の充実</p> <p>システムの公開</p> <p>成果の一部が「ヴィデオを待ちながら」展に出品、今後の収蔵作品候補に関する情報収集</p> <p>平成20年度に展覧会を開催し、カタログを編集・発行</p> <p>平成21年度開の展覧会の開催に向け、調査研究を実施</p> <p>巡回展「感じる鼓動 東京国立近代美術館所蔵 人形展」の開催</p> <p>平成20年度に展覧会を開催し、カタログを編集・発行</p> <p>教育普及事業</p> <p>教育普及事業</p> <p>可燃性フィルム及び原版類を中心に、複数の団体や個人から寄贈の受け入れ</p> <p>「羅生門」のデジタル復元</p> <p>「紅葉狩」の解像度及び修復レベルテストと一部デジタル復元版の収集</p> <p>「祇園祭」等のフィルムの収集</p> <p>上映会「ルノワール・ルノワール展、開催記念 ジャン・ルノワール映画の世界 ジャン・ルノワール監督名作選」の開催</p> <p>上映会「スターと監督 長谷川一夫と衣笠貞之助」の開催</p> <p>上映会「生誕100年 川喜多かしことヨーロッパ映画の黄金時代」及び展覧会「生誕100年 川喜多かし展」の開催</p> <p>上映会「生誕110周年 スターと監督 大河内傳次郎と伊</p>	<p>沖縄県立博物館・美術館</p> <p></p> <p>名古屋ポストン美術館</p> <p>武蔵野美術大学</p> <p>京都国立近代美術館</p> <p>笠岡市竹喬美術館、大阪市立近代美術館</p> <p>京都国立近代美術館</p> <p>京都国立近代美術館、愛知県美術館</p> <p>東京都版画工作研究会ほか</p> <p>国立情報学研究所ほか</p> <p>京都国立近代美術館、国立新美術館</p> <p>京都国立近代美術館</p> <p>益子陶芸美術館、大阪市立東洋陶磁美術館</p> <p>碧南市藤井達吉現代美術館、佐野美術館</p> <p>武蔵野美術大学、多摩美術大学</p> <p>多摩美術大学、女子美術大学</p> <p>倉敷市立美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館</p> <p>UCLAフィルム・アンド・テレビジョン・アーカイブ(アメリカ、FIAF会員)</p> <p>アカデミー・フィルム・アーカイブ(アメリカ、FIAF会員)</p> <p>京都府京都文化博物館</p> <p>川喜多記念映画文化財団</p>	<p>する。</p> <p>・フィルムセンターの「羅生門」のデジタル復元は極めて高い評価に値する。</p> <p>・所蔵作品に関わる研究など、基礎的な研究も着実に行われており、美術館活動を支える研究活動として高く評価できる。</p> <p>【よりよい事業とするための意見】</p> <p>・外部資金の確保、研究時間の確保、研究業績・成果の適正な評価など、研究者の資質が十分発揮できる環境のさらなる充実に努めることが期待される。</p> <p>・業務実績報告書などの研究成果の記述については各館にばらつきがあるため、統一的就かつ具体的な記載手法が望まれる。</p>
--	---	--	--	---

る調査研究	藤大輔,の開催	
亀井文夫監督に関する調査研究	上映会「生誕百年 映画監督 亀井文夫」の開催	
オランダ映画史と近年のオランダ映画に関する共同研究	上映会「日本オランダ年2008-2009 オランダ映画祭2009」の開催	
カナダのアニメーション映画に関する調査研究	上映会「カナダ・アニメーション映画名作選」の開催	シネマテーク・ケベコワーズ(カナダ, FIAPF会員)
日本のジャンル映画(怪獣映画, SF映画等)に関する調査研究	上映会「日本映画史横断 怪獣・SF映画特集」の開催	
映画産業の枠外で製作された日本映画・インディペンデント映画等の歴史に関する調査研究	上映会「日本インディペンデント映画史シリーズ PFF30回記念 ぴあフィルムフェスティバルの軌跡vol.1」の開催	
戦前期のハリウッド映画に関する調査研究	上映会「アメリカ映画史研究」の開催	
大正期までの日本文学と日本映画の関係に関する調査研究	展覧会「映画資料でみる 映画の中の日本文学 Part 1」の開催	
無声時代のソビエト映画とソビエト映画ポスター, またそれらの日本への紹介に関する調査研究	展覧会「無声時代ソビエト映画ポスター展」の開催	京都国立近代美術館

(京都国立近代美術館)

展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。  
 ア 近代日本における重要女性作家・秋野不矩の画業を回顧することによる、日本画壇における女性の地位に関する調査研究(浜松市秋野不矩美術館との共同研究)  
 イ 女性メディア・ミックスのグループ「チェック・オン・スピード」の活動を研究することによる、現代のメディア・アートの最前線に関する調査研究  
 ウ 画家オーギュスト・ルノワールと映画監督ジャン・ルノワールという絵画と映画という異なる分野で活動した親子の作品を同時展示することによる、絵画と映画の相関性に関する調査研究(Bunkamura ザ・ミュージアムとの共同研究)  
 エ 戦後の日本画革新運動「パリアル」の中心作家である下村良之介の業績を回顧することによる、日本美術史における「パリアル」運動に関する調査研究  
 オ アメリカの写真家・ユージン・スミスの写真作品を研究することによる、近代ドキュメンタリー写真に関する調査研究  
 カ 国際アート&クラフツ運動への日本の工芸・デザインへの貢献を検証することによる、国際アート&クラフツ運動の中での日本の民芸運動に関する調査研究(ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館との共同研究)  
 キ アジアを中心とする線描芸術に関する調査研究(東京国立近代美術館等との共同研究)  
 ク 日本近代建築とデザイン教育の黎明期に大きな貢献を果たした上野伊三郎・リチ夫妻とウィーン工房との関係に関する調査研究  
 ケ マルチメディアを駆使する美術家・椿昇の作品と、日本のメディア・アートの現状に関する調査研究(東京都現代美術館との共同研究)  
 コ 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。  
 ア 上野伊三郎・上野リチ作品資料に基づく、近代日本建築史及びデザイン教育史に関する調査研究(京都工芸繊維大学、京都女子大との共同研究)  
 イ ユージン・スミス写真作品及びドキュメンタリー写真と水俣に関する調査研究  
 ウ 館所蔵の作品・資料の体系的分類等に関する調査研究  
 エ 教育普及事業における友の会活動の役割と成果の活用に関する調査研究

イ 京都国立近代美術館

調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
近代日本画における重要女性作家・秋野不矩の画業を回顧することによる、日本画壇における女性の地位に関する調査研究	・「生誕100年記念・秋野不矩展」の開催 ・研究成果は図録論文「秋野不矩・新しい日本画の探求者(岩城見一)」, 「青甲社入塾頃の不矩(小倉実子)」として発表	浜松市秋野不矩美術館
女性メディア・ミックスのグループ「チェック・オン・スピード」の活動を研究することによる、現代のメディア・アートの最前線に関する調査研究	・「Art Rules Kyoto 2008」展の開催 ・研究成果は4月29日の参加作家とのレクチャー, 5月3日のマルチメディア・コンサートにおいて発表	
画家オーギュスト・ルノワールと映画監督ジャン・ルノワールという絵画と映画という異なる分野で活動した親子の作品を同時展示することによる、絵画と映画の相関性に関する調査研究	・「ルノワール・ルノワール」展の開催 ・研究成果は7月6日の記念シンポジウム「ジャン・ルノワールの現在」で発表	Bunkamura ザ・ミュージアム
戦後の日本画革新運動「パリアル」の中心作家である下村良之介の業績を回顧することによる、日本美術史における「パリアル」運動に関する調査研究	・「没後10年・下村良之介展」の開催 ・研究成果は図録論文「下村良之介再考(山野英嗣)」, 及び8月2日の記念講演会「下村良之介再考」で発表	
アメリカの写真家・ユージン・スミスの写真作品を研究することによる、近代ドキュメンタリー写真に関する調査研究	・「W. ユージン・スミスの写真」展の開催 ・研究成果は図録論文「W. ユージン・スミスの写真: 主題 / 被写体との距離(牧口千夏)」として発表	
国際アート&クラフツ運動への日本の工芸・デザインへの貢献を検証することによる、国際アート&クラフツ運動の中での日本の民芸運動に関する調査研究	・「生活と芸術 - アーツ&クラフツ展」の開催 ・研究成果は図録論文「日本におけるアーツ&クラフツ - 民芸成立から上野伊三郎協団, 三國荘を巡って(松原龍一)」, 及び10月4日の記念講演会「三國荘の建築」として発表	ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館
アジアを中心とする線描芸術に関する調査研究	・「エモーションナル・ドローイング」展の開催	東京国立近代美術館等
日本近代建築とデザイン教育の黎明期に大きな貢献を果たした上野伊三郎・リチ夫妻とウィーン工房との関係に関する調査研究	・「上野伊三郎・リチ コレクション展」の開催 ・研究成果は図録論文「ウィーンから京都へ, 建築から工芸へ(山野英嗣)」, 「上野リチと稲葉七宝(松原龍一)」として発表	
マルチメディアを駆使する美術家・椿昇の作品と、日本のメディア・アートの現状に関する調査研究	・「椿昇2004-2009 GOLD/WHITE/BLACK」展の開催 ・研究成果は図録論文「欲望のメタフィジックス(岩城見一)」として発表	東京都現代美術館
上野伊三郎・上野リチ作品資料に基づく、近代日本建築史及びデザイン教育史に関する調査研究	研究成果は展覧会図録論文「京都市立芸術大学における上野伊三郎先生, リチ先生の指導について(鈴木佳子)」として発表	京都工芸繊維大学, 京都女子大
ユージン・スミス写真作品及びドキュメンタリー写真と水俣に関する調査研究	8月31日の写真表現大学授業「メディアとしてのユージン・スミス(河本信治)」として発表	

(国立西洋美術館)  
 展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。  
 ア イタリア美術におけるヴィーナス図像に関する調査研究(ウフィツィ美術館との共同研究)  
 イ コローとフランス美術に関する調査研究(ルーヴル美術館との共同研究)  
 ウ ヴィルヘルム・ハンマースホイとデンマーク美術に関する調査研究(オアドロブゴ美術館とロイヤルアカデミー・ロンドンとの共同研究)  
 エ 17世紀ヨーロッパ絵画に関する調査研究(ルーヴル美術館との共同研究)  
 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。  
 ア 旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究  
 イ 中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究  
 ウ 平成16年度以降収集したデンマーク版画作品に関する調査研究  
 エ 西洋美術作品の保存修復に関する調査研究(ポール・グティ美術館との共同研究)  
 オ 美術館教育に関する調査研究(東京大学との共同研究)  
 カ 館蔵資産の資源化に関する調査研究  
 キ 「火山噴火罹災地の文化・自然環境の復元の総括」(科学研究費補助金) 5年目  
 ク 「火山噴火罹災遺跡における生活・文化環境の復元研究」(科学研究費補助金) 5年目  
 ケ 「15～17世紀バルマ派美術の歴史的再構築に関する調査研究」(科学研究費補助金) 2年目  
 コ 「芸術遺産/資本の表象—19世紀仏の挿絵入り美術出版物に関する調査研究」(科学研究費補助金) 3年目  
 サ 「初期アッティカ黒像式陶器の技法と図像に関する研究」(科学研究費補助金) 2年目  
 シ 「Kleitiias and Athenian Black-Figure Vases in the Sixth-Century B.C.」(科学研究費補助金) 2年目

館所蔵の作品・資料の体系的分類等に関する調査研究	「所蔵作品目録 :アイリオン・スミス・コレクション W. ユージン・スミスの写真」, 「所蔵作品目録 :上野伊三郎+リチ コレクション」の刊行	
教育普及事業における友の会活動の役割と成果の活用に関する調査研究	友の会の活動内容を再検討, 開催予定の展覧会のための調査・フィールドワーク, 展覧会に関する中級レベルの講義, 教育ワークショップへの参加など, 友の会の新しい参加, 活動形態を試行	

ウ 国立西洋美術館		
調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
イタリア美術におけるヴィーナス図像に関する調査研究	・「ウルビーノのヴィーナス 古代からルネサンス, 美の女神の系譜」展の開催 ・同展の図録を刊行, 新聞等への掲載, 講演会等による発表を実施	フィレンツェ文化監督局長官, ウフィツィ美術館
コローとその影響に関する調査研究	・「コロー 光と追憶の変奏曲」展の開催 ・同展の図録を刊行, 新聞等への掲載, 講演会等による発表を実施	ルーヴル美術館, 神戸市立博物館
ヴィルヘルム・ハンマースホイとデンマーク世紀末の画家に関する調査研究	・「ヴィルヘルム・ハンマースホイ」展の開催 ・同展の図録を刊行, 新聞等への掲載, 講演会等による発表を実施	英国王立芸術院, コペンハーゲン国立美術館, オアドロブゴ美術館
17世紀風景画に関する調査研究	・「ルーヴル美術館 17世紀風景画」展の開催 ・同展の図録を刊行, 新聞等への掲載, 講演会等による発表を実施	ルーヴル美術館, 京都市美術館
所蔵版画作品に関する調査研究	50周年企画展示「かたちはうつろふ・所蔵版画作品展」(平成21年度開催予定)企画構成	
フランク・ブランギンと国立西洋美術館のコレクションに関する調査研究	50周年企画展示「フランク・ブランギン」展(平成21年度開催予定)企画構成	ブランギン美術館, 英国王立芸術院
アルブレヒト・デューラーの版画芸術に関する調査研究	「アルブレヒト・デューラー 宗教/肖像/自然」展(平成22年度開催予定)企画構成	メルボルン・ナショナル・ギャラリー・オブ・ヴィクトリア, アルベルティーナ版画素描館
古代ローマ美術とポンペイ遺跡に関する研究	50周年企画展示「古代ローマ帝国の遺産・栄光の都ローマと悲劇の街ポンペイ」展(平成21年度開催予定)企画構成	ローマ国立美術館, ナポリ=ポンペイ考古学監督局
イタリア, ルネサンス・バロック美術研究	「(仮)ナポリ・カーボディモンテ美術館展」(平成22年度開催予定)企画構成	カーボディモンテ美術館, ナポリ美術監督局
ギリシャ美術研究	「(仮)大英博物館ギリシャ美術展」(平成23年度開催予定)	大英博物館
国立西洋美術館所蔵バウツ派研究	作品・文献調査, 小企画展, 刊行物	ロンドン・ナショナル・ギャラリー
国立西洋美術館所蔵キクラデス彫刻に関する研究	作品調査, 文献収集, 「西洋美術館研究紀要」への寄稿	アテネ国立博物館
「レンブラント及びレンブラント派における和紙による版画素描作品の研究」	「(仮)レンブラント:変革の画家」展(平成23年度開催予定)企画構成	アムステルダム国立美術館, レンブラント・ハウス
「初代アッティカ黒像式陶器の技法と図像に関する調査研究」	作品調査, 文献収集	
「Kleitiias and Athenian Black-Figure Vases in the Sixth-Century B.C.」	「ギリシアの陶画家クレイティアスの研究」の英訳・刊行	
「火山噴火罹災地の文化・自然環境の復元の総括」5年目	展覧会(平成21年度開催予定)企画構成	東京大学大学院, お茶の水女子大学, 東京工業大学大学院, 東京大学地震研究所
「火山噴火罹災遺跡における生活・文化環境の復元研究」5年目	展覧会(平成21年度開催予定)企画構成	東京大学大学院
「15～17世紀バルマ派美術の歴史的再構築に関する調査研究」2年目	「バルマ イタリア美術, もう一つの都」展, 及び同展関連シンポジウムの開催	バルマ・ピアチェンツァ歴史美術民俗文化財監督局, テキサス大学, テキサス・キリスト教大学
「国立西洋美術館所蔵作品データベース」	国立西洋美術館所蔵作品データベース	
「芸術遺産/資本の表象—19世紀仏の挿絵入り美術出版物に関する調査研究」	作品・文献調査	
ル・コルビュジエによる国立西洋美術館本館の設計に関する調査研究	50周年企画展示「ル・コルビュジエと国立西洋美術館」展(平成21年度開催予定)企画構成	ル・コルビュジエ財団(パリ), 東京理科大学, 日本大学, 京都工芸織

(国立国際美術館)  
 展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。  
 ア 液晶絵画展に関する調査研究(三重県立美術館、東京都写真美術館との共同研究)  
 イ 塩田千春に関する調査研究  
 ウ モデリアーニとプリミティヴィスムに関する調査研究(国立新美術館との共同研究)  
 エ アジア・ヨーロッパの自己像と他者像に関する調査研究(ASEMUS(アジア・ヨーロッパ・ミュージアム・ネットワーク)、国立民族学博物館、福岡アジア美術館、神奈川県立近代美術館、神奈川県立歴史博物館との共同研究)  
 オ 新国誠一を中心にコンクリート・ポエトリーに関する調査研究(武蔵野美術大学と共同研究)  
 カ 杉本博司に関する調査研究(金沢21世紀美術館と共同研究)  
 キ 中国現代美術に関する調査研究(国際交流基金、国立新美術館、愛知県美術館との共同研究)  
 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。  
 ア 現代の絵画に関する調査研究  
 イ アジアの現代美術並びに美術館運営に関する調査研究(アジア次世代キュレーター会議での共同研究)  
 ウ 「モダニズムと中東欧の近代芸術に関する国際・学術共同研究」(科学研究費補助金)  
 エ 展示における所蔵作品の活用方法についての調査研究

(国立新美術館)  
 展覧会開催のための調査研究を次のとおり実施する。  
 ア 日本の現代美術の動向に関する調査研究  
 イ モデリアーニとプリミティヴィスムに関する調査研究(国立国際美術館との共同研究)  
 ウ エミリー・カーメ・ウングワレー(オーストラリアのアボリジニ美術)に関する調査研究(オーストラリア国立博物館、国立国際美術館との共同研究)  
 エ 中国現代美術に関する調査研究(国際交流基金、国立国際美術館、愛知県美術館との共同研究)  
 オ 16・17世紀におけるヨーロッパの静物画に関する調査研究(ウィーン美術史美術館等との共同研究)  
 カ ヒカソに関する調査研究(サントリー美術館、ヒカソ美術館等との共同研究)  
 キ 加山又造に関する調査研究(高松市美術館等との共同研究)  
 ク ルーヴル美術館所蔵作品のうち「子ども」をテーマとした作品に関する調査研究(ルーヴル美術館等との共同研究)

		維大学
旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究	収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等	
中世末期から20世紀初頭の西洋美術に関する調査研究	収集、作品・文献調査、常設展・企画展、刊行物、講演発表、解説等	ロンドン・ナショナル・ギャラリー、メルボルン・ナショナル・ギャラリー
所蔵版画作品に関する調査研究	50周年企画展示「かたちはうつる・所蔵版画作品展」(平成21年度開催予定)関連事業	
西洋美術作品の保存修復に関する調査研究	修復処置の実施、シンポジウム(平成21年度開催予定)企画	J・P・ゲッティ美術館
美術館教育に関する調査研究	「Fun with Collection 見る楽しみ・知る喜び - 美術史・市場・修復編」等教育普及プログラムを実施。ワークシート等制作、インターンシップ、ボランティア指導、解説(企画展作品解説パネル制作等)	東京大学、東京藝術大学、東京国立博物館、全国美術館会議、ロンドン・ナショナル・ギャラリー
館蔵資産の資源化に関する調査研究	美術館アーカイブス、コレクション・マネジメント・システム、美術図書館におけるエフェメラの整理	ケベック・ナショナル・ギャラリー、IFLA(国際図書館連盟)
美術展示物の鑑賞を助ける音声・映像案内の高度化に係る調査研究	iPod touchを使った映像と音による国立西洋美術館の常設展ガイドの開発・実証実験	

エ 国立国際美術館

調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
液晶絵画に関する調査研究	「液晶絵画 Still/Motion」展の開催	三重県立美術館、東京都写真美術館
塩田千春に関する調査研究	「塩田千春 精神の呼吸」展の開催	
モデリアーニとプリミティヴィスムに関する調査研究	「モデリアーニ」展の開催	国立新美術館
アジア・ヨーロッパの自己像と他者像に関する調査研究	「アジアとヨーロッパの肖像 SELF and OTHER」展の開催	ASEMUS、国立民族学博物館、福岡アジア美術館、神奈川県立近代美術館、神奈川県立歴史博物館
新国誠一を中心にコンクリート・ポエトリーに関する調査研究	「新国誠一の 具体詩 詩と美術のあいだに」展の開催	武蔵野美術大学
中国現代美術に関する調査研究	「アヴァンギャルド・チャイナ - <中国当代美術>二十年 -」展の開催	国際交流基金、国立新美術館、愛知県美術館
現代の絵画に関する調査研究	21年度開催予定の「現代美術の絵画」	
メディアアートに関する調査研究	・「液晶絵画 Still/Motion」展の開催 ・「アジアとヨーロッパの肖像 SELF and OTHER」展の開催 ・「アヴァンギャルド・チャイナ - <中国当代美術>二十年 -」展の開催	
アジアの現代美術並びに美術館運営に関する調査研究	美術館、展覧会運営	アジア次世代キュレーター会議
美術館ノアートセンターにおける教育普及活動調査	教育普及事業	フランス(パリ・ボンビドゥーセンター)
ルノワールに関する調査研究	展覧会(平成22年度開催予定)の企画構成	ポーラ美術館、国立新美術館
ルネサンス期から今日にいたるまでの自画像表現に関する調査研究	展覧会(平成22年度開催予定)の企画構成	損保ジャパン東郷青児美術館
ピエロ・マンゾーニに関する調査研究	展覧会(平成22年度開催予定)の企画構成	損保ジャパン東郷青児美術館

オ 国立新美術館

調査研究テーマ	美術館活動への反映	連携機関
日本の現代美術の動向に関する調査研究	・「アーティスト・ファイル」展の開催 ・同展の図録を刊行	
モデリアーニとプリミティヴィスムに関する調査研究	・「モデリアーニ展」の開催 ・同展の図録を刊行	国立国際美術館
エミリー・カーメ・ウングワレー(オーストラリアのアボリジニ美術)に関する調査研究	・「エミリー・ウングワレー展」の開催 ・同展の図録を刊行	オーストラリア国立博物館 国立国際美術館
中国現代美術に関する調査研究	・「アヴァンギャルド・チャイナ」展の開催 ・同展の図録を刊行	国際交流基金、国立国際美術館、愛知県美術館
16・17世紀におけるヨーロッパの静物画に関する調査研究	・「ウィーン美術史美術館所蔵 静物画の秘密展」の開催 ・同展の図録を刊行	ウィーン美術史美術館

<p>研究) 教育普及その他の美術館活動のための調査研究を次のとおり実施する。 ア 美術館の教育普及事業(ワークショップ、鑑賞ガイド等)に関する調査研究 イ 日本の近現代美術資料に関する調査研究 ウ 戦後の公立美術館における展覧会データの収集及び公開に関する調査研究 エ 美術情報の収集・提供システムに関する調査研究 オ 美術館におけるデジタル・アーカイブの構築に関する調査研究</p>		ピカソに関する調査研究	・「ピカソ展」の開催 ・同展の図録を刊行	サントリー美術館、パリ国立ピカソ美術館
		加山又造に関する調査研究	・「加山又造展」の開催 ・同展の図録を刊行	高松市美術館
		ルーヴル美術館所蔵作品のうち「子ども」をテーマとした作品に関する調査研究	・「ルーヴル美術館展」の開催 ・同展の図録を刊行	ルーヴル美術館、国立国際美術館
		野村仁に関する調査研究	展覧会(平成21年度開催予定)の企画構成	
		ルネ・ラリックに関する調査研究	展覧会(平成21年度開催予定)の企画構成	オルセー美術館、グルベンキアン美術館
		松本陽子に関する調査研究	展覧会(平成21年度開催予定)の企画構成	
		野口里佳に関する調査研究	展覧会(平成21年度開催予定)の企画構成	
		ハブスブルク家の収集に関する調査研究	展覧会(平成21年度開催予定)の企画構成	京都国立博物館
		ルノワールに関する調査研究	展覧会(平成21年度開催予定)の企画構成	ポーラ美術館、国立国際美術館
		マン・レイに関する調査研究	展覧会(平成22年度開催予定)の企画構成	マン・レイ財団
		シュルレアリスムに関する調査研究	展覧会(平成23年度開催予定)の企画構成	ボンビドゥ・センター
		美術館の教育普及事業(ワークショップ、鑑賞ガイド等)に関する調査研究	教育普及事業	
		日本の近現代美術資料に関する調査研究	美術情報の収集・提供事業	
		戦後の公立美術館における展覧会データの収集及び公開に関する調査研究	美術情報の収集・提供事業	
		美術情報の収集・提供システムに関する調査研究	美術情報の収集・提供事業	
美術館におけるデジタル・アーカイブの構築に関する調査研究	美術情報の収集・提供事業			

(6) 快適な観覧環境の提供  
国民に親しまれる美術館を目指し、入館者の立場に立った観覧環境の整備や利用者の要望を踏まえた管理運営を行い、入館者の期待に応えること。  
高齢者、身体障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な観覧環境を形成すること。  
入場料金及び開館時間の弾力化など、利用者の要望や利用形態等を踏まえた管理運営を行うこと。  
ミュージアムショップやレストラン等のサービスの充実を図ること。

(6) 快適な観覧環境の提供  
-1 高齢者、身体障害者、外国人等を含めた入館者本位の快適な鑑賞環境の形成のために展示方法・外国語表示・動線等の改善、施設の整備を計画的に行う。  
-2 展示や解説パネルを工夫するとともに、音声ガイド等を導入するなど、鑑賞しやすさ、理解のしやすさに配慮する。  
入館者を対象とする満足度調査を定期的に行い、入場料金及び開館時間の弾力化などの管理運営の改善に努める。  
入館者にとって快適な空間となるよう、利用者ニーズを踏まえてミュージアムショップやレストラン等の充実を図る。

(6) 快適な観覧環境等の提供  
各館において、動線の改善や鑑賞しやすさ、理解のしやすさに配慮するため、展示や解説パネル等の工夫を行う。  
(東京国立近代美術館)  
<本館>  
ア 現代美術への理解を促すため、アーティストトークにおける作家本人による作品解説を、所蔵作品展音声ガイドのプログラムに追加する。  
イ 動線について、外部の専門家などと連携しつづ、来館者のニーズを把握した上で、対応を検討する。  
ウ 所蔵する11点(うち1点は寄託作品)の重要文化財を広く知ってもらうため、ホームページなどによる紹介や鑑賞カードを配布するなど広報に努める。  
<工芸館>  
ア フロアプラン、作品名の読み方、素材等を記載した出品リストを作成・配布するとともに、作家や作品の解説パネルやキャプションを作成・掲示し、充実した鑑賞のための情報提供を促進する。  
イ 所蔵作品展開催時に配布している各作品の注目ポイントを写真と文章で明示した鑑賞カードの充実を図り、専門知識をもたない来館者も興味深(鑑賞できる)よう情報提供に努める。  
<フィルムセンター>  
ア 展覧会の開催に際し、展示作品の出品目録を配布する。  
・「映画資料でみる 映画の中の日本文学Part1」(1回)  
・「生誕百年記念 川喜多かしこ展」(1回)  
・「無声時代ソビエト映画ポスター展」(1回)  
計3回配布  
イ 携帯電話サイトによる上映番組案内等の発信を行う。  
ウ 「映画の広場」において、大型ディスプレイにより、上映作品や展覧会情報を提供する。  
(京都国立近代美術館)  
ア 小・中学生に対してガイドブックを配布する。  
イ 英・日併記の情報誌「MEET OSAKA」(発行：財)大阪2

(6) 快適な観覧環境の提供  
**高齢者、身体障害者、外国人等への対応**  
平成20年度は、オストメイト対応のトイレ設置促進について、総務省から斡旋があり、未設置であった東京国立近代美術館工芸館、フィルムセンター、京都国立近代美術館及び国立国際美術館の4施設へ設置した。  
そのほか、各館とも次のような対応を実施している。  
・多目的(身体障害者用)トイレ、エレベータ(エスカレーター)、スロープ(手摺り)の設置  
・車椅子、ベビーカーの貸出  
・自動体外式除細動器(AED)の設置  
・盲導犬、介助犬の同伴による観覧  
・多言語による館案内表示  
・多言語による館内リーフレット、ミュージアムカレンダー等の配布  
・東京都が実施する「ウェルカムカード」に参加し、外国人来館者の所蔵作品展観覧料を割引  
・国土交通省の実施する「YOKOSO! JAPAN WEEKS 2009」に参加し、外国人旅行者の所蔵作品展観覧料の割引等を実施

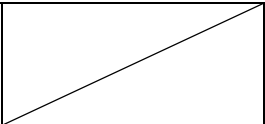
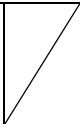
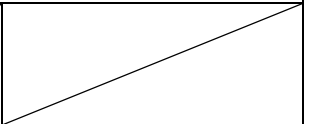
**展示、解説の工夫と音声ガイドの導入**  
各館とも次のような対応を実施している。  
・共催展における音声ガイドの導入  
・館内リーフレット、フロアプラン、ミュージアムカレンダー等の配布  
その他、東京国立近代美術館本館では、所蔵作品展で、「重要文化財」のキャプション表示を追加するとともに、ホームページに重要文化財作品の特設解説ページを設け、来館前に作品に関する知識を得られるようにした。  
フィルムセンターでは、展覧会の開催に際し、展示作品の出品目録の配布(3回)をするとともに、共催上映及び特別展の開催に際し、カタログの制作を行った。また、携帯電話サイトによる上映番組案内等を発信するとともに、「映画の広場」では、大型ディスプレイにより、上映作品や展覧会情報を提供した。  
国立西洋美術館においては、新館施設整備工事に伴う常設展示室一部閉館を考慮し、代表的所蔵作品を卓上でも楽しむことのできる「Mini Museum」の無料配布を行った。また、本館の重要文化財指定に伴い、本館ロビーにガイド映像コーナーを新設し、松方コレクション、ル・コルビュジエの建築及び主要な所蔵作品に関する映像計10本を、プロジェクターと端末2台により常時放映するとともに、国立西洋美術館本館の「ジュニア建築探検マップ」を作成し配布した。また、「美術展示物の鑑賞を助ける音声・映像案内の高度化にかかる調査研究事業」(文化庁委託業務)により、美術館を訪れる幅広い年齢を想定した新たなガイドシステムを試作し、

A

・快適な観覧環境の提供として、観覧者の安全性の確保とサービスの充実が重要であると思われるが、とりわけ後者では、レストランやショップの整備、開館時間の拡大などに努力が認められる。  
・キャンパスメンバーズ、音声ガイド、ミュージアムショップ、レストランなど、それぞれ工夫がこらされ適切な活動水準にあり、各館の努力により良好であると認められるほか、料金体系についても創意工夫が見受けられる。  
**【よりよい事業とするための意見】**  
・キャンパスメンバーズ制度のような取組を、フィルムセンターにも応用できるよう検討することが望まれる。  
・各館において、気軽に休憩・滞留できる施設の設置について、より一層の充実を図るための検討が望まれる。



	<p>1世紀協会)に展覧会情報を掲載し、外国人旅行者に対する普及広報を実施する。</p> <p>(国立西洋美術館)</p> <p>ア 国立西洋美術館フリーガイドを配布する。</p> <p>イ 企画展「作品リスト(日本語、英語)」及び小・中学生向け解説「ジュニアパスポート」を配布する。</p> <p>ウ 国立西洋美術館本館の建築探検マップ(日本語、英語、仏語、中国語、韓国語)を配布する。</p> <p>(国立国際美術館)</p> <p>ア 館概要リーフレット(日本語、英語、中国語、韓国語)を配布する。</p> <p>イ 展覧会において可能な限り「フロアガイド」を配布する。</p> <p>ウ 小・中学生向け解説「ジュニア・セルフガイド」を配布する。</p> <p>エ 英・日併記の情報誌「MEET OSAKA」(発行:(財)大阪21世紀協会)に展覧会情報を掲載し、外国人旅行者に対する普及広報を実施する。</p> <p>(国立新美術館)</p> <p>ア 展覧会において可能な限り「フロアガイド」を配付する。</p> <p>イ 中学生以上を対象とした鑑賞ガイドを配付する。</p> <p>ウ 入館料及び開館時間の弾力化等により、入館者サービスの向上を図るため、次のとおり実施する。</p> <p>ア 所蔵作品展及び特別展の高校生及び18歳未満の観覧料を無料とする。</p> <p>イ 高校生及び18歳未満の観覧料無料化の普及広報に努める。</p> <p>ウ 展覧会の混雑状況を考慮し、開館日・時間等について柔軟な対応を行う。</p> <p>エ 学生等の美術鑑賞への興味と関心を高めるため、キャンパスメンバーズ制度の普及広報に努める。</p> <p>オ 東京国立近代美術館本館・工芸館及び国立西洋美術館は、東京都が実施する外国人旅行者への観光事業「ウェルカムカード」に参加し、外国人旅行者に対して所蔵作品展の割引観覧を実施する。</p> <p>カ 東京国立近代美術館及び国立新美術館は、共通入館券事業「くるとパス」に参加し、観覧料の低廉化を図る。</p> <p>キ 京都国立近代美術館及び国立国際美術館は、共通入館券事業「ミュージアムくるとパス」(関西2008)に参加し、観覧料の低廉化を図る。</p> <p>ク 東京国立近代美術館及び国立西洋美術館は、東京都が実施する青少年育成事業「家族ふれあいの日」に参加し、所蔵作品展観覧料の優待を実施する。</p> <p>(東京国立近代美術館)</p> <p>ア 国民に広く美術作品等に親しんでもらうため、所蔵作品展を廉価で観覧できるパスポート観覧券の広報に努める。</p> <p>&lt;本館・工芸館&gt;</p> <p>ア 年始は1月2日(金)から開館する。</p> <p>イ 休館日のうち、4月28日(月)及び5月7日(水)を開館する。</p> <p>&lt;フィルムセンター&gt;</p> <p>ア 企画上映「スターと監督 長谷川一夫と衣笠貞之助」(生誕110周年 スターと監督 大河内傳次郎と伊藤大輔、及び共催上映「生誕100年 川喜多かしこヨーロッパ映画の黄金時代」第9回東京フィルメックス特集上映)において、1日3回上映を実施する。</p> <p>イ 小ホールにおいては「京橋映画小劇場」と題する上映会を年間5企画程度実施するとともに、外部団体との共催上映「EUFILMフェーズ2008」、「びあフィルム・フェスティバルの30年」を実施する。</p> <p>ウ 観客動向調査等を含む調査及び検討を行い、平成21年度からの会員制度等の導入について検討する。</p> <p>(京都国立近代美術館)</p> <p>ア 休館日のうち、5月6日(火・祝)を開館する。</p> <p>イルノール・ルノール展開催中の7月1日(火)～7月21日(月・祝)の開館時間を午後7時まで延長する。</p> <p>ウ 大文字・五山送り火の日である8月16日(土)に夜間開館を実施する。</p> <p>(国立西洋美術館)</p> <p>ア クレジットカード及び電子マネー(Suica 及びPASMO)による観覧券の窓口販売を行う。</p> <p>イ 休館日のうち、4月28日(月)、8月11日(月)を開館する。</p> <p>ウ 年始は1月2日(金)から開館する。</p> <p>エ 春の企画展開催日から秋の企画展閉会日までの開館時間について、開館時間を午後5時30分まで延長する。</p> <p>オ 美術館無料開放日「Fun Day」を開催し、より多くの人々にコレクションと美術館をアピールする。(所蔵作品展無料)</p> <p>カ 「国際博物館の日」を所蔵作品展無料観覧日とし、上野地区の諸機関と連携してイベントを行う。</p>	<p>本館常設展示室で実証実験を行った。</p> <p>国立新美術館においては、「アヴァンギャルド・チャイナ」鑑賞ガイドブック「アートのとびら vol.1.3」(日英併記)、「アーティスト・ファイル2009」鑑賞用パンフレット「ちいさなアーティスト・ファイル2009」を作成配布した。</p> <p><b>入場料金、開館時間等の弾力化</b></p> <p>文化の日(11月3日)及び国際博物館の日(5月18日)に観覧料を無料(国立新美術館を除く。)にするとともに、開館時間等については、夜間開館の実施、年始やゴールデンウイーク等休館日の臨時開館を実施した。また、所蔵作品展及び自主企画展について、高校生以下及び18歳未満の者の観覧料の無料化を実施した。</p> <p>その他平成20年度の各館の取組は以下のとおりである。</p> <p>(ア)東京国立近代美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・東山魁夷展では、会期中の木・金・土曜を20時まで開館</li> <li>・本館・工芸館では、千代田区「さくらまつり2009」ガイドマップ持参者について所蔵作品展一般料金を割引</li> <li>・フィルムセンターでは、1日の上映回数を弾力化</li> <li>・フィルムセンターでは、「中央区まるごとミュージアム」への協力を行い、11月2日の観覧料を無料化</li> <li>・フィルムセンターでは、学生層を対象とした会員制度の導入について、調査検討を実施</li> </ul> <p>(イ)京都国立近代美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・関西文化の日(11月17日、11月18日)の観覧料の無料化</li> <li>・「ルノール・ルノール」展の期間中の7月1日～21日までの間について、毎日19時まで開館</li> </ul> <p>(ウ)国立西洋美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・夏休み子ども音楽会「上野の森文化探検」(主催:東京文化会館(東京都歴史文化財団)ほか)参加者の所蔵作品展観覧料を無料化(平成20年8月3日(日)のみ)</li> <li>・OPEN museum事業の一環として、美術館無料開放日「FUN DAY」を開催し、ギャラリートークや建築ツアー等美術館を楽しむためのプログラムを実施(期間:平成20年9月20日(土)～9月21日(日))</li> <li>・OPEN museum事業の一環として、「Museum X mas in国立西洋美術館(美術館でクリスマス)」(期間:平成20年11月28日(金)～平成21年1月4日(日))における、前庭のイルミネーション装飾やポストカード等のプレゼントなど各種プログラムの開催</li> <li>・「国際博物館の日」を記念し、上野地区の諸機関と連携してミュージアムラリーを実施し、参加者へのプレゼント(抽選)として、所蔵作品展無料観覧券を提供(期間:平成20年4月26日(土)～5月31日(土))</li> </ul> <p>(エ)国立国際美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・昭和の日(4月29日)、関西文化の日(11月17日、18日)の所蔵作品展観覧料の無料化</li> <li>・自主企画展開催期間中の金曜日に19時まで開館</li> <li>・レストランの昼食利用者について、再入場を許可</li> </ul> <p>(オ)国立新美術館</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同館で開催される公募団体展と同館自主企画展の観覧料の相互割引</li> <li>・東京メトロ、都営地下鉄ワンデーパスによる観覧料割引</li> <li>・ペア観覧券等による観覧料割引</li> <li>・共催展での高校生無料観覧日の設定の推進</li> <li>・「ピカソ」展において、同時開催のサントリー美術館との共通前売券を販売</li> <li>・東京都及び近隣の美術館施設等と連携し、「六本木アートナイト」(3月28日(土)～29日(日))を実施。3月28日は、開催中の企画展(自主企画展、共催展)を22時まで開館。</li> </ul> <p><b>キャンパスメンバーズ制度の実施</b></p> <p>平成18年2月より、国立美術館全体の事業として発足した、大学、短期大学、高等専門学校及び専修学校等を対象とした会員制度「国立美術館キャンパスメンバーズ」について、メンバー校は新規11校を加え44校、各館利用者数は46,677名となった。平成20年度は、入会案内のパンフレットを作成、配布し、募集に努めた。</p> <p><b>ミュージアムショップ、レストラン等の充実</b></p> <p>ミュージアムショップについては、京都国立近代美術館では、ワンコインで購入可能な商品の販売、国立西洋美術館では、所蔵作品の「睡蓮」の絵からイメージしたオリジナルのフレーバーティーの新商品の開発、国立国際美術館では、オリジナルグッズの充実のほか、企画展に合わせた書籍販売等来館者のニーズに合わせた運営、国立新美術館では、ミュージアムショップに併設しているミニギャラリー(SFTギャラリー)展(全7回)の企画協力を行うなどの取組を行った。また、東京国立近代美術館と国立西洋美術館では2館の所蔵作品を使用したカレンダーを作成し販売するという新たな試みを行った。</p> <p>レストランについては、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館及び国立新美術館では、企画展に関連した料理をメニューに取り入れた。また、東京国立近代美術館では、レストランのホームページに料理等の写真を掲載し、情報提供の充実を図るとともに、「高梨豊」展の半券で、1,000円以上の利用者に対し、コーヒー又は紅茶を1杯無料にするサービスを行った。</p>	
--	---	--	--

	<p>キ 12月を中心にクリスマスイvent「ミュージアム・クリスマス in 国立西洋美術館」を開催する。  (国立国際美術館)  ア 小学生以下の子どもを対象とした託児サービスを実施する。  イ 企画展開催中の金曜日の閉館時間を午後7時まで延長する。  ウ 休館日のうち、5月6日(火・祝)を開館する。  (国立新美術館)  ア 近隣の美術館と「六本木アートトライアングル」を構成し、相互割引制度の実施に努める。  イ 施設を使用する美術団体等と連携し、可能な限り企画展との観覧料割引制度の実施に努める。  ウ 可能な限り同時期に開催される企画展の同時割引の実施に努める。  エ 共催展開催に際して、共催者と高校生無料招待日の設定について協議し、了解を得たものから逐次実施する。  オ 他館と同時に開催する「ピカソ展」では連携して観覧料の割引を設定する。  カ クレジットカード及び電子マネー(Suica 及びPASMO)による観覧券の窓口販売を行う。  キ 来館者数に応じ柔軟な券売対応に努める。  ク 小学生以下の子どもを対象とした託児サービスを実施する。  利用者のニーズを踏まえ、ミュージアムショップやレストラン等の充実を図る。  国立新美術館では、ミュージアムショップ内に設けるミニギャラリーへの企画協力を行う。</p>				
<p>(7)国立新美術館の開館  我が国の美術創造活動の活性化を推進するため、平成19年1月の開館に向けて、我が国の5番目の国立の美術館である「国立新美術館」の開館準備を進めること。</p>					
<p>(7)国立新美術館の開館  我が国の美術創造活動の活性化を推進するため、「国立新美術館」を平成19年1月に開館し、これに向けた体制整備、展示等の実施準備を進める。</p>		<p>国立新美術館の開館  【定性的に評価】</p>	<p>(7)国立新美術館の開館  平成19年度限りの事項。</p>		

## 2. 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示しうるナショナルコレクションの形成・継承

評定 <u>  A  </u>	<h3 style="text-align: center;">評価のポイント</h3> <p style="text-align: center;">各館とも予算の厳しい中、ふさわしい作品の収集に最大限の努力を払っていることがうかがえ、全体に適正に実施されている。</p>
中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。	

中期目標		評価基準					主な実績及び自己評価	評定	評価委員会によるコメント																																																	
中期計画	年報計画	S	A	B	C	F																																																				
<b>2 我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションの形成・継承</b> 国立美術館は、我が国唯一の国立の美術館として、我が国の近・現代美術及び海外の美術を体系的・通史的に提示し得るナショナルコレクションを形成し、海外の主要な美術館と交流するとともに、これらの貴重な国民的財産を後世に伝え、継承していくことが必要である。このため、国立美術館は、適宜適切な収集を進めるとともに、作品の保管環境の充実につとめることとする。																																																										
(1) 各館は、美術作品の動向に関する情報収集能力と収集の機動性を高めるとともに、それぞれの役割・任務に沿って収集方針を定め、これに基づき、計画的かつ適時適切な購入と寄贈・寄託の受け入れを進め、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の充実を図ること。																																																										
(1)-1 以下に掲げる各館の収集方針に沿って、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の蓄積を図る。 なお、作品の収集に当たっては、その美術史的価値や意義等についての外部有識者の意見等を踏まえ、適切な購入を図る。また、収集活動を適時適切に行うために、美術作品の動向に関する情報の入手と機動性の向上に努める。 (東京国立近代美術館) 近・現代の絵画・水彩・素描、版画、彫刻、写真等の作品、工芸作品、デザイン作品、映画フィルム等を収集する。 美術・工芸に関しては所蔵作品により近代美術全般の歴史的な常設展示が可能となるように、歴史的価値を有する作品・資料を収集する。 また、映画フィルム等については、残存するフィルム等の収集に努めるとともに積極的に復元を図る。 (京都国立近代美術館) 近代美術史における重要な作品など、近・現代の美術・工芸・写真・デザイン作品等を収集する。 その際、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した所蔵作品の充実にも配慮する。 (国立西洋美術館) 中世末期から20世紀初頭に至る西洋美術の流れの概観が可	(1)-1 各館の収集方針に沿って、体系的・通史的にバランスのとれた所蔵作品の蓄積を図る。 なお、作品の収集に当たっては、その美術史的価値や意義等についての外部有識者の意見等を踏まえ、適切な購入を図る。また、収集活動を適時適切に行うために、美術作品の動向に関する情報の入手と機動性の向上に努める。 (東京国立近代美術館) <本館> 近代日本美術の体系的コレクションの充実を図る。特に、次の点に留意する。 ①1970年代以前の欧米主要作家の作品の補充 ②1970年代から現代までのビデオ・アート的重要作品の収集 パブリックスペースに設置する作品の収集 新しいメディアによる作品収集の検討 <工芸館> 近代日本における工芸の体系的コレクションの充実を図る。特に次の点に留意する。 明治から昭和初期の工芸の近代化を証する作品の補充 戦後の伝統工芸や造形的な表現の現代作品の収集 ヨーロッパの工芸及びモダンデザイン作品の充実 現代工芸を代表する橋本真之の鍛金大作(果樹園 果実の中の木もれ陽、木もれ陽の中の果実)(1978-1988)の収集 <フィルムセンター> 戦前の日本映画を中心に散逸や劣化の危険性が高い映画フィルム、日本劇映画のうちで比較的収集率の低い1950年代後半から60年代及び90年代の映画フィ	<b>【収蔵品の収集】</b> <b>【定性的に自己評価】</b>	<b>(1) 美術作品の収集</b> <table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>購入点数</th> <th>購入金額(千円)</th> <th>寄贈点数</th> <th>年度末所蔵作品数</th> <th>年度末寄託品数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館(本館)</td> <td>135</td> <td>161,998</td> <td>110</td> <td>9,878</td> <td>250</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館(工芸館)</td> <td>5</td> <td>45,700</td> <td>142</td> <td>2,818</td> <td>143</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>82</td> <td>148,242</td> <td>74</td> <td>9,501</td> <td>1,023</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>48</td> <td>296,227</td> <td>1</td> <td>4,566</td> <td>13</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>41</td> <td>179,950</td> <td>100</td> <td>5,966</td> <td>76</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>311</td> <td>832,117</td> <td>427</td> <td>32,729</td> <td>1,505</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>購入本数</th> <th>購入金額(千円)</th> <th>寄贈本数</th> <th>年度末所蔵本数</th> <th>年度末寄託品本数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館(フィルムセンター)</td> <td>375</td> <td>289,411</td> <td>7,671</td> <td>59,640</td> <td>8,018</td> </tr> </tbody> </table>	館名	購入点数	購入金額(千円)	寄贈点数	年度末所蔵作品数	年度末寄託品数	東京国立近代美術館(本館)	135	161,998	110	9,878	250	東京国立近代美術館(工芸館)	5	45,700	142	2,818	143	京都国立近代美術館	82	148,242	74	9,501	1,023	国立西洋美術館	48	296,227	1	4,566	13	国立国際美術館	41	179,950	100	5,966	76	計	311	832,117	427	32,729	1,505	館名	購入本数	購入金額(千円)	寄贈本数	年度末所蔵本数	年度末寄託品本数	東京国立近代美術館(フィルムセンター)	375	289,411	7,671	59,640	8,018	<b>A</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・限られた予算のなかで収蔵品の獲得に真摯な努力が払われていることは高く評価できる。</li> <li>・フィルムセンターは、最初の「紅葉狩(大谷版)」の収集保管、「羅生門」のデジタル復元など大きな成果を上げていると認められる。</li> </ul> <p>【よりよい事業とするための意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・寄贈作品の受け入れに対し、より積極的な意味を見出す方針を打ち出すことが望まれる。</li> <li>・建築関連資料、メディアアート関連資料、アーカイブ資料などの収集と拡充が必要であると考えられる。</li> </ul>
館名	購入点数	購入金額(千円)	寄贈点数	年度末所蔵作品数	年度末寄託品数																																																					
東京国立近代美術館(本館)	135	161,998	110	9,878	250																																																					
東京国立近代美術館(工芸館)	5	45,700	142	2,818	143																																																					
京都国立近代美術館	82	148,242	74	9,501	1,023																																																					
国立西洋美術館	48	296,227	1	4,566	13																																																					
国立国際美術館	41	179,950	100	5,966	76																																																					
計	311	832,117	427	32,729	1,505																																																					
館名	購入本数	購入金額(千円)	寄贈本数	年度末所蔵本数	年度末寄託品本数																																																					
東京国立近代美術館(フィルムセンター)	375	289,411	7,671	59,640	8,018																																																					
<b>ア 収集作品の特徴</b> (ア) 東京国立近代美術館(本館) ①1970年代以前の欧米主要作家の作品の補充、②1970年代から現代までのビデオ・アート的重要作品の収集、③パブリックスペースに設置する作品の収集、④1940年代以前の洋画・日本画の収集に努めた。 購入作品については、長年行方不明だった福沢一郎の《メトロ工事》《人》を発見・購入するとともに、アメリカ戦後美術を代表する作家の大型作品モーリス・ルイス《神酒》を初めて収蔵した。また、アンリ・ミシュロー、瀧口修造、小林正人など、国内外の水彩・素描作品のまとまった数の収集にも大きな成果をあげた。写真作品では、奈良原一高の初期の重要作であり、1950年代の日本写真を代表する作品でもある《人間の土地》より緑なき島-軍艦島：軍艦島全景》他同シリーズより全40点を購入した。 寄贈作品については、片岡球子《ポーズ》3、7、17、21、梅原龍三郎《瑠璃子像》《葬壇》、正木隆《造形00-1》他2点、井田照一版画作品12点などの寄贈が作家又は遺族から相次いだ。また、長年行方不明だった麻生三郎《花(アマリリス)》が発見され、寄贈された。写真作品では、大辻清司《陳列窓》他64点や伊奈英次《In Tokyo》より新宿区西新宿》他同シリーズ全10点など、各作家の初期の重要作を中心に多数の寄贈を受けた。																																																										
(工芸館)																																																										

<p>能となるように、松方コレクションを中心とした近代フランス美術の充実、近世ヨーロッパ絵画の充実及びヨーロッパ版画の系統的収集を行う。</p> <p>(国立国際美術館)</p> <p>日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするために、国際的な交流が極めて盛んになった1945年以降の国内外の美術並びに同時代の先端的な美術を中心に、総合的な影響関係を踏まえつつ、体系的に収集する。</p> <p>(1)-2 所蔵作品の体系的・通史的なバランスの観点から欠けている部分を中心に、寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、その積極的活用を図る。</p> <p>(1)-3 各館の収集方針に則しつつ、緊密な情報交換と連携を図りながら、国立美術館全体のコレクションの充実に努める。</p>	<p>ルム、デジタル技術により復元された映画フィルム及び複製物、企画上映や国際交流事業に必要な映画フィルム、これまで受入れのなかった会社等からの寄贈映画フィルムの収集に努める。また、次の点について留意する。</p> <p>企業等の管理下に置かれていないため、逸失・劣化の可能性が高い非商業映画、映画産業の枠外で製作された日本映画等の優先的な収集</p> <p>文化庁との共同事業による「近代歴史資料調査」によって、新たに残存が確認されたフィルムの優先的な収集</p> <p>(京都国立近代美術館)</p> <p>我が国の近・現代において生み出された美術、工芸、建築、デザイン、写真等で、主として美術・工芸について、近代日本美術史の骨格を形成する代表作及び各時期において重要な位置を占める記念的作品、近代美術史に組み込まれていくことになる現代美術の秀作を積極的に収集するとともに、優れた写真作品の収集にも努める。</p> <p>併せて各ジャンルの欠落部分を補い所蔵作品を充実させるほか、ビデオ・インスタレーションなどのメディア・アートの作品収集を開始する。</p> <p>また、故・上野伊三郎・リチ夫妻の作品・資料を中心に、初期日本近代建築とデザイン教育の実態を体系化する。さらに、故・川西英が所蔵した創作版画作品・資料の収集を継続し、創作版画の集中的アーカイブの構築を目指す。</p> <p>京都に設置されている立地条件から、京都を中心とする関西ないし西日本に重点を置き、地域性に立脚した所蔵作品の充実を図る。また、村上華岳、富田漢仙などの収集を継続し、京都画壇作品の充実を図る。</p> <p>(国立西洋美術館)</p> <p>15世紀～20世紀初頭のヨーロッパ絵画の収集に努める。</p> <p>ドイツ・フランドル・イタリア・フランスを中心にヨーロッパ版画のコレクションを充実させる。</p> <p>旧松方コレクション作品の情報収集を継続する。</p> <p>(国立国際美術館)</p> <p>日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするため、主として、次のとおり収集する。</p> <p>1945年以降の日本の現代美術の系統的収集(日本の戦後美術を踏づける主要作)。</p> <p>国際的に注目される国内外の同時代の美術の収集(1990年代以降の欧米の絵画動向、1980年代以降の中国の美術動向)。</p> <p>また、映像・メディア・アート担当客員研究員による収集候補作品のリストアップを行う。</p> <p>(1)-2 寄贈・寄託品の受け入れを推進するとともに、所蔵作品展等における積極的な活用を図る。</p> <p>(1)-3 各館の陳列品購入費を一部留保し、高額作品の購入、緊急な購入等に対応する。なお、作品収集に関しては、学芸課長会議等で情報交換や連絡調整を行う。</p>	<p>①明治から昭和初期の工芸の近代化を証する作品の補完、②戦後の伝統工芸や造形的な表現の現代作品の収集、③ヨーロッパの工芸及びデザイン作品の充実、④現代工芸を代表する橋本真之の鍛金大作《果樹園―果実の中の木もれ陽、木もれ陽の中の果実》(1978-1988)の収集という方針に基づき収集を行った。</p> <p>購入作品については、陶芸作品で、平成22年度に企画展開催を控えたルーシー・リーの希少なネックレス作品や、工業デザインでドイツのユークントシュティール様式を代表するリヒャルト・リーマーシュミットのパンチボール作品を収蔵した。</p> <p>寄贈作品については、昭和4年第10回帝展に出品された木村雨山の友禅壁掛、山本鼎が推進した農民美術運動を実証する工芸資料など、昭和初期の近代化を証する作品を収蔵した。その他、戦後の伝統の陶芸界で重要な荒川豊蔵や浜田庄司、バーナード・リーチ、三輪壽雪らを主とした染野義信・啓子夫婦コレクションや、現代の陶芸界を代表した辻清明の作品、現代漆芸の佐治賢使の1960年代の重要なパネル作品など、平成20年度は多数の寄贈を受けた。また、工業デザインで、平成20年度に特別展を開催した小松誠の主要作品と、20世紀デザイン界をリードしたマルセル・プロイヤーの初期を代表する著名な肘掛け椅子を収蔵した。</p> <p>(フィルムセンター)</p> <p>映画フィルムの購入作品については、戦後映画の代表作『蜂の巣の子供たち』(1948年)の可燃性マスターポジより、デュブネガ及びプリントを収集した。また、監督の代表作にもかかわらず、これまでマスターポジしか存在しなかった『金環蝕』(1934年)、『火花』(1956年)、『正義派』(1957年)等について、デュブネガ及びプリントの収集を行った。日本を代表する映画監督のうち、比較的収集率の少なかった野村芳太郎、鈴木清順、吉田喜重監督の作品については、プリント等の購入によりコレクションを充実することができた。上映企画に必要となる作品の収集については、亀井文夫監督作品及び怪獣・SF映画作品について、多くのフィルムを収集した。加えて、収集本数の少なかった蔵原惟緒監督の作品については、英語字幕付プリント10本を購入することにより、今後の国際交流事業に資するフィルムを収集することができた。</p> <p>このほか、角川映画株式会社がアメリカ・アカデミー・フィルム・アーカイブ(FIAF会員)と共同で行った『羅生門』(1950年)のデジタル復元に際し、素材提供、監修協力を行うとともに、復元版プリントを収集した。</p> <p>寄贈された映画フィルムについては、文化・記録映画及びニュース映画製作会社から多くの原版類を受入れたことが、大きな特徴である。可燃性フィルムについては、マキノ雅広監督のご遺族からマキノ真三監督『暗黒街の天使』(1948年)のオリジナルネガ、戦前茅ヶ崎にあった結核療養所・南湖院に残されていた『東宮殿下御外遊 貴況 大正十年』(1921年)他、多くのプリント等これまで残存が確認されていなかったユニークな作品を収集することができた。また、文化庁との「近代歴史資料調査」の結果、新たに発見されたフィルムのうち、最初期の日本映画『紅葉狩(大谷版)』(1899年)の可燃性プリント、アメリカ・シカゴで開催された博覧会の記録『世紀の進歩博覧会』(1933年)の16mmプリント等、貴重な作品のフィルムの寄贈を受けた。</p> <p>映画関連資料については、個人所蔵の外国映画図書・雑誌940点のほか、有限会社バス・ストップからの劇場用パンフレットやプレス資料2,101点、ユニフランス東京支社からフランス映画のプレス資料など622点の寄贈を受けた。また、藤田敏八監督の遺族から受領した同監督の個人資料674点の整理が終了し、寄贈手続きが完了した。</p> <p>(イ) 京都国立近代美術館</p> <p>体系的展覧のために補うべき重要作家の作品収集に努めるとともに、旧川西コレクション、アイリーン・スミス・コレクションなど、長年続いている重点作品の購入を継続するとともに、メディア・アートなど新しい芸術表現の収集にも留意するとの方針に基づき収集を行った。</p> <p>購入作品については、日本画では岡本神草、富田漢仙、三上誠など、油彩画ではヨハネス・イッテンの作品を、陶芸ではピーター・ヴォーコスなどを購入し、所蔵作品の欠落部分を補うことができた。また、ビデオ・アートの重要作家ウィリアム・セントリッジの作品を収蔵した。</p> <p>寄贈作品については、日本画の岡本神草の草稿など多数の資料、写真家W.ユージン・スミスの代表作《風呂に入る上村智子》を、現代美術では紙幣に関する作品のみを収集した個人コレクション、野村仁の重要なガラス彫刻作品の寄贈を受けた。また、日本の近代建築の黎明期に大きな足跡を残した上野伊三郎とその妻リチの貴重な資料多数の寄贈を受けた。</p> <p>(ウ) 国立西洋美術館</p> <p>フランスに集中している近代美術コレクションの幅を広げるため、フランス以外の地域の重要な近代美術作品や、ドイツ、フランドル、イタリア、フランスを中心としたヨーロッパ版画コレクションの充実に努めるとの方針に基づき収集を行った。</p> <p>購入作品については、美術作品購入費の本部留保分を活用し、デンマーク近代絵画を代表する画家ヴィルヘルム・ハンマースホイの典型的な作品を購入した。</p> <p>寄贈作品については、19世紀後半のフランス・アカデミスム絵画を代表する画家ウィリアム＝アドルフ・ブーグローの作品の寄贈を受けた。</p> <p>(エ) 国立国際美術館</p> <p>日本美術の発展と世界の美術との関連を明らかにするため、①1945年以降の日本の現代美術の系統的収集、②1945年以降の欧米の現代美術の系統的収集、③国際的に注目される国内外の同時代の美術の収集を行った。</p> <p>購入作品については、国内では未だ所蔵する館が少ないマルレーネ・デュマスのほか、マーク・クイン、ヤン・ファールドなど、現在注目を集める欧米作家の作品を収集した。また、現代日本の重要作家である植松奎二の作品、「アヴァンギャルド・チャイナ展」の出品作家でもある中国人作家、孫原&amp;彭禹の作品などを購入し、現代美術館として重要な部分を補う作品を収蔵した。</p> <p>寄贈作品については、1991年に回顧展を開催した工藤哲巳の作品及び教育資料をまとめて受贈した。</p>		
---	--	--	--	--

<p>(2) 収蔵庫等保存施設の狭隘・老朽化への対応を図り、所蔵作品全体を適切な保存と管理環境下に置き、それらを適切に後世へ継承すること。</p>				
<p>(2)-1 国民共有の貴重な財産である美術作品を永く後世に伝えるとともに、展示等の美術館活動の充実を図る観点から、収蔵庫等保存施設の狭隘・老朽化への対応に積極的に取り組む。</p> <p>(2)-2 環境整備及び管理技術の向上に努めるとともに、展示作品の防災対策の推進・充実を図る。</p>	<p>(2)-1 保存施設の狭隘・老朽化への対応に取り組む。 国立美術館各館が所蔵する美術作品、映画フィルム、図書・資料等の増大に対応するため、相模原地域の活用方法を含め、収蔵施設・設備等の拡充について検討する。</p> <p>京都国立近代美術館においては、収蔵庫の収蔵スペースを確保するため、ラック及び収蔵棚等の増設(第2年次分)を実施する。</p> <p>(2)-2 東京国立近代美術館本館及び国立西洋美術館において、老朽化した空調用設備の更新及び改修工事を行い、保存・管理環境の整備を図る。</p>	<p>収蔵品の保管・管理 【定性的に評価】</p>	<p><b>(2) 収蔵庫等保存施設の狭隘・老朽化への対応と適切な保存環境の整備等</b></p> <p>① 収蔵庫等の狭隘・老朽化への対応</p> <p>ア 東京国立近代美術館 本館では、収蔵庫の狭隘化により作品間に適切な距離が保てないことから、空気の流通が妨げられ、虫害の発生が見られたため、定期的に虫害のモニタリング、トラップの設置、庫内の清掃などを行い、その解消に努めた。</p> <p>東京国立近代美術館の収蔵庫が今後数年で限界に達することが見込まれることから、東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館に隣接する「キャンプ淵野辺留保地」の利用について相模原市、宇宙航空研究開発機構及び東京国立近代美術館の3者で将来的な利用計画についての協議を進めている。</p> <p>工芸館では、平成20年度は購入・寄贈169点、寄託9点と多くの新収蔵作品を受け入れたが、特に大きな作品が少なかったことや共箱付きであったことで、棚の中及び床面での積み重ねによる保管が可能であったため、スペースを確保できたが、特に大きな収納スペースを要する家具デザインの作品や収納箱のない作品については梱包計画を検討・作成し、保管スペースの効率を高める必要がある。</p> <p>フィルムセンターでは、国外の同種機関における保存施設を視察し、可燃性フィルムを含む映画フィルムの保管環境について、研究員との間で情報交換等を行った。</p> <p>イ 京都国立近代美術館 前年度から平成20年度にかけて行われる予定であった、収蔵ラック改修工事が、平成20年度の入札が不調に終わったため、平成21年度に再度、倉庫等の改修工事を予定している。平成19年度完了済みの収蔵ラック上部への搬入・搬出作業が安全に行えるように手すりを設置した。</p> <p>ウ 国立西洋美術館 前年度から20年度にかけて新館空調設備改修工事を実施し、収蔵庫及び展示室の環境を向上した。また、新館収蔵庫内に彫刻固定棚を設置し、これまで床に横置きで保管していた等身大の彫刻作品を立てた状態で保管できるようにしたことにより、彫刻作品の収納効率を高めた。</p> <p>エ 国立国際美術館 既に収蔵スペースの許容量に達している状況であるが、収納方法を工夫し作品の保存環境を維持している。</p> <p>② 保存環境の整備等と防災対策の推進・充実</p> <p>ア 東京国立近代美術館 (本館・工芸館) 防火扉、消火栓をふさぐような用具、クレートの置き方を定期的にチェックし、常に円滑な警報の作動がなされるよう注意を払った。</p> <p>(フィルムセンター) 高圧ガスに関する「非常の際に取るべき措置」についての掲示物を新たに作成し、安全な設備管理の運用を促した。</p> <p>イ 京都国立近代美術館 平成20年12月8日に消防署指導のもとで避難誘導訓練・消火訓練・AED使用訓練を実施した。</p> <p>ウ 国立西洋美術館 新館空調設備改修工事により自家発電機を設置して新館の収蔵庫及び第2・4展示室に繋ぎ、災害時に送電が停止した際にも所蔵作品の保存環境を維持できる態勢を整えた。また、新館収蔵庫内に彫刻固定棚を設置し、地震時の対策とした。屋内彫刻の台座交換及び免震滑り板装着を平成18年度より実施しており、平成20年度までに約8割の彫刻作品について実施した。</p> <p>エ 国立国際美術館 火災発生時の適切な避難誘導、初期消火にあたるため、職員、警備員、監視員等による全館避難訓練を実施した。</p>	<p>A</p> <p>作品資料の保管については、適正な保存環境のもとに、各館と協力的な努力が日常的に払われていると認められる。</p> <p>【よりよい事業とするための意見】 収蔵庫の保存施設などの狭隘化・老朽化対策については、各館共通の重要課題であり、早急な対応が望まれる。</p>
<p>(3) 各館の連携を図りつつ、所蔵作品についての修理、修復の計画的実施により適切な保存を行い、適切に後世へ継承すること。</p>				
<p>(3) 修理・修復に関しては、各館の連携を図りつつ、外部の保存科学の専門家等とも連携して、所蔵作品の保存状況を確実に把握し、修理・修復の計画的実施に努める。</p>	<p>(3) 所蔵作品の保存状況を把握し、緊急に処置を必要とする所蔵作品から、分野ごとに計画的に修復を行う。</p> <p>東京国立近代美術館本館では、保存科学と修復に関する外部の専門家との定常的な連携による作品ケアの試みを開始したが、今後、作品移動の際の保存状況管理などについても連携を拡大する。</p> <p>東京国立近代美術館工芸館では、温湿度の適正な調整を行い、全般的な作品の保全に努めるとともに、染織のシミや黴の除去、漆芸の汚れ除去や漆塗幕面の養生、人形のヒビの修復等、保存修復を緊急度の高いものから計画的に行う。</p> <p>京都国立近代美術館では、平成20年度に予定している「上野伊三郎・リチ展」への出品予定作品と資料の修復・額装、及び将来開催予定の「パブリック美術館協会展」の出品候補となる三上誠らの日本画作品の修復作</p>	<p>収蔵品の修理 【定性的に評価】</p>	<p><b>(3) 所蔵作品の修理・修復</b></p> <p>① 東京国立近代美術館 絵画47件、素描1件、版画9件、工芸4件、映画フィルムデジタル復元5本(本館)</p> <p>平成20年度より、修復家による油彩作品の全点点検を本格化させ、約3分の2が終了した。その過程で発見された、きわめて状態の悪い作品3点につき、迅速に修復作業を行う等当該全点点検により、充実した作品保全の対策を取ることが可能となった。</p> <p>また、外部との連携として、「ブリジット・ライリー展」(パリ市立近代美術館)に、ライリーの大作《賛歌》を貸し出した際、作家本人と、パリ市立近代美術館の修復家と、同館クーリエの三者により、今後の保全方法について、詳細な協議を行った。</p> <p>(工芸館) 修復の緊急度の高い染織作品として、志村ふくみ《蘇芳染たて織織着物》のシミと黴、汚れの除去、洗い張り、裏地の交換等を行った。このほか、人形では、虫食いの穴及びその痕跡のあった平田郷陽《遊楽》及び《萌芽》の燻蒸を緊急に実施するとともに、穴の補修と胡粉塗りや彩色等の修復を行った。</p> <p>また、修復に際しては、外部の専門家と連携し、詳細に点検及び修復の仕様を検討し、実施した。</p>	<p>A</p> <p>・東京国立近代美術館の「ブリジット・ライリー作品」の修復についてのパリ市立美術館との連携や、フィルムセンターの修理作業、国立西洋美術館のタペストリーの修復など、高い評価に値する。</p> <p>・東京国立近代美術館における日本画の修復における企画審査は、重要な試みであると認められる。</p> <p>【よりよい事業とするための意見】 近現代美術に特化した保存・修理体制の整備については、法人全体として立案することが望まれる。</p>

	<p>業を重点的に行う。</p> <p>国立西洋美術館では、彫刻作品(ロダン、ピストルフィ)を中心に保存修復処置を行う。</p> <p>国立国際美術館では、彫刻作品(堀内正和)の保存修復処理を行う。</p>		<p>(フィルムセンター)</p> <p>映画フィルムのデジタル復元5本、ノイズリダクション等74本、不燃化作業13本を実施した。</p> <p>最初期の日本映画を代表する一本『紅葉狩』(1899年)について、平成21年度以降に全篇デジタル復元、最長版作成を実施するに当たり、解像度及び修復レベルの比較テストを行った。</p> <p>黒澤明監督『羅生門』(1950年)について、角川映画とアカデミー・フィルム・アーカイブ(アメリカ、FIAF会員)が行ったデジタル復元に際し、フィルムセンター所蔵の35mmプリントの提供を行うとともに、復元過程の諸段階において技術的、学術的な監修を行った。</p> <p>『月よりの使者』(1933年)、『薩摩飛脚』(1938年)など、前年度に全米日系人博物館から寄贈を受けた16mmプリントについて、35mmへのブローアップ及びデュープネガ、プリントへの復元を行った。</p> <p>亀井文夫監督『女ひとり大地を行く』(1953年)について、所蔵する可燃性オリジナルネガ及びマスターポジを調査した結果、オリジナルが編集・短縮されていることが判明したことから、マスターポジを基に最長版の作成を行った。</p> <p>前年度に引き続き、フィルムとSP盤レコードを同期させて再生するレコード・トーキー作品の復元について、『大きくなるよ』(1931年)など、13作品について実施した。</p> <p>② 京都国立近代美術館 絵画2件 「上野伊三郎+リチ コレクション展」開催のため、寄贈を受けた膨大な図面・資料を整理、一部修復、マット装、額装を施し、展示可能な状態を実現した。また、「W.ユージン・スミス写真展」開催のため、既に収蔵している写真作品の一部のマット装を新たに施し、展示可能な状態を実現した。</p> <p>③ 国立西洋美術館 絵画3件、資料・その他5件 4年がかりで実施してきた、タペストリー修復の最終段階で、「シャンボール城」の裏面補強が終了し、また、平成20年度寄贈を受けたブーグローの「少女」の修復を完了し、展示公開可能となった。</p> <p>彫刻作品の免震台については、J・P・ゲッティ美術館並びにアテネ工科大学、アテネ近代美術館との共催により、国際シンポジウム「美術館・博物館コレクションの地震対策」に参加、講演を行った。</p> <p>④ 国立国際美術館 絵画1件、水彩5件、版画6件、彫刻3件 かねてより計画していた版画などの修復のほか、平成21年度に展示予定の彫刻作品や地下1階の無料ゾーンに常設展示している彫刻の修復を行った。特に紙支持体作品については、紙に関する作品を専門とする外部の修復家と連携し、適切な修理修復を行った。</p>	
<p>〔4〕収集・保管・修理等を行うために必要な調査研究を計画的に行い、その成果を国立美術館の業務の充実、文化の振興に反映させること。</p>				
<p>〔4〕各館の方針に従い、所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究を計画的に行い、その成果を業務に反映させる。</p> <p>なお、実施に当たっては、国内外の博物館・美術館等及び大学等の機関とも連携を図るものとする。</p>	<p>〔4〕国内外の博物館・美術館、大学等と連携し、所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究を実施し、その成果を業務に反映させる。</p> <p>東京国立近代美術館工芸館では、石川県立輪島漆芸技術研修所及び目白漆芸研究所、多摩美術大学等と、所蔵する漆芸並びに染織作品の保管と修復に関する調査研究を実施する。</p> <p>京都国立近代美術館では、客員研究員の指導のもとに、写真作品の管理保管システム再編成を調査研究し、安全で迅速な利用態勢を整える。</p> <p>国立西洋美術館では、研究開発を行った免震彫刻台座を増設する。また、ファシリティーレポート日本語版を作品貸出先に配布し、利用を開始する。</p>	<p>収集・保管のための調査研究 【定性的に評価】</p>	<p>〔4〕美術作品の保管・修理等に関する調査研究</p> <p>各館における調査研究の実施状況は、以下のとおりである。</p> <p>ア 東京国立近代美術館 (本館)</p> <p>(ア) 所蔵作品に関する調査研究 館ニュース『現代の眼』及び研究紀要において、各研究員が、所蔵作品についての研究成果を発表した。また、定期的に開催しているキュレーター・トーク(研究員による来館者向けギャラリー・トーク)では、日常的な所蔵作品の研究によってもたらされた最新の知見を披露し、研究成果を社会に還元するよう努めた。</p> <p>(イ) 保管・修理に関する調査研究 日本画家、加山又造の代表作《春秋波濤》の大規模修復に際し、複数の業者から修復案を取り寄せ、初めて企画審査という形で試験的に業者の選定を行った。仕様書の作成過程で、第三者的立場にある複数の日本画専門の修復家より、最適な修復計画作成のための聞き取り調査を行い、また、企画審査を先行して行っている東京国立博物館にも、制度に関する聞き取り調査を行った。修復の過程で、作家が江戸期のものと思われる古い金屏風を利用して制作を行っていたことが判明し、作品研究に新知見及び、加山又造の初期作品の修復を機に、加山の実験的技法についての所見を得た。</p> <p>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映 所蔵作品展内の特集展示(4F)や所蔵作品による小企画(2Fギャラリー4)において、例えば洋画家、北脇昇の制作理論を新たに読み解く(「北脇昇—思考のプロセス」平成21年3月14日～6月7日)など、実際の作品を用いた研究成果発表の場とした。これらの新しい知見は、キュレーター・トークや「鑑賞ノススメ」(持ち歩き式の作品解説シート)にも盛り込んだほか、各研究員が「研究紀要」に所蔵作品研究の成果として発表した。</p> <p>「保管・修理に関する調査研究」では、企画審査のための仕様書の作成作業により、より適切な日本画修復のあり方について、各担当研究員が認識を深めた。</p> <p>(工芸館)</p> <p>(ア) 所蔵作品に関する調査研究 前年度『工芸館名品集—陶芸』に続き、所蔵する染織作品の調査研究を行い『工芸館名品集—染織』刊行を企画した。また、工芸館所蔵作品巡回展の第4年次とするため所蔵作品のうち人形について調査研究を実施した。</p> <p>(イ) 保管・修理に関する調査研究 工芸館所蔵作品巡回展「人形展」の企画開催に当たり、保管状況の点検を行い、制作者及び後継の作家、目白漆</p>	<p>A</p> <p>・国立西洋美術館を初めとする保存環境や修理に関する研究の進展について、その積極的な取り組みは特筆に値する。</p> <p>・アーカイブ資料の観点からは、「北脇昇—思考のプロセス」等が充実した展覧会となったと認められる。</p> <p>【よりよい事業とするための意見】</p> <p>・収集・保管に関する研究調査の成果は、アーカイブ・サービスとして制度化する努力が望まれる。</p> <p>・フィルムについては、デジタルによる保管のスペース、設備、フォーマットなどを視野に入れた検討が望まれる。</p>

			<p>芸文化財研究所の修復専門家等と共同して修復に関する調査研究及び現状保存修復を行った。</p> <p>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映 所蔵する染織作品の調査研究に基づき、主要作家 50 人による主要作品 50 点を取り上げた『工芸館名品集—染織』を刊行した。また、所蔵作品の調査研究に基づき、碧南市藤井達吉記念現代美術館・佐野美術館と協力して巡回展「人形展」を企画・開催した。</p> <p>(フィルムセンター)</p> <p>(ア) 所蔵作品に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ジャン・ルノワール監督に関する調査研究</li> <li>・衣笠貞之助監督と長谷川一夫に関する調査研究</li> <li>・川喜多かしこと東和映画に関する調査研究 (川喜多記念映画文化財団との共同研究)</li> <li>・伊藤大輔監督と大河内傳次郎に関する調査研究</li> <li>・亀井文夫監督に関する調査研究</li> <li>・カナダのアニメーション映画に関する調査研究 (シネマテーク・ケベコワーズとの共同研究)</li> <li>・オランダ映画史と近年のオランダ映画に関する共同研究</li> <li>・日本のジャンル映画 (怪獣映画, SF 映画等) に関する調査研究</li> <li>・映画産業の枠外で製作された日本映画・インディペンデント映画等の歴史に関する調査研究</li> <li>・戦前期のハリウッド映画に関する調査研究</li> <li>・大正期までの日本文学と日本映画の関係に関する調査研究</li> <li>・無声時代のソビエト映画とソビエト映画ポスター、またそれらの日本への紹介に関する調査研究</li> <li>・大正期までの日本文学と映画の関係に関する調査研究</li> </ul> <p>(イ) 保管・修理に関する調査研究</p> <p>&lt;映画フィルムの保管に関する調査研究&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小型映画フィルムのカタロギングに関する研究</li> <li>・近赤外線分析法によるフィルムの劣化測定に関する研究</li> </ul> <p>&lt;映画フィルムの修理に関する調査研究&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・デジタル復元におけるフィルム素材の選択に関する研究</li> <li>・フィルム・スキャニング及びデジタル復元における解像度に関する研究</li> <li>・デジタル修復における原版素材の影響に関する研究</li> <li>・変形の著しい映画フィルムの焼付に関する研究</li> <li>・レコード・トーキー作品の復元に関する研究</li> </ul> <p>&lt;映画関連資料に関する調査研究&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前年開始したプレス資料のカタロギングを進め、過去に寄贈されたプレスシート・映画パンフレット・チラシ・試写状といったさまざまな形態を持つプレス資料の整理を行った。</li> <li>・複数の映画人の個人資料のカタロギングを進めた。</li> </ul> <p>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <p>&lt;映画フィルムの保管における反映&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・所蔵 8 mm フィルムや 9.5 mm フィルムのロケーション管理に反映した。</li> <li>・可燃性フィルムの劣化測定に関する科学的データの入手に反映した。</li> </ul> <p>&lt;映画フィルムの修理における反映&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・『羅生門』(1950 年)のデジタル復元に反映した。</li> <li>・『紅葉狩』(1899 年)の一部デジタル復元に反映した。</li> <li>・『紅葉狩』(1899 年)の一部デジタル復元及び『羅生門』(1950 年)のデジタル復元に反映した。</li> <li>・『月よりの使者』(1933 年)等のデューブネガ及びプリント復元に反映した。</li> <li>・『大きくなるよ』(1931 年)等のデューブネガ及びプリント復元に反映した。</li> </ul> <p>イ 京都国立近代美術館</p> <p>(ア) 所蔵作品に関する調査研究</p> <p>下村良之介を中心とした日本画の前衛運動「パンリアル美術協会」の研究について所蔵作品を中心に実施し、今後の展覧会開催の目処を立てた。また、寄贈を受けた「上野伊三郎+リチ コレクション展」の調査及び W. ユージン・スミス写真作品 284 点の再調査を行い整理が完了した。</p> <p>(イ) 保管・修理に関する調査研究</p> <p>写真コレクションの整理・保存の体系化を継続し、整理の基本的な方向性を確立することができた。</p> <p>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <p>W. ユージン・スミス写真展開催にあわせ、アイリーン・スミス旧蔵のコレクション 284 点の写真作品の調査、整理を行い、その成果を「京都国立近代美術館・所蔵作品目録Ⅵ」として刊行した。</p> <p>「上野伊三郎+リチ コレクション展」の開催にあわせ、このコレクションの整理・修復を行い、系統的分類・整理の秩序を構築した。成果を「京都国立近代美術館・所蔵品目録Ⅶ」として刊行した。</p> <p>ウ 国立西洋美術館</p> <p>(ア) 所蔵作品に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・旧松方コレクションを含む松方コレクション全体に関する調査研究</li> </ul>	
--	--	--	--	--

			<ul style="list-style-type: none"> <li>・中世末期から 20 世紀初頭の西洋美術に関する調査研究</li> <li>・所蔵版画作品に関する調査研究</li> <li>・ル・コルビュジエによる国立西洋美術館本館の設計に関する調査研究</li> <li>・フランク・ブラングインと松方コレクションに関する調査研究</li> <li>・アレクサンドロ・ペドリ・マツォーラ《ウェヌスとアモル》の作者及び来歴に関する調査研究（パルマ・ピアツェンツァ歴史美術民俗文化財局との連携）</li> <li>・パウツ派《荊冠のキリスト》《悲しみの聖母》に関する調査研究</li> </ul> <p>(イ) 保存・修復に関する調査研究</p> <p>&lt;保存環境整備のための調査&gt;</p> <p>館内の空気汚染調査を継続して実施した。また、館内施設の各種工事に先立って塗料・接着剤等の安全性を確認し、施工後は空気測定により有害物質を調査し、新館改修工後は東京文化財研究所の指導により、有害揮発成分の調査を行い、換気回数を増やすなど平成 21 年 6 月の展示再開に向けた対策をとった。</p> <p>虫害対策を年 4 回実施した。また、平成 20 年度は新館が改修工事により閉鎖したため、トラップを約 50 基配置して生物調査を実施し、季節ごとの害虫の発生状況を把握し、必要に応じて清掃等を実施した。</p> <p>貸出先美術館のファシリティレポート、図面及び温湿度記録をもとに事前の環境調査を行うとともに、貸出作品及び輸送箱にデータロガーを装着して貸出中の温湿度データを記録し、返却後にデータの分析を実施した。</p> <p>&lt;保存修復に関する調査研究&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで修復が行われなかった所蔵作品について、X線撮影、顔料分析などの調査を実施し、新しい事実が明らかになる成果を得た。</li> <li>・平成 17 年度より行っている屋内彫刻の免震化推進の過程で、外部研究者の協力により、簡易式免震滑り板の加震実験をし、その成果は国立西洋美術館で平成 21 年度に開催予定の国際会議で発表の予定である。</li> </ul> <p>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保存・修復に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前年度に購入したパウツ派《悲しみの聖母》について、かねてより所蔵していたパウツ派《荊冠のキリスト》とあわせて調査研究を実施し、『国立西洋美術館年報』42 号に中間報告を掲載した。</li> </ul> <p>エ 国立国際美術館</p> <p>(ア) 所蔵作品に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・メディア・アートに関する収集・保管について、前年度に引き続き客員研究員として招いている研究者と検討を行い、収集する候補作品の選出を行った。</li> </ul> <p>(イ) 保管・修理に関する調査研究</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・主要な作品の保管状況を調査した。特に紙に関する専門家と共同で版画の保管状況を調査し、いくつかの作品については、額の裏板に含まれる化学物質が紙に変色等の悪影響を及ぼす可能性があることが判明し、緊急性の高いものから順次修復を行い、無害な素材の額で適切な保管を行った。</li> </ul> <p>(ウ) 所蔵作品や関連する館外の美術品及び保管・修理に関する調査研究成果の美術館活動への反映</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・館内に害虫捕獲器を多数設置し、害虫の分布、種類を調査し、保管に活用した。</li> <li>・作品の保管状況の調査結果により作品毎に適切な額装を施し、長期間保存、展示及び貸出しに対応できるよう対策を実施した。</li> </ul>		
--	--	--	--	--	--



# 3. 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与

評定 A

中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。

## 評価のポイント

各館とも国内外との連携・協力を努め、シンポジウムなど積極的に進めたことは、評価できる。

中期目標		評価基準					主な実績及び自己評価	評定	評価委員会によるコメント																																																										
中期計画	年度計画	評価項目	S	A	B	C				F																																																									
<b>3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与</b> 国立美術館が有する調査研究の成果、所蔵作品、人材等を活用し、我が国の美術振興のナショナルセンターとして、公私立美術館を含めた美術館全体の活動の活性化に寄与することとする。																																																																			
(1) 所蔵作品等に関する調査研究の成果を多様な方法により積極的に公表し、広く公私立美術館関係者の知見の向上に資すること。																																																																			
(1) 所蔵作品等に関する調査研究の成果を研究紀要、学術雑誌、展覧会に關する刊行物、学会及びインターネット等を活用して広く発信する。また、各種セミナー・シンポジウムを開催する。	(1) 各館の調査研究の成果については、研究紀要、図録への論文発表等によって広く発信する。 (東京国立近代美術館) 研究紀要、展覧会や企画上映に伴う図録、「現代の眼」、「NFCニュースレター」などの刊行物を発行する。 「カルロ・ザウリ展」「ルーシー・リー展」(平成21年度国立新美術館で開催予定)に関連して、イギリス、イタリアの研究者、工芸家との研究交流を行い、東洋陶磁学会研究会等で発表する。 工芸館名品集(染織)を刊行する。 工芸館開館30周年記念誌作成に關して調査及び資料の収集を行う。 (京都国立近代美術館) 展覧会に伴う図録、美術館ニュース「視る」を発行する。 京都国立近代美術館研究誌「CROSS-SECTION(S)」を発行する。 コレクションギャラリーでの小企画に対応した研究論文をホームページ上に公開する。 (国立西洋美術館) 年報、研究紀要、展覧会に伴う図録、「国立西洋美術館ニュース」を発行する。 展覧会に伴う小・中学生向け解説パンフレット「ジュニアパスポート」を発行する。 (国立国際美術館) 展覧会に伴う図録及び「美術館ニュース」を発行する。 開館30周年記念シンポジウム記録集を発行する。 小・中学生向け解説「ジュニア・セルフガイド」を発行する。	ナショナルセンターとしての国内外の美術館等との連携・協力 <b>【定性的に評価】</b>	<b>3 我が国における美術館のナショナルセンターとして美術館活動全体の活性化に寄与</b> <b>(1) 所蔵作品等に関する調査研究成果の発信</b> <b>① 研究紀要、学術雑誌、展覧会刊行物、学会等での発信</b> ア 館の刊行物による研究成果の発信 各館において、展覧会図録(計36冊)、研究紀要(計3冊)、館ニュース(計6種、31冊発行)等の刊行物により、研究成果を発信した。					A 外国美術館員や美術史研究者など海外招聘を含む国際シンポジウムの開催、外国美術館との交流を基盤とした国際展の実現、これらを通じた国内外の美術館等との連携は十分な成果を挙げている。  <b>【よりよい事業とするための意見】</b> ・各館の研究員が、国内外を問わず、調査研究のために、長期滞在型を含めた研究体制を整備することが望まれる。また、美術館しかできない「フィールドワーク」「現場を生かした研究」体制の確立に努めてほしい。 ・フィルムセンターは、海外との連携による情報収集を緊密にして、海外に存在する日本映画の収集などに一層の努力が望まれる。 ・ICOM(国際博物館会議)への参加と積極的な取組みが期待される。 ・収蔵品の貸与については、法人全体として有機的な協働運用が望まれるとともに、国内の他の美術館との一層の連携、交流を進めることが望まれる。																																																											
<table border="1"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>展覧会図録</th> <th>研究紀要</th> <th>館ニュース</th> <th>所蔵品目録</th> <th>パンフレット・ガイド等</th> <th>その他</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館本館</td> <td>6</td> <td></td> <td>6</td> <td>0</td> <td>6</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館工芸館</td> <td>2</td> <td>1</td> <td></td> <td>0</td> <td>2</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター</td> <td>3</td> <td></td> <td>6</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>8</td> <td>1</td> <td>5</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>3</td> <td>1</td> <td>4</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>5</td> <td>0</td> <td>6</td> <td>0</td> <td>9</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>9</td> <td>0</td> <td>4</td> <td>-</td> <td>2</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>36</td> <td>3</td> <td>31</td> <td>0</td> <td>22</td> <td>5</td> </tr> </tbody> </table>			館名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	所蔵品目録		パンフレット・ガイド等	その他	東京国立近代美術館本館	6		6	0	6	0	東京国立近代美術館工芸館	2	1		0	2	1	東京国立近代美術館フィルムセンター	3		6	0	0	0	京都国立近代美術館	8	1	5	0	0	0	国立西洋美術館	3	1	4	0	3	2	国立国際美術館	5	0	6	0	9	2	国立新美術館	9	0	4	-	2	0	計	36	3	31	0	22	5	注1 「パンフレット・ガイド等」には、小企画展の内容や所蔵作品の解説を掲載したパンフレット、子ども向けの鑑賞ガイド等が含まれる。 注2 「その他」には、東京国立近代美術館『工芸館名品集-染織』(工芸館)、『30周年記念シンポジウム記録集』(国際美)等が含まれる。
館名	展覧会図録	研究紀要	館ニュース	所蔵品目録	パンフレット・ガイド等	その他																																																													
東京国立近代美術館本館	6		6	0	6	0																																																													
東京国立近代美術館工芸館	2	1		0	2	1																																																													
東京国立近代美術館フィルムセンター	3		6	0	0	0																																																													
京都国立近代美術館	8	1	5	0	0	0																																																													
国立西洋美術館	3	1	4	0	3	2																																																													
国立国際美術館	5	0	6	0	9	2																																																													
国立新美術館	9	0	4	-	2	0																																																													
計	36	3	31	0	22	5																																																													
イ 館外の学術雑誌、学会等における調査研究成果の発信 (ア) 東京国立近代美術館 <b>【学会等発表】</b> <table border="1"> <thead> <tr> <th>タイトル</th> <th>学会等名</th> <th>発表者職名・氏名</th> <th>日付</th> <th>場所</th> <th>聴講者数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> </tbody> </table>										タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数																																																				
タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数																																																														

<p>「新国誠一の(具体詩)」展の開催に伴い、詩集を発行する。 (国立新美術館) 年報、展覧会に伴う図録及び「国立新美術館二ユース」を発行する。 中学生以上を対象とした鑑賞ガイドを発行する。 「日本の美術展覧会開催実績報告書」を発行する。</p>	<p>国立美術館が行う鑑賞教育研修</p>	<p>第32回 InSEA (国際美術教育学会) 世界大会 2008 in 大阪、招待セミナー「我が国の鑑賞教育・美術館教育の研究プロジェクト」</p>	<p>主任研究員 一條彰子</p>	<p>平成20年8月6日</p>	<p>大阪インターナショナル・ハウス</p>	
	<p>国立美術館の研修と教材</p>	<p>『美術鑑賞教育の現状・課題・展望』(科研「対話による意味生動的な美術鑑賞教育の開発」報告会)</p>	<p>主任研究員 一條彰子</p>	<p>平成21年2月21日</p>	<p>文部科学省第1講堂</p>	
	<p>岡本太郎とシュルレアリスム</p>		<p>主任研究員 大谷省吾</p>	<p>平成20年5月11日</p>	<p>川崎市岡本太郎美術館</p>	
	<p>新発見の福沢一郎作品をめぐる</p>		<p>主任研究員 大谷省吾</p>	<p>平成20年11月12日</p>	<p>福沢一郎記念館</p>	
	<p>How to Globalize/Glocalize the Community? A Life with Art Museum</p>	<p>テグ市立美術館設立準備シンポジウム</p>	<p>美術課長 蔵屋美香</p>	<p>平成20年9月26日</p>	<p>テグ市デザインセンター(韓国)</p>	
	<p>京都の日本画—竹内栖鳳を中心に</p>		<p>研究員 中村麗子</p>	<p>平成20年10月26日</p>	<p>町田市立博物館</p>	
	<p>ドローイングは『近代』を疑う</p>	<p>国際シンポジウム Count 10 Before You Say Asia - Asian Art after Postmodernism-</p>	<p>研究員 保坂健二郎</p>	<p>平成20年11月23日</p>	<p>国際交流基金</p>	
	<p>フランス・ペーコン『横たわる人物』について</p>		<p>研究員 保坂健二郎</p>	<p>平成20年11月30日</p>	<p>富山県立近代美術館</p>	
	<p>建築×アート=青木淳</p>		<p>研究員 保坂健二郎</p>	<p>平成21年2月28日</p>	<p>青森県美術館</p>	
	<p>作品を言葉にすること……</p>	<p>アメニティ・ネットワーク・フォーラム3</p>	<p>研究員 保坂健二郎</p>	<p>平成21年2月21日</p>	<p>大津プリンスホテル・コンヴェンションホール淡海</p>	
	<p>現代美術とオリジナル</p>	<p>第32回文化財の保存及び修復に関する国際研究週間</p>	<p>副館長 松本透</p>	<p>平成21年12月6日</p>	<p>東京国立博物館平成館大講堂</p>	
	<p>文化財情報の発信と連携について—検索サイト「ALC」と「想—IMAGINE」を事例に—</p>	<p>東京文化財研究所企画情報部研究会</p>	<p>主任研究員 水谷長志</p>	<p>平成20年4月22日</p>	<p>東京文化財研究所</p>	
	<p>物語るアート・ドキュメンテーションのためのブリーフ・イントロダクション</p>	<p>アート・ドキュメンテーション学会年次大会シンポジウム</p>	<p>主任研究員 水谷長志</p>	<p>平成20年6月7日</p>	<p>京都国際マンガミュージアム</p>	
	<p>MLA+E 試論—独立行政法人国立美術館における情報〈連携〉再論</p>	<p>アート・ドキュメンテーション学会年次大会</p>	<p>主任研究員 水谷長志</p>	<p>平成20年6月8日</p>	<p>京都国際マンガミュージアム</p>	
	<p>バンドラの箱—フィルム・アーカイブと権利問題</p>	<p>国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)第64回バリ会議</p>	<p>主幹 岡島尚志</p>	<p>平成20年4月22日</p>	<p>シネマテーク・フランセーズ</p>	150名
	<p>FIAF70周年記念マニフェスト</p>	<p>国際フィルム・アーカイブ連盟第64回バリ会議</p>	<p>主幹 岡島尚志</p>	<p>平成20年4月25日</p>	<p>シネマテーク・フランセーズ</p>	100名
	<p>フィルム・アーカイブの活動と倫理的問題について その最前線</p>	<p>立命館大学特別講義</p>	<p>主幹 岡島尚志</p>	<p>平成20年5月2日</p>	<p>立命館大学</p>	60名
<p>To Have and Have Not—日本における返還映画の経験</p>	<p>韓国映像資料院(KOFA)新館開館記念シンポジウム</p>	<p>主幹 岡島尚志</p>	<p>平成20年5月10日</p>	<p>韓国映像資料院</p>	100名	
<p>フィルム・アーキビストの未来/フィルムセンターの仕事</p>	<p>NPO 法人映像メディア創造機構セミナー「アーカイブの未来」</p>	<p>主幹 岡島尚志</p>	<p>平成20年7月26日</p>	<p>東京藝術大学大学院映像研究科</p>	40名	

「映像学芸員—資格の新設とその目的」	全国コミュニティシネマ会議 2008 in 仙台 分科会「シネマテーク・プロジェクト」	主幹 岡島尚志	平成 20 年 8 月 30 日	せんだいメディアテーク	30 名
フィルム・アーカイブ～フィルムの資料的価値と魅力について～	神奈川県視聴覚・放送教育研究合同大会相模原大会 社会教育分科会「貴重な映像資産はフィルムで～映像資産の継承・アーカイブの役割と取り組み～」	主任研究員 栩木 章（発表者名＝とちぎあきら）	平成 20 年 11 月 14 日	相模原市民会館第 2 大会議室	70 名
映画保存におけるナショナルとリージョナルの対話に向けて～フィルムセンターからの視点	シンポジウム「地域映像のカー新潟からの情報発信とアーカイブ構築をめざして」	主任研究員 栩木 章（発表者名＝とちぎあきら）	平成 21 年 2 月 7 日	新潟県民会館小ホール	200 名
フィルムの身になって考える映画保存—なぜフィルム原版の長期保管が必要か	シンポジウム「岩波映画の一億フレーム」	主任研究員 栩木 章（発表者名＝とちぎあきら）	平成 21 年 2 月 14 日	東京大学大学院情報学環福武ホール	200 名
「撮る」と「撮られる」—眼の座標をめぐって ドキュメンタリー映画の歴史から	日本文化人類学会第 42 回研究学会	主任研究員 岡田秀則	平成 20 年 6 月 1 日	京都大学吉田キャンパス	約 50 名
シネマテークの昨日、今日、明日	せんだいメディアテーク「スタジオ・レクチャー」	主任研究員 岡田秀則	平成 20 年 9 月 21 日	せんだいメディアテーク	30 名
日本における映画保存	第 3 回 映画の復元と保存に関するワークショップ	研究員 板倉史明	平成 20 年 8 月 30 日	京都府京都文化博物館	72 名
日本における映画保存	「第 3 回映画の復元と保存に関するワークショップ」 in 東京	研究員 板倉史明	平成 20 年 11 月 8 日	協和会の蔵	21 名
視線と眩暈—美空ひばりのアクション時代劇	第 13 回日本映画シンポジウム「女侠繚乱 日本映画のなかの女性アクション」	研究員 板倉史明	平成 20 年 6 月 21 日	明治学院大学白金校舎	200 名
日本映画と文学—映画研究の可能性	国士館大学国文学会	研究員 板倉史明	平成 20 年 10 月 23 日	国士館大学世田谷キャンパス多目的ホール	150 名
映像メディアにおける音分析へのアプローチ	マス・コミュニケーション学会メディア史研究部会	研究員 板倉史明	平成 21 年 1 月 31 日	フィルムセンター小ホール	20 名
「赤い陣羽織」について	第 64 回国際フィルムアーカイブ連盟パリ会議	研究員 赤崎陽子	平成 20 年 4 月 23 日	シネマテーク・フランスーズ	約 300 名

〔雑誌等論文掲載〕

タイトル	執筆者名・氏名	掲載誌名（発行者）	発行年月日
第 5・6 学年の授業展開	主任研究員 一條彰子	『小学校学習指導要領の解説と展開 図画工作編』（教育出版）	平成 20 年 8 月 17 日
国立美術館の研修と教材	主任研究員 一條彰子	『教育美術』797 号（財団法人教育美術振興会）	平成 20 年 11 月
美術館から見た学校—美術館連携	主任研究員 一條彰子	『美術教育の動向』（武蔵野美術大学出版局）	平成 21 年 3 月 30 日
反抗と前衛	主任研究員 大谷省吾	『別冊太陽 近代日本の画家たち』（平凡社）	平成 20 年 8 月
太田三郎展：鑑賞上のご注意	主任研究員 大谷省吾	『太田三郎—日々』展カタログ（山形美術館）	平成 20 年 11 月
戦前と戦後の前衛絵画をつなぐもの—福沢一郎、鶴岡政男、北脇昇を例に	主任研究員 大谷省吾	『藝叢』25 号（筑波大学芸術学研究室）	平成 21 年 3 月
ロマンと情緒	美術課長 蔵屋美香	『別冊太陽 近代日本の画家たち』（平凡社）	平成 20 年 8 月

			情感とエロティシズムの表出 あるいは、造形の実験	美術課長 蔵屋美香	『別冊太陽 裸婦』（平凡社）	平成 21 年 3 月
			日本美を求めて	主任研究員 鈴木勝雄	『別冊太陽 近代日本の画家たち』（平凡社）	平成 20 年 8 月
			パンリアル美術協会草創期の流れと下村良之介	主任研究員 都築千重子	『視る』（京都市立近代美術館）437	平成 21 年 3 月 20 日
			南画と個性派、画賛を読む	主任研究員 鶴見香織	『別冊太陽 近代日本の画家たち』（平凡社）	平成 20 年 7 月
			装飾表現の試み	研究員 中村麗子	『別冊太陽 近代日本の画家たち』（平凡社）	平成 20 年 8 月
			美術館ならではの建築展をめざして	研究員 保坂健二郎	『建築雑誌』（日本建築学会）	平成 20 年 4 月
			丸山直文と雰囲気的美学	研究員 保坂健二郎	『丸山直文全作品集 1988-2008』（求龍堂）	平成 20 年 10 月
			美術館と写真の現在	研究員 増田玲	『写真空間 2』（青弓社）	
			拡張せよ！メディアの内部と外部	副館長 松本透	「第 5 回ソウル国際メディア・アート・ビエンナーレ」カタログ（ソウル市）	平成 20 年 9 月
			KIDSMOMAT2008 夏休み！こども美術館	研究補佐員 山口百合	『教育美術』第 797 号（財団法人教育美術振興会）	平成 20 年 11 月
			映画、フィルムで保存を	主幹 岡島尚志	朝日新聞（朝日新聞社）	平成 20 年 5 月 24 日
			FIAF70 周年記念マニフェスト	主幹 岡島尚志	ジャーナル・オブ・フィルム・プレザベーション（FIAF）	平成 20 年 10 月
			分科会「シネマテーク・プロジェクト」。「映像学芸員—資格の新設とその目的」	主幹 岡島尚志	全国コミュニティシネマ会議 2008 in 仙台 報告書（コミュニティシネマ支援センター）	平成 21 年 1 月 31 日
			デジタル保存の“3C”原則 デジタル vs フィルム（改訂版）	主幹 岡島尚志	学術情報研究 2009 年 3 月号[通巻 207 号]（学術ソフトウェア情報研究センター）	平成 21 年 3 月 10 日
			フィルムセンター、映画保存、デジタル・シフト	主幹 岡島尚志	彩の国ビジュアルプラザ広報誌 VPLA 第 19 号（埼玉県）	平成 21 年 3 月 13 日
			フィルム・アーカイブの活動と倫理的問題について その最前線	主幹 岡島尚志	映像文化の創造と倫理 立命館大学映像学部現代 GP「映像文化の創造を担う実践的教育プログラム」報告書（2008 年度）（立命館大学映像学部）	平成 21 年 3 月 25 日
			フィルム・アーキビストの未来／フィルムセンターの仕事	主幹 岡島尚志	映像アーカイブのノート（NPO 法人映像メディア創造機構）	平成 21 年度 3 月 31 日
			（映画に関する総合的な辞典の項目執筆）	主幹 岡島尚志	世界映画大事典（日本図書センター）	平成 20 年 6 月 30 日
			途方に暮れつつ、集めつづける—海外に残存する戦前日本映画を対象としたフィルムセンターの映画収集事業	主任研究員 榎木 章（執筆者名＝とちぎあきら）	Intelligence 第 10 号（20 世紀メディア研究所）	平成 20 年 8 月 28 日
			デジタルを通してフィルムが見える—フィルム・アーカイビングの現場から	主任研究員 榎木 章（執筆者名＝とちぎあきら）	日本写真学会誌第 72 巻第 1 号（日本写真学会）	平成 21 年 2 月 25 日
			極私的に、アーカイブの仕事を通してフィルムの媒体・保存・復元を考える	主任研究員 榎木 章（執筆者名＝とちぎあきら）	映像文化の創造と倫理 立命館大学映像学部現代 GP「映像文化創造を担う実践的教育プログラム」報告書（2008 年度）（立命館大学映像学部）	平成 21 年 3 月 25 日
			ノンフィルム：収集、フェアユースとアクセス	主任研究員 入江良郎	映像文化の創造と倫理 立命館大学映像学部現代 GP「映像文化の創造を担う実践的教育プログラム」報告書（2008 年度）（立命館大学映像学部）	平成 21 年 3 月 25 日
			（映画に関する総合的な辞典の項目執筆と資料編集）	主任研究員 入江良郎	世界映画大事典（日本図書センター）	平成 20 年 6 月 30 日

(映画に関する総合的な辞典の項目執筆)	主任研究員 岡田秀則	世界映画大事典 (日本図書センター)	平成 20 年 6 月 30 日
フィルム・アーカイヴという想像力	主任研究員 岡田秀則	中央評論 (中央大学出版部)	第 264 号 (平成 20 年 7 月 31 日発行)
シネマテークの新しい力	主任研究員 岡田秀則	朝日新聞 (朝日新聞社)	平成 21 年 2 月 21 日夕刊
(映画に関する総合的な辞典の項目執筆)	研究員 板倉史明	世界映画大事典 (日本図書センター)	平成 20 年 6 月 30 日
124 本の映画フィルムを寄贈	研究員 板倉史明	全米日系人博物館ニューズレター	2008 Spring Volume 11
「メディアの広場。フィルムを守り、継承する」	研究員 板倉史明	視聴覚教育 (財団法人 日本視聴覚教育協会)	平成 20 年 7 月号
日本映画と文学——領域横断的な研究の可能性	研究員 板倉史明	国文学論叢第 30 号 (国士館大学国文学会)	平成 21 年 3 月
—映画祭とは何か—映画祭の歴史と現在	研究員 赤崎陽子	「映画祭」と「コミュニティシネマ」に関する基礎調査 報告書 (コミュニティシネマ支援センター)	平成 20 年 6 月 20 日

(イ) 京都国立近代美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
Forgotten treasure for design sources – Japanese stencil paper collection at the Kunstgewerbemuseum Dresden	第 6 回デザイン史デザイン学国際会議 ICDHS 2008 OSAKA	主任研究員 池田祐子	平成 20 年 10 月 25 日	大阪大学中之島センター	25 名

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名 (発行者)	発行年月日
Forgotten treasure for design sources – Japanese stencil paper collection at the Kunstgewerbemuseum Dresden	京都国立近代美術館主任研究員・池田祐子	ANOTHER NAME FOR DESIGN: Words for Creation (The 6 <sup>th</sup> International Conference on Design History and Design Studies)	24. October, 2008

(ウ) 国立西洋美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
「版画素描の研究の新たな方法をめぐって」	第 21 回国際版画素描学会 会議, パネルディスカッション発表	主任研究員 佐藤直樹	平成 20 年 6 月 16 日	ドイツ, ドレスデン版画素描館講堂	58 名

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名 (発行者)	発行年月日
「国立西洋美術館 所蔵作品システムのインターネット公開」	主任研究員・川口雅子	『アート・ドキュメンテーション通信』 77 号, p. 19.	平成 20 年 4 月
「レファレンス・ブックガイド: Freitag, Wolfgang M. Art Books. New York: Garland, 1997」	主任研究員・川口雅子	『アート・ドキュメンテーション通信』 77 号, p. 9.	平成 20 年 4 月
「第 74 回国際図書館連盟ケベック大会報告」	主任研究員・川口雅子	『アート・ドキュメンテーション通信』 79 号, p. 11.	平成 20 年 10 月
「フランス所在の国立西洋美術館関係資料調査記」	主任研究員・川口雅子	『アート・ドキュメンテーション通信』 80 号, p. 18	平成 21 年 1 月
Apoteosi del Tatto: Correggio e Mario Equicola	主任研究員・高梨光正	"Erotic Art in the Renaissance: Iconography and Function"	平成 21 年 3 月
「モーリス・ドニの『ジャンヌ・ダルク』の画像表現を巡って」	研究補佐員・金澤清恵	『鹿島美術研究 年報第 25 号別冊』 181-192 頁	平成 20 年 11 月

「ポール・セリュジエ作《タリスマン》とナビ派の成立を巡って」	研究補佐員・金澤清恵	『成城美学美術史』15号 55-72頁	平成21年3月出版予定
ギリシアおよびエトルリア、南イタリア製陶器	リサーチフェロー・平山東子	奈良国立博物館 特別展「天馬展 シルクロードを掛ける夢の馬」図録p.193-198 (奈良国立博物館)	平成20年4月刊行

(エ) 国立国際美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
Experiments in new media in recent years- in Japan	The 13 <sup>th</sup> Asian Art Biennale Bangladesh 2008, Seminar	主任研究員 植松由佳	平成21年10月23日	バングラデシュ・シルバカラ・アカデミー (ダッカ, バングラデシュ)	100名
"What a Place Tells Us"	Curator's lecture of the exhibition of "What a Place Tells Us"	主任研究員 植松由佳	平成21年3月3日	100 Tonson Gallery (バンコク, タイ)	100名
「現代の肖像 移り変わる時代の表現」	「アジアとヨーロッパの肖像」連続講演会	主任研究員安来正博	平成21年3月14日	神奈川県立近代美術館葉山館	30名
「芸術作品の成立」	『タンジェント: Tangent』展開催記念講演	主任研究員中井康之	平成21年7月13日	国際芸術センター青森	30名

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
やなぎみわ, まなざしの先にあるもの	主任研究員 植松由佳	『やなぎみわ マイ・グランドマザーズ』(淡交社, 東京都写真美術館/国立国際美術館[企画/監修])	平成21年3月24日
小西紀行	主任研究員 植松由佳	『VOCA展 2009 現代美術の展望- 新しい平面の作家たち』(「VOCA展」実行委員会)	平成21年3月15日
「是が非の絵画」	主任研究員・中井康之	『DAIWA PRESS VIEWING ROOM』vol.07 (株式会社大和プレス)	平成20年12月26日
作品をみる楽しみを知る	研究員 藤吉祐子	『教育美術』(財団法人教育美術振興会)	平成20年11月1日
コレクションを楽しむ機会をつくること	研究員 藤吉祐子	『文部科学時報』(文部科学省[編])	平成20年8月10日

(オ) 国立新美術館

[学会等発表]

タイトル	学会等名	発表者職名・氏名	日付	場所	聴講者数
絵画画像における色配置のフラクタル性に着目した複雑さの計量	日本色彩学会第39回全国大会	主任研究員 室屋泰三	平成20年5月17日, 18日	福岡工業大学	
絵画における画面上の色変化の複雑さの情報量に着目した計量	カラーフォーラム JAPAN2008	主任研究員 室屋泰三	平成20年11月26日, 27日	工学院大学	

[雑誌等論文掲載]

タイトル	執筆者職名・氏名	掲載誌名(発行者)	発行年月日
追悼・白髪一雄「具体」メンバーでアクション・ペインター白髪一雄氏が逝去	主任研究員 平井章一	美術手帖第60巻(美術出版社)	平成20年6月
1930年代の大阪におけるヨーロッパ前衛絵画の受容と展開—石丸と吉原治良を中心に—	主任研究員 平井章一	昭和期美術展覧会の研究 戦前編(中央公論美術出版)	平成21年3月

絵画画像における色配置のフラクタル性に着目した複雑さの計量	主任研究員 室屋泰三	日本色彩学会誌 Vol.32 (日本色彩学会)	平成 20 年 5 月
絵画における画面上の色変化の複雑さの情報量に着目した計量	主任研究員 室屋泰三	カラーフォーラム JAPAN2008 論文集 (光学四学会幹事会)	平成 20 年 11 月
執筆分担「田中恭吉」「日本創作版画協会」「日本版画協会」「裕伊之介」	特任研究員 三木哲夫	国際版画学会編『浮世絵辞典』(東京堂出版)	平成 20 年 8 月

ウ インターネットによる調査研究成果の発信

(ア) 東京国立近代美術館

『研究紀要』の収録論文をホームページ上に掲載した。

(イ) 京都国立近代美術館

コレクションギャラリーで開催する各「小企画」展示について、企画意図を記した解説、並びに出品リストをインターネット上のホームページ上に掲載・発信した。

(ウ) 国立西洋美術館

ホームページ上で「国立西洋美術館年報」及び「国立西洋美術館ニュース ゼフェロス」のバックナンバーの公開を行った。蔵書目録(OPAC)を公開し、国立西洋美術館の蔵書を検索できるサービスを提供した。また、常設展のページでは所蔵作品の紹介文を掲載したほか、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受け「国立西洋美術館所蔵作品データベース」を公開し、所蔵作品の検索や現在常設展示されている作品の確認を可能にするなど、常設展関連のコンテンツの充実を図った。

(エ) 国立国際美術館

『artscape (http://www.dnp.co.jp/artscape/) 「学芸員レポート」』に2名、合わせて計7回、現代美術及び展覧会に関する研究を紹介した。

(オ) 国立新美術館

「国立新美術館ニュース」をホームページ上で公開した。

エ その他

(ア) 東京国立近代美術館

(本館)

読売新聞都内版連載「近代美術の東京」は、平成20年度末より「近代美術の眼」と名称変更するよう働きかけ、東京というしほりを離れ、研究員の研究成果を発表するとともに所蔵作品展の広報につなげることが可能となった。

各自企画展等に関連する研究成果を、『美術手帖』『芸術新潮』『趣味の水墨画』『美術年鑑』『すばる』他に執筆した。

(工芸館)

所蔵作品研究、企画展出品作品研究の成果を月刊誌『淡交』(淡交社)と『銀座チャイム』(和光)に発表し、研究成果の公表と同時に展覧会広報につなげた。また、平成19年度の『工芸館名品集—陶芸』に続き、『工芸館名品集—染織』を刊行した。同館所蔵の中から50作家による50点の染織作品の図版を解説とともに収録するとともに、用語集や年表なども記し、専門家以外の人々にも分かりやすい内容となるよう努めた。

(フィルムセンター)

・「無声時代ソビエト映画ポスター展」の開催に合わせて、フィルムセンターが所蔵するソビエト映画ポスター《袋一平コレクション》のカタログを制作した。(平成21年1月8日発行、フィルムセンター、京都国立近代美術館編集)

・「カナダ・アニメーション映画名作選」カタログを制作した。(平成21年3月17日発行、フィルムセンター編集)

・「オランダ映画祭2009」カタログを制作した。(平成21年2月キネマ旬報社発行、キネマ旬報映画総合研究所編集、フィルムセンター編集協力)

(イ) 京都国立近代美術館

「上野伊三郎・リチ コレクション」に含まれる『インターナショナル建築 全29号』に、同館の監修による「復刻版」が国書刊行会から出版され(平成20年12月)別冊に、館長、主任研究員の論考が収録された。

(ウ) 国立国際美術館

『京都新聞「アート解剖学 現代美術再入門」』に11回、現代美術及び展覧会に関する研究を紹介した。

② 所蔵作品等に関するセミナー・シンポジウムの開催

ア 東京国立近代美術館

(本館)

(ア) ドローイング再考 テクネーとアートのほざまで

開催日：平成20年9月27日

場所：東京国立近代美術館講堂

講師・パネリスト等：金井直(信州大学人文学部准教授)、斎藤環(精神科医、爽風会佐々木病院精神科診療部)

長)、ヤン・ジョンム(韓国芸術総合学校美術院美術理論科准教授)、中林和雄(東京国立近代美術館企画課長)

内容:国際交流基金との共催により開催した。日韓両国の気鋭の美術史家だけでなく、医療及び精神分析の専門家を招くことで、ドローイングの特性を多角的なアプローチで検証した。

聴講者数:約70名

(フィルムセンター)

(ア)ユネスコ世界視聴覚文化遺産の日記念特別イベント「甦る新版大岡政談」

開催日:平成20年10月26日

場所:東京国立近代美術館フィルムセンター大ホール

講師・パネリスト等:澤登翠(弁士)、柳下美恵(ピアノ演奏)、梶田章(映画史家)

内容:ユネスコが2006年に定めた「世界視聴覚遺産の日」(10月27日)を記念するイベント事業の第一回目として、大河内傳次郎(主演)=伊藤大輔(監督)=唐沢弘光(撮影)の代表作であり日本の無声映画の傑作とも評されながら、既にフィルムが失われた「新版大岡政談」を取り上げ、梶田章氏の蒐集によるスチル写真のスライド投影と澤登翠氏の弁士、柳下美恵氏のピアノ伴奏で再現を試みた。また、作品やその背景に関する梶田章氏の講演を行った。

聴講者数:301名

(イ)映像メディア・アーカイヴ人材交流事業 国際シンポジウム「映像アーカイヴの未来」

開催日:平成20年11月29日

場所:東京国立近代美術館フィルムセンター小ホール

講師・パネリスト等:岡島尚志(フィルムセンター主幹)、シャネル・ルティエ(カナダ国立映画制作庁 アジア太平洋・中近東国際セールス部門部長)、ジャン＝リュック・ヴェルネ(フランス国立視聴覚研究所 国際マーケティング&セールス部門部長)、チョ・ソユン(韓国映像資料院 デジタル情報マネージメントチーム部長)、関本好則(日本放送協会 放送総局特別主幹)、羽木章(フィルムセンター主任研究員)※発表者名=とちぎあきら、松本正道(コミュニティシネマ支援センター運営委員長)、桂英史(東京藝術大学大学院映像研究科メディア文化財領域准教授)

内容:特定非営利活動法人映像メディア創造機構と共同で開催し、カナダ、フランス、韓国並びに国内の映像アーカイブなどから専門家を招いて映画の保存と活用についてプレゼンテーションとパネルディスカッションを行った。

聴講者数:116名

イ 京都国立近代美術館

(ア)「書く」ことと「描く」ことの間—京近美コレクションと子どもたちの出会い—展 関連企画 鑑賞・美術館教育シンポジウム 子どもの鑑賞と美術館

開催日:平成20年8月10日

場所:京都国立近代美術館講堂

講師・パネリスト等:司会:石川誠(京都教育大学教育学部教授)、基調講演者:Dr. マリー・フルコヴァ(チェコ共和国カレル大学)、パネリスト:不動美里(金沢21世紀美術館学芸課長)、豊田直香(京都国立近代美術館学芸課研究補佐員)、竹内晋平(京都教育大学附属京都小学校教諭)

内容:同時開催のコレクション展示と関連し、子どもの美術鑑賞と美術館の多様ななかかわりについて、マリー・フルコヴァ氏によるチェコ共和国での青少年の鑑賞教育活動の結果を報告した。また、美術館学芸員、現職教員、研究者の三者が一室に会し、特に、美術館という場の可能性やコレクションと子どもの鑑賞活動の意味、教室の学習活動とのかかわりなどについて、先進例を参照しながらディスカッションを行った。

聴講者数:35名

(イ)ウイリアム・ケントリッジ 連続アーティストトーク 「自作を語る」

開催日:平成20年9月16日、17日、20日

場所:同志社大学 今出川キャンパス 明德館1番教室、京都国立近代美術館講堂、丸の内カフェ(新東京ビル)

講師・パネリスト等:ウイリアム・ケントリッジ(美術家、映像作家)

内容:俳優、演出家、著述家など多彩な分野でも活躍し、現代アートに大きな影響を与えているウイリアム・ケントリッジ氏が自作について語ったレクチャー。同人の出身地である南アフリカの歴史やアパルトヘイトの問題を扱いながら、詩情あふれる作品を木炭とパステルを使って描いた素描を35ミリ映画用撮影カメラでコマ撮りした手書きアニメーション・フィルム作品の制作過程でのエピソードなどを紹介。2009年-2010年に日本での個展開催が予定されている

聴講者数:86名、56名、57名

(ウ)上野伊三郎+リチ コレクション展記念講演会 「上野伊三郎+リチ先生を語る」

開催日:平成21年1月17日

場所:京都国立近代美術館講堂

講師・パネリスト等:中井貞次(京都市立芸術大学名誉教授、日展理事)、田坪良次(京都市立芸術大学名誉教授)

内容:京都市立芸術大学において、上野伊三郎の指導を得た田坪良次氏並びに上野リチの薫陶を得た中井貞次氏(芸術院会員)に、それぞれ上野伊三郎・リチの教育及び芸術観について語りあっていただいた。これまで両者の晩年の教育者としての指導内容について、ほとんど紹介される機会は無かったが、実際に身近に接した体験をもとに、両者の性格についてもわかりやすく述べられた。

聴講者数:113名



			<p>(エ) 上野伊三郎+リチ コレクション展記念講演会 「上野伊三郎+リチ夫妻—建築と工芸をめぐる二人の軌跡—」  開催日：平成21年1月31日  場所：京都国立近代美術館講堂  講師・パネリスト等：奥 佳弥（大阪芸術大学准教授）  内容：本講演会は、より学術的専門的な立場から、両者の「建築と工芸」について触れたものである。講師は、上野伊三郎、リチ両者について、これまで雑誌や単行書で論考を発表してきており、ウィーン工房や当時のヨーロッパの工芸界の状況も視野におさめて両者の立場を解説された。  聴講者数：78名</p> <p>イ 国立西洋美術館</p> <p>(ア) 聖人・聖書のトークシリーズ  開催日：平成20年8月5、8、12、15日  場所：国立西洋美術館本館  講師・パネリスト等：巖谷睦月・袴田紘代（東京藝術大学大学院生）  内容：常設展の作品から聖人や聖書の物語を描いた作品を取り上げ、講師と一緒にその主題を読み解きながら作品を見る。  聴講者数：30人</p> <p>(イ) イタリア・ルネサンスの画家と顧客と社会  開催日：平成20年8月2日  場所：国立西洋美術館講堂  講師・パネリスト等：越川倫明（東京藝術大学准教授）  内容：イタリア・ルネサンスの芸術家を取り上げ、当時の工房制作と顧客の関係を探る。  聴講者数：67人</p> <p>(ウ) マティスとピカソ  開催日：平成20年8月30日  場所：国立西洋美術館講堂  講師・パネリスト等：関直子（東京都現代美術館主任学芸員）  内容：ライバル関係にあったマティスとピカソ。芸術家同士でどのような影響を及ぼしあったのかを考える。  聴講者数：71人</p> <p>(エ) Fun with Collection 見る楽しみ・知る喜び—宗教・芸術家・修復編  開催日：平成20年7月～8月  場所：国立西洋美術館講堂、本館・新館展示室  講師・パネリスト等：巖谷睦月・袴田紘代（東京藝術大学大学院生）、越川倫明（東京藝術大学准教授）、関直子（東京都現代美術館主任学芸員）、石井美恵（修復家）、坂本雅美（修復家）、東北芸術工科大学講師）  内容：前年に引き続き、もう一步踏み込んで作品をじっくり見る・知るために、宗教・芸術家・保存修復という3つの視点から作品に迫った。  聴講者数：217人</p> <p>ウ 国立国際美術館</p> <p>(ア) シンポジウム「映像と絵画」  開催日：平成20年5月31日  場所：国立国際美術館 地下1階 講堂  講師・パネリスト等：やなぎみわ（美術作家）、小林康夫（東京大学大学院教授）、稲垣貴士（成蹊大学准教授・国立国際美術館客員研究員）、建畠哲（国立国際美術館長）、司会：加須屋明子（京都市立芸術大学准教授・国立国際美術館客員研究員）  内容：映像と絵画の関係を再考。  聴講者数：110人</p> <p>(イ) シンポジウム「中国アヴァンギャルドについて」  開催日：平成20年12月9日  場所：国立国際美術館 地下1階 講堂  講師・パネリスト等：費大为（フェイ・ダウェイ／美術評論家）、方力鈞（ファン・リジュン／出品作家）、黄永砅（ホアン・ヨンビン／出品作家）、建畠哲（国立国際美術館長）*通訳あり  内容：文化大革命以降の中国現代美術の主要な動向についてシンポジウムを実施。  聴講者数：44人</p> <p>(ウ) シンポジウム「ポスト・アヴァンギャルド」  開催日：平成20年12月10日  場所：国立国際美術館 地下1階 講堂  講師・パネリスト等：黄永砅（ホアン・ヨンビン／出品作家）、丁乙（ディン・イー／出品作家）、楊福東（ヤン・フードン／出品作家）、モデレーター：中井康之（国立国際美術館主任研究員）*通訳あり  内容：中国現代美術の次代について、中国を代表する現代作家による討論会。  聴講者数：34人</p>	
--	--	--	---	--

(2) 国内外の美術館関係者との研究会の開催や研究者の交流等を行い、国際的な美術館の拠点となることを目指すこと。

(2)-1 国内外の優れた研究者を招聘しシンポジウムを開催するなど、美術館活動に対する示唆が得られるよう努めるとともに、人的ネットワークの構築を推進する。  
 (2)-2 海外の美術館において、我が国の優れた作家や美術作品を世界に広く紹介する展覧会が活発に行われるよう、海外の美術館との連携・協力を積極的に取り組む。

(2) 国内外の研究者を招へいし、各種セミナー・シンポジウムを開催する。  
 第3回アジア美術館長会議を文化庁と共催する。  
 東京国立近代美術館本館では、「沖縄から／沖縄への眼差し」展に際して、関連するテーマをめぐるシンポジウムを開催する。  
 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」(10月27日(月))を記念して講演会などを開催する。  
 京都国立近代美術館では、欧米を拠点とする作家8人を招き、メディア・アートとメディア・ミックスに関するコンサート及びレクチャーを開催する。  
 国立国際美術館では、「アヴァンギャルド・チャイナ - <中国当代美術>二十年 -」展開催を記念し、中国現代美術に関するシンポジウムを開催する。  
 国立新美術館では、「アヴァンギャルド・チャイナ - <中国当代美術>二十年 -」展開催にあわせて、中国現代美術に関するシンポジウムを開催する。

**(2) 国内外の美術館等との連携**

**① シンポジウムの開催等による国内外の優れた研究者等との人的ネットワークの構築**

**ア 本部**

文化庁との共催により「第3回アジア美術館長会議」を平成20年11月20日、21日の2日間開催。3つのセッションと意見交換会他を実施し、日本を含めアジア圏の14ヶ国・地域より55の美術館・組織、のべ313名が参加した。(会場：国立新美術館)

**・参加者内訳**

海外参加者 13ヶ国・地域より21件の美術館・組織、のべ91名  
 国内参加者 34件の美術館・組織、のべ196名  
 一般公募参加者 のべ26名  
 (プレス出席者 のべ19名)

**イ 東京国立近代美術館**

(本館・工芸館)

セミナー・シンポジウム名	第4回アジア次世代美術館キュレーター会議	開催日	平成20年11月17日～24日
場所	国際交流基金 JFIC ホール〔さくら〕他 主催：国際交流基金	聴講者数	約20人 (公開フォーラム参加人数)
講師・パネリスト等の氏名(職名)	会議参加者は5ヵ国(日本・韓国・中国・シンガポール・フィリピン)の15名。東京国立近代美術館からは保坂健二朗研究員、中村麗子研究員を派遣。		
セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「回転体について」	開催日	平成20年10月4日
場所	多治見市文化工房ギャラリーヴォイス(岐阜県)	聴講者数	100人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	金子賢治(東京国立近代美術館工芸課長)、井上雅之(陶芸作家)、三輪和彦(陶芸作家)、松村明那(ガラス作家)、橋本真之(金工作家)		
セミナー・シンポジウム名	「近代の人形芸術」	開催日	平成20年12月23日
場所	碧南市藤井達吉現代美術館	聴講者数	72人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	今井陽子(東京国立近代美術館工芸課主任研究員)		
セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「現代陶芸としての茶陶」	開催日	平成20年12月27日
場所	多治見市文化工房ギャラリーヴォイス(岐阜県)	聴講者数	200人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	唐澤昌宏(東京国立近代美術館主任研究員)、隠崎隆一(出品作家)、新里明士(出品作家)、林恭助(出品作家)		
セミナー・シンポジウム名	「工芸のいま 伝統と創造」	開催日	平成21年2月22日
場所	九州国立博物館1階ミュージアムホール	聴講者数	
講師・パネリスト等の氏名(職名)	金子賢治(東京国立近代美術館工芸課長)		
セミナー・シンポジウム名	「工芸館の人形たち」	開催日	平成21年2月28日
場所	佐野美術館	聴講者数	50人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	諸山正則(東京国立近代美術館工芸課主任研究員)		
セミナー・シンポジウム名	東洋陶磁学会東日本地区第六回研究会	開催日	平成21年3月8日
場所	東京国立近代美術館 講堂	聴講者数	45人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	杉山道夫(滋賀県立陶芸の森美術館)、岩井美恵子(岐阜県現代陶芸美術館)、川瀬忍(陶芸家)、徳丸鏡子(陶芸家)		

(フィルムセンター)

セミナー・シンポジウム名	ユネスコ世界視聴覚文化遺産の日記念特別イベント「甦る新版大岡政談」	開催日	平成20年10月26日
場所	東京国立近代美術館フィルムセンター大ホール	聴講者数	301人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	澤登翠(弁士)、柳下美恵(ピアノ演奏)、梶田章(映画史家)		
セミナー・シンポジウム名	映像メディア・アーカイブ人材交流事業 国際シンポジウム「映像アーカイブの未来」	開催日	平成20年11月29日
場所	東京国立近代美術館フィルムセンター小ホール	聴講者数	116人

	ル		
講師・パネリスト等の氏名(職名)	岡島尚志(フィルムセンター主幹) シャネル・ルティエ(カナダ国立映画制作庁 アジア太平洋・中近東国際セールス部門部長) ジャン＝リュック・ヴェルネ(フランス国立視聴覚研究所 国際マーケティング&セールス部門部長) チョ・ソユン(韓国映像資料院 デジタル情報マネージメントチーム部長) 関本好則(日本放送協会 放送総局特別主幹) 棚本章(フィルムセンター主任研究員)※発表者名=とちぎあきら 松本正道(コミュニティシネマ支援センター 運営委員長) 桂英史(東京藝術大学大学院映像研究科 メディア文化財領域准教授)		
ウ 京都国立近代美術館			
セミナー・シンポジウム名	京都国立近代美術館・京都造形芸術大学共催 公開講座 「芸術家はあまりに多く存在しすぎるのか？」	開催日	平成 20 年 6 月 8 日
場所	京都国立近代美術館 1階講堂	聴講者数	51 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ビエール＝ミシェル・マンゲル(フランス国立科学研究センター主任研究員他)		
セミナー・シンポジウム名	国際交流基金(ジャパンファウンデーション) 京都支部 2008 年度 第1回フェローセミナー「ウクライナと日本の木造建築の系譜と共通点」	開催日	平 20 年 6 月 14 日
場所	京都国立近代美術館 1階講堂	聴講者数	32 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ガリーナ・シェフツォバ(キエフ国立建築建設大学助教授)(ウクライナ/2007 年度基金フェロー)		
エ 国立西洋美術館			
セミナー・シンポジウム名	第 21 回 国際版画素描学委員会議 International Advisory Committee of Keepers of Public Collections of Graphic Art, XXIst Convention at Dresden	開催日	平成 20 年 6 月 15 日～19 日
場所	ドイツ, ドレスデン版画素描館	聴講者数	58 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	「版画素描の研究の新たな方法をめぐって」Panel IV: "Research and Methods" (6月16日) 司会: ヘル・ルイテン(アムステルダム国立美術館版画素描室長) パネリスト: 佐藤直樹(国立西洋美術館主任研究員), ステファーン・ハウトケ(ブリュッセル王立美術館学芸員), シルヴィア・ボドナー(ブダペスト国立美術館学芸員), ヴェルナー・ブッシュ(ベルリン自由大学教授)		
セミナー・シンポジウム名	イタリア美術特別講演会「メディチ家の考古学コレクション」	開催日	平成 20 年 8 月 1 日
場所	国立西洋美術館 講堂	聴講者数	141 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	ファブリツィオ・パオルッチ(考古学者)		
セミナー・シンポジウム名	全国美術館会議 第 24 回学芸員研修会「美術館のいまー著作権・寄贈ハンドブック作成と運営制度ー」	開催日	平成 21 年 3 月 9 日
場所	国立西洋美術館 講堂	聴講者数	123 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	山梨俊夫(神奈川県立近代美術館長), 甲野正道(国立西洋美術館副館長), 高橋信裕(株式会社文化環境研究所), 藤間寛(島根県立美術館)		
オ 国立国際美術館			
セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「映像と絵画」	開催日	平成 20 年 5 月 31 日
場所	国立国際美術館 講堂	聴講者数	110 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	やなぎみわ(美術作家), 小林康夫(東京大学大学院教授), 稲垣貴士(成蹊大学准教授・国立国際美術館客員研究員), 建昌哲(国立国際美術館長) 司会: 加須屋明子(京都市立芸術大学准教授・国立国際美術館客員研究員)		
セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「中国アヴァンギャルドについて」	開催日	平成 20 年 12 月 9 日
場所	国立国際美術館 講堂	聴講者数	44 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	費大为(フェイ・ダウェイ/美術評論家), 方力鈞(ファン・リジュン/出品作家), 黄永祜(ホアン・ヨンビン/出品作家), 建昌哲(国立国際美術館長)*通訳あり		

セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「ポスト・アヴァンギャルド」	開催日	平成 20 年 12 月 10 日
場所	国立国際美術館 講堂	聴講者数	34 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	黄永砫(ホアン・ヨンビン/出品作家), 丁乙(ディン・イー/出品作家), 楊福東(ヤン・フードン/出品作家), モデレーター: 中井康之(国立国際美術館主任研究員) * 通訳あり		

カ 国立新美術館

セミナー・シンポジウム名	アートフォーラム「インポッシブル・モダニスト」	開催日	平成 20 年 6 月 1 日
場所	国立新美術館 3階講堂	聴講者数	100 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	マーゴ・ニール(オーストラリア国立博物館シニアキュレーター), 建畠哲(国立国際美術館長), クリストファー・ホッジズ(アーティスト, ユートピア・アート・シドニー ディレクター), サリー・パトラー(クイーンズランド大学講師・美術史)		
セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「中国現代美術の今とこれから」	開催日	平成 20 年 8 月 23 日
場所	国立新美術館 3階講堂	聴講者数	64 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	司会進行: 平井章一(国立新美術館主任研究員) 高名潞(ビッツバーク大学美術史・建築史学部教授, 四川美術学院高名潞現代芸術研究所所長), 牧陽一(埼玉大学教授), 建畠哲(国立国際美術館長)		
セミナー・シンポジウム名	シンポジウム「ピカソ-今日の展望-」	開催日	平成 20 年 11 月 15 日
場所	国立新美術館 3階講堂	聴講者数	182 人
講師・パネリスト等の氏名(職名)	河本真理(京都造形芸術大学准教授), 田中正之(武蔵野美術大学准教授), 林道郎(上智大学教授), 松浦寿夫(東京外国語大学教授)		

② 我が国の作家, 美術作品による展覧会開催のための海外の美術館との連携・協力

ア 東京国立近代美術館

(本館)

「現代美術への視点 6 エモーショナル・ドローイング」展が, 韓国のドローイングについてのアーカイブを付設する公営の美術館, SOMA 美術館(SOMAはSeoul Olympic Museum of Artの略記)に巡回した(平成 21 年 2 月 19 日~平成 21 年 4 月 19 日)。作家数は, 展示面積そのほかの事情に鑑み, 日本人作家 1 名減, 韓国作家 2 名増, 日本人作家 1 名増の延べ 18 名となった。同館は協力館として, 展覧会の企画・構成, 作家・作品選定, 展示撤収指導等を協同して行った。

(フィルムセンター)

・シネマテカ・ブラジレイラ(ブラジル・サンパウロ, FIAF 会員)との共同主催により, ブラジルにおける日本人移民 100 年を記念するプログラム「第 2 回ブラジルにおける無声映画の旅」のなかで, アニメーション映画, 短篇劇映画を含む日本の無声映画 11 本(6 番組)の上映を行った(会期は平成 20 年 8 月 9 日から 8 月 17 日まで)。作品の選定, 日本の無声映画及び初期アニメーション映画に関する概説はフィルムセンター研究員が行い, 翻訳され上映会全体のカタログに収録・発行された。会場ではポルトガル語による活弁も行われ, サイレント期日本映画の紹介と理解促進に努めた。

・ミュンヘン映画博物館(ドイツ・ミュンヘン, FIAF 会員)との共同主催により, 上映会「日本アニメーション映画史」を開催(会期は平成 21 年 3 月 3 日から 5 月 5 日までの予定)した。フィルムセンター研究員による概説, 作品紹介が翻訳されカレンダーに収録・発行された。

イ 京都国立近代美術館

イタリア・モデナ市写真美術館より, 京都国立近代美術館が所蔵する日本近代写真を代表する写真家・野島康三の写真作品約 150 点によるイタリア巡回展の申し出を受け, 平成 22 年春よりローマ, モデナ, ヴェニス美術館において共催による開催が決定した。

<p>(3) 国内外の美術館等における修理・保存処理の充実に寄与すること。</p> <p>(3) 国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等と保存・修復に関する情報交換を図りながら、修復・保存活動の充実に寄与する。</p>	<p>(3) 国際フィルム・アーカイブ連盟加盟機関及び国内映像関連団体並びに研究機関等と情報交換を図りながら、映画フィルム等の保存・修復活動を行う。</p>		<p><b>(3) 国内外の美術館及びフィルム・アーカイブ等との保存・修復に関する情報交換</b></p> <p>ア 東京国立近代美術館 本館では、「ブリジット・ライリー展」(パリ市立近代美術館)への同館所蔵作品貸出の際、作家本人を加え、パリ市立近代美術館保存修復担当と、当該作品の今後の保存方法について協議を行った。 フィルムセンターでは、『羅生門』(1950年)のデジタル復元に際し、修復作業の統括を行ったアカデミー・フィルム・アーカイブ(アメリカ、FIAF 会員)との間で、長期にわたる綿密な情報交換を行った。他に、UCLA フィルム・アンド・テレビジョン・アーカイブ(アメリカ、FIAF 会員)で保存施設を視察し、保存・修復に関する情報交換を行った。 また、京都文化博物館が復元した『祇園小唄 繪日傘 第二話狸大尽』【デジタル修復版】(1930年)、『槍供養』【デジタル修復版】(1927年)、『祇園祭』(1969年)より上映用プリントの作成を行うにあたり、修復に関する情報収集と交換を行った。</p> <p>イ 京都国立近代美術館 W. ユージン・スミス写真作品の整理・再調査に際し、アリゾナ大学付属クリエイティブ・フォトグラフィー・センターと密接な情報交換を行い、作品データの再確認及び訂正を行った。また、展覧会の共同開催を機に、英国ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館と日本の民芸関係作品、資料の保存に関する情報交換を行った。</p> <p>ウ 国立西洋美術館 J・P・ゲッティ美術館との共催による国際シンポジウム「美術・博物館のコレクションの地震対策」の平成21年度実施に向けて、情報交換及び開催準備を行った。</p>																																																																						
<p>(4) 国内の公私立美術館への所蔵作品の貸与については、所蔵作品の展示計画、作品保存に十分配慮しつつ、可能な限り積極的に取り組むこと。</p> <p>(4) 所蔵作品については、その保存状況を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に行う。</p>	<p>(4) 所蔵作品について、その保存状況や展示計画を勘案しつつ、国内外の美術館・博物館その他これに類する施設に対し、貸与等を積極的に実施する。</p> <p>東京国立近代美術館フィルムセンターでは、最新の保存・復元の成果を広く紹介するために、所蔵日本映画を中心にパッケージ化し、地方および海外の同種機関を中心に上映の打診を行い、開催の可能性について検討を行う。</p> <p>京都国立近代美術館は、静岡市のフェルケル博物館の「没後30年 ユージン・スミスの写真」展および千葉市美術館の「近代の写真」展へ、各120点以上の所蔵写真作品を貸与し、地方美術館の展覧会活動を支援する。</p>		<p><b>(4) 所蔵作品の貸与等</b></p> <p>①作品の貸与</p> <table border="1" data-bbox="846 730 1697 895"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>貸出件数</th> <th>貸出点数</th> <th>特別観覧件数</th> <th>特別観覧点数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館(本館)</td> <td>73</td> <td>375</td> <td>157</td> <td>397</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館(工芸館)</td> <td>27</td> <td>195</td> <td>34</td> <td>91</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>73</td> <td>779</td> <td>115</td> <td>311</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>17</td> <td>22</td> <td>88</td> <td>246</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>22</td> <td>128</td> <td>13</td> <td>31</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>212</td> <td>1,499</td> <td>407</td> <td>1,076</td> </tr> </tbody> </table> <p>東京国立近代美術館本館では、作品の貸与のほか引き続き写真閲覧制度(プリントスタディ)を実施した。(利用件数8件、閲覧者数147人、閲覧作品数224点)また、工芸館では、文化庁企画巡回展「わざと美」展において、平成20年度も47点の伝統工芸作品を貸与した。また、福島県立美術館企画展や岡山・香川合同企画分化交流展、藤田喬平遺作巡回展等に多数の作品貸与を行った。</p> <p>京都国立近代美術館では、福島県立美術館「伊砂利彦 志村ふくみ 二人展」(平成20年10月11日-11月24日)に30点、千葉市美術館「国立美術館所蔵 20世紀の写真」展(平成20年11月1日-12月14日)に95点の貸出を行った。</p> <p>国立西洋美術館では、前年度の約2倍となる17件、22点の貸出を行った。</p> <p>国立国際美術館では、名古屋市立美術館、千葉市美術館等に貸与を行った。</p> <p>②映画フィルム等の貸与</p> <table border="1" data-bbox="855 1114 1688 1190"> <thead> <tr> <th rowspan="2">種別</th> <th colspan="2">貸出</th> <th colspan="2">特別映写観覧</th> <th colspan="2">複製利用</th> </tr> <tr> <th>件数</th> <th>点数</th> <th>件数</th> <th>点数</th> <th>件数</th> <th>点数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>映画フィルム</td> <td>88</td> <td>314</td> <td>104</td> <td>296</td> <td>50</td> <td>94</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1" data-bbox="855 1214 1688 1291"> <thead> <tr> <th rowspan="2">種別</th> <th colspan="2">貸出</th> <th colspan="2">特別観覧</th> </tr> <tr> <th>件数</th> <th>点数</th> <th>件数</th> <th>点数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>映画関連資料</td> <td>10</td> <td>57</td> <td>38</td> <td>159</td> </tr> </tbody> </table> <p>海外の同種機関であるシネマテカ・ブラジレイラ及びミュンヘン映画博物館と共同主催の上映会を行ったほか、第56回サンセバスチャン国際映画祭回顧プログラム、第32回サンパウロ国際映画祭及び第61回ロカルノ国際映画祭等の国際映画祭にフィルムの貸与を行った。国内では、コミュニティシネマ支援センターとの間で巡回事業を共同主催したほか、プラネット映画資料館(大阪)、京都映画祭実行委員会及びマキノ雅弘生誕百年記念上映会実行委員会等にフィルムを貸与した。</p> <p>映画関連資料については、国内の展覧会主催者9機関に貸与を行った。また、海外についてはドイツ映画博物館へ貸与を行った。</p>	館名	貸出件数	貸出点数	特別観覧件数	特別観覧点数	東京国立近代美術館(本館)	73	375	157	397	東京国立近代美術館(工芸館)	27	195	34	91	京都国立近代美術館	73	779	115	311	国立西洋美術館	17	22	88	246	国立国際美術館	22	128	13	31	計	212	1,499	407	1,076	種別	貸出		特別映写観覧		複製利用		件数	点数	件数	点数	件数	点数	映画フィルム	88	314	104	296	50	94	種別	貸出		特別観覧		件数	点数	件数	点数	映画関連資料	10	57	38	159	
館名	貸出件数	貸出点数	特別観覧件数	特別観覧点数																																																																					
東京国立近代美術館(本館)	73	375	157	397																																																																					
東京国立近代美術館(工芸館)	27	195	34	91																																																																					
京都国立近代美術館	73	779	115	311																																																																					
国立西洋美術館	17	22	88	246																																																																					
国立国際美術館	22	128	13	31																																																																					
計	212	1,499	407	1,076																																																																					
種別	貸出		特別映写観覧		複製利用																																																																				
	件数	点数	件数	点数	件数	点数																																																																			
映画フィルム	88	314	104	296	50	94																																																																			
種別	貸出		特別観覧																																																																						
	件数	点数	件数	点数																																																																					
映画関連資料	10	57	38	159																																																																					

<p>(5)小・中学生のための美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして、モデル的な教材の開発や教員、学芸員等の資質向上のための研修等に重点化して実施すること。</p> <p>(5)-1 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして、全国の小・中学校等や私立美術館における教育普及活動の充実を促進するため、先導的・先駆的な教材やプログラムの開発を行う。</p> <p>(5)-2 全国の小・中学校等における鑑賞教育や、全国の美術館における教育普及活動の活性化を図るため、指導にあたる人材の育成を目指した全国レベルの教員、学芸員等の研修を実施する。</p>	<p>(5)美術教育の一翼を担うナショナルセンターとして、次の事業を行う。</p> <p>小・中学校の教員や学芸員が、学校や美術館で活用できる鑑賞教育用教材の普及を図る。</p> <p>各地域の学校と美術館の関係の活性化を図るとともに、子どもたちに対する鑑賞教育の充実に資するため、各地域の鑑賞教育や教育普及事業に携わる小・中学校の教員と学芸員が一堂に会し、グループ討議等を行う鑑賞教育に関する研修を実施する。</p>	<p>ナショナルセンターとしての人材育成</p> <p>【定性的に評価】</p>	<p>(5) 美術教育の一翼を担うナショナルセンターとしての活動</p> <p>① 美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修の実施</p> <p>平成20年度「美術館を活用した鑑賞教育の充実のための指導者研修」を実施した(参加者数:131名、実施期間:平成20年7月28日～7月30日、会場:東京国立近代美術館及び国立新美術館)。実施後に本研修の記録集を作成し、平成18年～20年度参加者及び全国の美術館教育関係者へ配布するとともにホームページへの掲載を行い、研修成果の普及を図った。</p> <p>② 先駆的・実験的な教材やプログラムの開発</p> <p>ア 国立美術館</p> <p>前年度に制作した、国立美術館4館の所蔵作品による美術作品鑑賞補助教材「アートカード・セット」を全国の小・中学校、高等学校及び大学へ貸出を行った。(76件、378セット)</p> <p>イ 東京国立近代美術館</p> <p>本館では、平成23年から実施される新学習指導要領の改訂に、改善協力者として関わり(一條主任研究員)、「小学校学習指導要領解説・図画工作編」(文部科学省、平成20年8月)の作成に協力した。唯一の美術館関係者として、鑑賞教育の充実や美術館の活用・連携が、適切に推進されるよう尽力した。また、前年度末に本部で作成した「アートカード」を、同館でのギャラリー・トークの事前授業として学校で活用するよう働きかけており、その学習効果について検証中である。</p> <p>工芸館では、所蔵作品展「こども工芸館:装飾」開催にあわせて、小・中学生向けのセルフガイド「デコハント」及び指導案を作成し、都内及び近隣の小・中学校に事前に配布するとともに、会期中は館内で来館者に配布した。指導案を添付したことで同素材を鑑賞授業で使用する学校・クラスも出ており、一応の普及効果が認められるが、一方で小学生と中学生の成長段階の相違を反映した新しい教材の方向性を探る必要もあり、平成21年度以降の検討課題とした。</p> <p>ウ 国立西洋美術館</p> <p>既存の鑑賞補助教材をファミリー・プログラムに応用した。</p>	<p>B</p> <p>・共同研究の展示会への反映、個人研究の学会発表や論文執筆などを通して、各館の研究員の資質を伸ばしたことや、また、インターシップやキュレーター研修などのシステムを通して外部の人材育成に努めたことなどは、高い評価に値する。しかし、法人全体としての計画の策定が十分とは言えず、今後の検討が必要である。</p> <p>・展示会図録も含め、各館の刊行物、外部の雑誌、学会等での研究成果の発信が活発に行なわれており、その点では、館内の人材の育成は評価できる。</p> <p>【よりよい事業とするための意見】</p> <p>・人材の育成は、今後さらに、外部の人材への刺激を喚起するようなプログラムの開発が望まれる。</p> <p>・小中高学生の映画鑑賞教育をより推進することで、映像を通じた「読解能力」を強化することも重要であるため、今後の取組みが期待される。</p>																					
<p>(6)大学等との機関とも積極的に提携しながら、今後の美術館活動を担う中核的な人材の育成を図ること。</p> <p>(6)大学院生等を対象としたインターンシップ等の事業を進め、今後の美術館活動を担う中核的な人材を育成する。</p>	<p>(6)インターンシップ等の事業を次のとおり実施する。</p> <p>各館においてインターンシップ制度を実施する。</p> <p>東京国立近代美術館工芸館・フィルムセンターにおいて、大学生の学芸員資格取得のための博物館実習を実施する。</p> <p>国立西洋美術館において、大学院(東京大学大学院人文社会系研究科)と連携して西洋美術に関する教育を行う。</p>		<p>(6) 美術館活動を担う中核的な人材の育成</p> <table border="1" data-bbox="855 810 1688 976"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>インターンシップ受入数</th> <th>博物館実習受入数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館</td> <td>19</td> <td>17</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>0</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>5</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>7</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>7</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>38</td> <td>17</td> </tr> </tbody> </table>	館名	インターンシップ受入数	博物館実習受入数	東京国立近代美術館	19	17	京都国立近代美術館	0	—	国立西洋美術館	5	—	国立国際美術館	7	—	国立新美術館	7	—	計	38	17	
館名	インターンシップ受入数	博物館実習受入数																							
東京国立近代美術館	19	17																							
京都国立近代美術館	0	—																							
国立西洋美術館	5	—																							
国立国際美術館	7	—																							
国立新美術館	7	—																							
計	38	17																							
<p>(7)全国の実美術館等の運営に対する援助、助言を行うとともに、関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努めること。</p> <p>(7)全国の実美術館等の運営に対する援助、助言を適時行うとともに、企画展の共同主催やそれに伴う共同研究及びその他の研修制度を通じて、関係者の情報交換・人的ネットワークの形成等に努める。</p>	<p>(7)美術館の学芸担当職員等を対象としたキュレーター研修を実施し、その専門的知識及び技術の向上を図る。</p>		<p>(7) 全国の実美術館等との連携・人的ネットワークの構築</p> <p>① 企画展・上映会等の共同主催と共同研究</p> <table border="1" data-bbox="855 1193 1688 1359"> <thead> <tr> <th>館名</th> <th>共同主催件数</th> <th>共同研究件数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館</td> <td>14</td> <td>15</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>1</td> <td>5</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>2</td> <td>2</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>6</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>8</td> <td>12</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>31</td> <td>34</td> </tr> </tbody> </table> <p>特記事項(共同研究によって特に得られた成果等)</p> <p>(ア)東京国立近代美術館(本館)</p> <p>自主企画展を全国の実美術館と共同主催するケースが増えており、人的ネットワークの形成に寄与した。また、企画・</p>	館名	共同主催件数	共同研究件数	東京国立近代美術館	14	15	京都国立近代美術館	1	5	国立西洋美術館	2	2	国立国際美術館	6	0	国立新美術館	8	12	計	31	34	
館名	共同主催件数	共同研究件数																							
東京国立近代美術館	14	15																							
京都国立近代美術館	1	5																							
国立西洋美術館	2	2																							
国立国際美術館	6	0																							
国立新美術館	8	12																							
計	31	34																							

立案、調査研究の連携に当たっては主導的役割を果たす局面が増えていることが特筆される。  
(フィルムセンター)

- ・「ルノワール＋ルノワール展」開催記念 ジャン・ルノワール映画の世界 ジャン・ルノワール監督名作選」：共催者の日本テレビ並びに関連の上映企画を開催した東京日仏学院、Bunkamura ル・シネマと協議し、ルノワール監督のフィルムグラフィックや史的評価を踏まえながら作品選定を行った。
- ・「EU フィルムデーズ 2008」：欧州連合駐日欧州委員会代表部と協議し、近年の EU 加盟各国の映画動向や作品の評価を踏まえながら作品選定を行った。
- ・「日本インディペンデント映画史シリーズ① PFF30 回記念 ぴあフィルムフェスティバルの軌跡 Vol.1」：ぴあ株式会社と協議しながらぴあフィルムフェスティバルの最初の 10 年の出品作品を対象に、同時代の評価と現在の評価の双方を踏まえながら作品選定を行った。
- ・「生誕 100 年 川喜多かしことヨーロッパ映画の黄金時代」：川喜多記念映画文化財団と協議し、川喜多かしこと東宝東和が日本に配給した外国映画の中から史的評価を踏まえて作品選定を行った。
- ・「第 9 回東京フィルメックス 特集上映 蔵原惟緒監督特集 ～狂熱の季節～」：東京フィルメックス実行委員会と協議し、蔵原惟緒監督の史的評価を踏まえながら初期作品を中心とする作品選定を行った。
- ・「日本オランダ年 2008-2009 オランダ映画祭 2009」：キネマ旬報社と協議して、1980 年代以降のオランダ映画の潮流と最新作の動向を踏まえながら作品選定を行った。
- ・「カナダ・アニメーション映画名作選」：シネマテーク・ケベコワーズと協議して、国立映画制作庁 (NFB) を中心にカナダ・アニメーションが世界映画史に与えた影響を踏まえて作品選定を行った。
- ・シンポジウム「映像アーカイブの未来」：特定非営利活動法人映像メディア創造機構と協議し、国内外の映像アーカイブなどの専門家からパネリストを選び招聘した。
- ・「生誕百年 川喜多かしこ展」：川喜多記念映画文化財団と協議し、川喜多かしの業績を顕彰するための展示品の選定と展示企画のコンセプト作りを行った。
- ・「無声時代ソビエト映画ポスター展」：京都国立近代美術館と共同してカタログの編集作業を行い、両館の研究員がカタログへの執筆に参加した。

(イ) 京都国立近代美術館  
展覧会活動を通じ、浜松市秋野不矩美術館、目黒区美術館との連携を深めた。

(ウ) 国立西洋美術館  
「コロロ 光と追憶の変奏曲」展を神戸市立博物館と共同で開催した。また、「ルーヴル美術館展 17 世紀ヨーロッパ絵画」を京都市美術館と共同で開催した。

(エ) 国立国際美術館  
「エミリー・ウングワレー展」はオーストラリア国立博物館と国立新美術館、「モディリアーニ展」はバリ・ピナコテーク美術館、国立新美術館と、「アヴァンギャルド・チャイナ展」では愛知県立美術館、国立新美術館と、「液晶絵画」展では三重県立美術館、東京都写真美術館と、「新国賊一の〈具体詩〉」展では武蔵野美術大学と共同研究を行った。  
とりわけ、「アジアとヨーロッパの肖像」展は ASEMUS (アジア・ヨーロッパ・ミュージアム・ネットワーク) に参加する世界 18 カ国の博物館、美術館による国際巡回展として企画された。日本においては国立民族学博物館、福岡アジア美術館、神奈川県立近代美術館、神奈川県立歴史博物館との共同研究のもとに、大阪においては、同館と国立民族学博物館との同時開催し、博物館と美術館という垣根を越えた開催を試み成功させた。

(オ) 国立新美術館  
国立国際美術館、愛知県美術館、国際交流基金と共同で中国現代美術の作家や作品に関する調査研究を行い、「アヴァンギャルド・チャイナ (中国当代美術二十年) -」展を開催した。同展のカタログには国立新美術館、国立国際美術館、愛知県美術館で執筆分担した論文を掲載した。

② キュレーター研修

館 名	受入人数
東京国立近代美術館	2
計	2

<p>(8)フィルムセンターにおいては、国際的に我が国を代表する映画文化振興の中核となる総合的な機関として、国内外の映画関係団体等との連絡を密接に図り、その連携・調整について役割を果たすこと、また、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、本東京国立近代美術館から独立した一館となることを検討すること。</p>							
<p>(8)-1 フィルムセンターは我が国の映画文化振興の中核の機関として、国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員として、引き続き国際的な事業等に取り組む。また、「引き継ぎ国際的な事業等」の運営に主体的に関わるとともに、「所蔵映画フィルム検索システム」を拡充する等、各種情報の収集・発信を行う。さらに、映画関係団体や大学等が行う各種取組について連携・調整の役割を積極的に果たすため、当該団体等との連絡会議を年に2~3回程度主宰する。</p> <p>(8)-2 フィルムセンターが、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、東京国立近代美術館の映画部門から、同館、京都国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館等とならば独立した一館となることを検討する。</p>	<p>(8)-1 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、我が国の映画文化振興の中核の機関として次のとおり実施する。</p> <p>国内外で実施される各種映画祭や大学等の映画・映像に関する研究会等に協力する。</p> <p>映画関係団体や大学等との連携協力を推進するための会議等を年間2~3回程度主宰する。</p> <p>ア 川喜多記念映画文化財団、国際交流基金、ユニジャパンなど「日本映画の海外普及に関する関係諸団体との会合」を開催する。</p> <p>イ 映画の保存等に関する専門家養成講座や博物館学芸員、図書館、公文書館などの司書を対象としたセミナーの開催について検討を進めるため識者や関係者を集め会議を開催する。</p> <p>文化庁が実施する文化庁映画賞選考会に協力する。</p> <p>文化庁芸術祭主催公演「日本映画名作鑑賞会」に協力する。</p> <p>文化庁が実施する「日本映画情報システム」事業に協力する。</p> <p>(8)-2 東京国立近代美術館フィルムセンターでは、より機動的かつ柔軟な運営を行うため、国立美術館内における独立した一館となるべく、その機能拡充について、今年度は、これまでの内部検討を踏まえた独立のための具体的な計画案を策定して評議員会等に諮る。</p>	<p><b>(8) 我が国の映画文化振興の中核の機関としてのフィルムセンターの活動</b></p> <p>① <b>国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員としての活動</b></p> <p>シネマテーク・ケベコワーズ(カナダ・モントリオール)と共同で「カナダ・アニメーション映画名作選」を開催し、同シネマテークが所蔵するアニメーション映画100本を上映した。本事業は、前年度シネマテーク・ケベコワーズで共同主催した「アニメの源へー日本アニメーション映画(1924~1952)」に続いて開催されるもので、交換事業として実現した。</p> <p>また、第64回FIAFパリ会議、FIAF運営委員会(イタリア・ボルデノーネ)に参加し、同連盟の各種事業に貢献した。</p> <p>② <b>日本映画情報システムの運営</b></p> <p>「日本映画情報システム」については、平成20年度に、戦前に公開された劇映画8,252本の入力を完了し、公開した。これにより公開レコード数は28,592件となった。</p> <p>③ <b>所蔵映画フィルム検索システムの拡充</b></p> <p>「所蔵映画フィルム検索システム」については、平成20年度に日本劇映画のレコード302件を新たに公開した。</p> <p>④ <b>映画関係団体等との連携</b></p> <p>国内では、びあフィルムフェスティバル、京都映画祭、東京国際女性映画祭、ゆうばり国際ファンタスティック映画祭等へ映画フィルムの貸与を通じて協力を行った。国外では、サンセバスチャン国際映画祭(スペイン・サンセバスチャン)、ロカルノ国際映画祭(スイス・ロカルノ)等、伝統ある国際映画祭に対し、作品選定の助言を行うとともに映画フィルムの貸与を行った。また、東京大学大学院情報学環・学際情報学府、東京藝術大学大学院映像研究科、新潟大学人文学部、立命館大学映像学部、映画専門大学院大学、国士館大学国文学会、日本写真学会、日本マス・コミュニケーション学会、映画の保存と復元に関するワークショップ、神奈川県視聴覚教育連盟等が主催するシンポジウム、講演会、授業等に研究員が参加し、研究成果の発表やディスカッションを通じて協力した。</p> <p>特定非営利活動法人映像メディア創造機構と共同で国際シンポジウム「映像アーカイブの未来」を開催し、カナダ、フランス、韓国並びに国内の映像アーカイブなどから専門家を招いて映画の保存と活用についてプレゼンテーションとパネルディスカッションを行った。</p> <p>「日本映画の海外普及に関する関係諸団体との会合」を、平成21年3月13日に開催した。</p> <p>海外における映画祭等への日本映画の普及を行っている川喜多記念映画文化財団、国際交流基金、ユニジャパンとの間で会合を行い、平成20年度における活動報告、平成21年度以降の活動計画及び団体相互の連携の可能性について議論した。</p> <p>「東京国立近代美術館フィルムセンター・アーカイブ事業等検討委員会」を、平成21年3月26日に開催した。</p> <p>東京国立近代美術館フィルムセンターが実施するアーカイブ事業について助言を求めるとともに、当該事業に関連した人材育成事業の在り方について検討を行うため、識者や関係者を集め会議を開催した。</p> <p>⑤ <b>フィルムセンターの東京国立近代美術館からの独立の検討</b></p> <p>東京国立近代美術館フィルムセンターは、映画保存事業の拡大や新たな時代の要請に合わせた機能の充実をめざして、文化庁が推進する「メディア芸術の国際的な拠点の整備に関する検討会」の進展状況や海外同種機関の組織改革等も注視しながら、国立美術館内における独立した一館となることを含む様々な独立の可能性について、今後、より深い検討をするための情報収集を行った。</p> <p>1 S:特に優れた実績を上げている。(客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評価を付す。)</p> <p>2 F:評価委員会として業務運営の改善その他の助言を行う必要がある。(客観的基準は事前に設けず、業務改善の助言が必要と判断された場合に限りFの評価を付す。)</p>	<p>A</p> <p>わが国の映画文化の中核として、少ない人員、予算の中、フィルム・アーカイブ、鑑賞機会の提供、研究調査の面で優秀な活動を展開したと認められる。</p> <p>【よりよい事業とするための意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国際的な動向を鑑みるに、フィルムセンターがより機動的かつ柔軟な運営を行うためには、東京国立近代美術館の一部門ではなく、他の国立美術館と並ぶ独立した機関として機能する方向を検討することが望まれる。</li> <li>・わが国の映画文化の中核として、今後さらに積極的な推進が図られることが期待される。</li> </ul> <p>A</p>				
	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="792 1214 896 1214">1</td> <td data-bbox="896 1214 1008 1214">2回以上</td> <td data-bbox="1008 1214 1120 1214">-</td> <td data-bbox="1120 1214 1232 1214">1回</td> <td data-bbox="1232 1214 1344 1214">2</td> <td data-bbox="1344 1214 1753 1214">実績:2回 (前年度実績:2回)</td> </tr> </table>	1	2回以上	-	1回	2	実績:2回 (前年度実績:2回)
1	2回以上	-	1回	2	実績:2回 (前年度実績:2回)		



# 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

<p>評価 A</p> <p>中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。</p>	<p>評価のポイント</p> <p>業務の効率化について、全体的に法人の努力は評価できる。</p>
--	---

中期目標	年度計画	評価項目	評価基準					主な実績及び自己評価	評価	評価委員会によるコメント																																																																
			S	A	B	C	F																																																																			
<p><b>業務運営の効率化に関する事項</b></p> <p>運営費交付金を充当して行う業務については、事務手続きの簡素化や、競争入札等の推進により一層の業務の効率化を進め、中期目標の期間中、一般管理費15%以上、業務経費5%以上の業務の効率化を図ること、ただし、退職手当、特殊要因経費はその対象としない。また、「行政改革の重要方針」(平成17年12月24日閣議決定)を踏まえ、平成18年度から5年間にわたり、国家公務員に準じた人件費削減の取組を行うとともに、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを進めること。</p>																																																																										
<p>1 職員の意識改革を図るとともに、収蔵品の安全性の確保及び入館者へのサービスの向上を考慮しつつ、運営費交付金を充当して行う事業については、国において実施されている行政コストの効率化を踏まえ、業務の効率化を進め、中期目標の期間中、毎事業年度につき新規に追加される業務、拡充業務分等を除き5年期間中に一般管理費15%以上、業務経費5%以上の業務の効率化を図る。具体的には下記の措置を講ずる。 (1) 各美術館の共通的な事務の一元化による業務の効率化</p> <p>(2) 使用資源の削減 ・省エネルギー (5年計画で1年に1.03%の減少) ・廃棄物減量化 (排出量を5年間で5%減少) ・リサイクルの推進</p>	<p>1 業務運営の一層の効率化を進めるため、次のような措置を講ずる。 各館において個別に行っている出版物の編集・発行業務について、可能なものから本部において一元的に実施する。 国立美術館5館において情報システムネットワークの一元化を実施する。 東京国立近代美術館及び国立西洋美術館において、エネルギー効率の高い空調設備等への更新工事を実施する。 東京国立近代美術館等の管理・運営業務(展示事業の企画等を除く。)について、民間競争入札を実施する。 施設の有効利用のため、外部貸出による講堂等の利用率の向上及び閉館時におけるエントランスロビー等の活用を図る。 対象業務の拡大や契約の包括化により、競争入札を推進する。</p>	<p>業務の効率化の状況 【定性的に評価】</p>	<p><b>1 業務の効率化のための取り組み</b> <b>(1) 各美術館の共通的な事務の一元化</b> 国立美術館では、平成19年8月から本部に事務局長を置き、本部事務局の企画立案昨日の充実を図るとともに、事務局長のトップマネジメントの下、各館の事務組織が有機的に連携し、効果的・効率的な業務を遂行しうる体制を整備しているところである。今年度においてはこれに加え、平成21年度からの実施に向け、これまで各館で実施していた研究職員の選考等について法人として一体的に行う仕組みの構築とともに、各館で行っていた出版物のうち年報について法人本部において一元的に実施するための検討等を行ったところである。また、これらを効率的に実施するとともに、業務の効率化と経費の削減を図るため、法人内のネットワークを活用したテレビ会議システムを調達した。</p> <p><b>(2) 使用資源の削減</b> <b>省エネルギー(5年計画で1年に1.03%の減少)</b> 使用量、使用料金の削減割合(対前年度比)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">館名</th> <th colspan="3">使用量</th> <th colspan="3">使用料金</th> </tr> <tr> <th>電気</th> <th>ガス</th> <th>合計</th> <th>電気</th> <th>ガス</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東京国立近代美術館本館</td> <td>100.1%</td> <td>63.5%</td> <td>75.6%</td> <td>111.1%</td> <td>84.1%</td> <td>101.0%</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館工芸館</td> <td>100.3%</td> <td>-</td> <td>100.3%</td> <td>109.0%</td> <td>-</td> <td>109.0%</td> </tr> <tr> <td>東京国立近代美術館フィルムセンター</td> <td>97.4%</td> <td>-</td> <td>97.4%</td> <td>110.4%</td> <td>-</td> <td>110.4%</td> </tr> <tr> <td>京都国立近代美術館</td> <td>98.2%</td> <td>95.7%</td> <td>96.9%</td> <td>105.9%</td> <td>119.8%</td> <td>109.2%</td> </tr> <tr> <td>国立西洋美術館</td> <td>68.7%</td> <td>98.5%</td> <td>87.0%</td> <td>93.2%</td> <td>122.0%</td> <td>103.1%</td> </tr> <tr> <td>国立国際美術館</td> <td>97.3%</td> <td>-</td> <td>97.3%</td> <td>108.3%</td> <td>-</td> <td>108.3%</td> </tr> <tr> <td>国立新美術館</td> <td>92.6%</td> <td>91.3%</td> <td>92.0%</td> <td>104.9%</td> <td>100.0%</td> <td>103.5%</td> </tr> <tr> <td>法人全体</td> <td>90.6%</td> <td>88.3%</td> <td>89.5%</td> <td>104.4%</td> <td>97.7%</td> <td>104.3%</td> </tr> </tbody> </table> <p>東京国立近代美術館工芸館・フィルムセンター及び国立国際美術館は、ガス設備を設置していない。 使用量の合計は、電気1kwhあたり3.6MJ、ガス1m<sup>3</sup>あたり44.8MJ(資源エネルギー庁「エネルギー源別標準発熱量表」による。)に換算して合計したものである。 特記事項(増減の理由等) 省エネルギーについては、展示会場における空調使用や美術作品収蔵庫における一定湿度維持等、業務の性質上、削減が難しい事情があるものの、従来から引き続き、美術作品のない区画においての空調設定温度への配慮(夏季28度、冬季20度)、不使用設備機器類のこまめな停止等、個々の意識の啓発によりエネルギーの削減に努めた。また、国立新</p>	館名	使用量			使用料金			電気	ガス	合計	電気	ガス	合計	東京国立近代美術館本館	100.1%	63.5%	75.6%	111.1%	84.1%	101.0%	東京国立近代美術館工芸館	100.3%	-	100.3%	109.0%	-	109.0%	東京国立近代美術館フィルムセンター	97.4%	-	97.4%	110.4%	-	110.4%	京都国立近代美術館	98.2%	95.7%	96.9%	105.9%	119.8%	109.2%	国立西洋美術館	68.7%	98.5%	87.0%	93.2%	122.0%	103.1%	国立国際美術館	97.3%	-	97.3%	108.3%	-	108.3%	国立新美術館	92.6%	91.3%	92.0%	104.9%	100.0%	103.5%	法人全体	90.6%	88.3%	89.5%	104.4%	97.7%	104.3%	<p>A</p>	<p>・事務の一元化や民間委託の推進は、業務の効率化に資するところが大きく、その試みは評価に値する。 ・廃棄物の減量化については、法人全体としては減少しており評価できる。 ・外部への施設の貸出、廃棄物処理業務等の共同契約、国立新美術館のホームページ更新等、外部委託など業務の効率化等を行っていること認められる。 ・競争入札の推進、外部の有識者による事業評価、職員の研修等、セキュリティの強化を実施していることは評価できる。 ・人件費の削減は、平成17年度と比べ約4%の削減に努めており、工夫をこらして順調に実施されていると評価できる。 ・年齢のみを勘案した給与水準の対国家公務員指数が100を超えているが、その原因は、5館の美術館のうちの3館が東京都特別区内に所在しているためであり、地域を勘案した場合の対国家公務員指数は94.4となっていることから、給与水準は適正であると認められる。 ・国と異なる手当として主任研究員手当があるが、これは、勤務の特殊性から予め超過勤務を命じることが勤務形態にそぐわない美術館活動の高度な調査研究を独立して行う者に対し、時間外勤務手当に相当する手当として支給するものであり、支給内容等は業務形態に沿ったものであると認められる。 ・国家公務員の俸給の特別調整額と同様の制度として、組織の管理又は監督の地位にある役職に対し、管理職手当を設けてお</p>
館名	使用量				使用料金																																																																					
	電気	ガス	合計	電気	ガス	合計																																																																				
東京国立近代美術館本館	100.1%	63.5%	75.6%	111.1%	84.1%	101.0%																																																																				
東京国立近代美術館工芸館	100.3%	-	100.3%	109.0%	-	109.0%																																																																				
東京国立近代美術館フィルムセンター	97.4%	-	97.4%	110.4%	-	110.4%																																																																				
京都国立近代美術館	98.2%	95.7%	96.9%	105.9%	119.8%	109.2%																																																																				
国立西洋美術館	68.7%	98.5%	87.0%	93.2%	122.0%	103.1%																																																																				
国立国際美術館	97.3%	-	97.3%	108.3%	-	108.3%																																																																				
国立新美術館	92.6%	91.3%	92.0%	104.9%	100.0%	103.5%																																																																				
法人全体	90.6%	88.3%	89.5%	104.4%	97.7%	104.3%																																																																				

(3) 施設有効使用の推進  
・美術館施設の利用推進

美術館においては、BEMS (Building and Energy Management System) を導入し、系統別に細かなエネルギー消費動向の把握が可能となり、省エネルギー対策に取り組んでいる。これらにより法人全体の使用量は前年度に比べ減少したものの、使用料金については原油価格高騰による価格改定の影響を受け、前年度より増加となった。

また、平成 20 年度における電気の調達に係る一般競争入札を、東京国立近代美術館、国立西洋美術館、国立新美術館の 3 館で統合して行ったが、不調に終わり不随契をすることとなった。

**廃棄物減量化（排出量を 5 年期間中 5 % 減少）**

排出量，廃棄料金の削減割合（対前年度比）

館名	排出量			廃棄料金	
	一般廃棄物	産業廃棄物	合計	一般廃棄物	産業廃棄物
東京国立近代美術館本館	51.6%	81.0%	59.5%	41.3%	44.2%
東京国立近代美術館工芸館	115.5%	70.1%	102.5%	92.4%	51.4%
東京国立近代美術館フィルムセンター	80.6%	79.5%	80.0%	64.5%	43.3%
京都国立近代美術館	11.7%	-	47.9%	-	-
国立西洋美術館	99.4%	111.4%	102.9%	138.0%	118.8%
国立国際美術館	110.6%	7.3%	110.4%	100.0%	5.6%
国立新美術館	52.4%	48.0%	51.0%	59.7%	43.2%
法人全体	57.0%	85.2%	64.4%	68.9%	67.5%

京都国立近代美術館は、一般廃棄物の処理を清掃業者に一括して委託しているため、廃棄料金が算出できない。また、京都国立近代美術館は当年度実績として産業廃棄物の排出があったが、前年度実績が「0」だったため、対前年度比率が算出できない。

**特記事項（増減の理由等）**

廃棄物の減量化については、開館日数や来館者数の増減により影響を受けるのが現状であるが、電子メールやグループウェアによる通知文書の発信やサーバ保存文書の共同利用、両面印刷の促進や裏紙の再利用等によるペーパーレス化ならびに用紙の節減に努めた。また、リサイクルの古紙の分別回収を進めることにより、廃棄物の削減を図った。

東京国立近代美術館ならびに国立新美術館の 2 館は、平成 20 年度に廃棄物処理業務委託の共同契約を行うことにより、廃棄料金の削減を図った。これらにより、法人全体としては前年度比より排出量ならびに廃棄料金の大幅な減少となった。

**リサイクルの推進**

古紙含有率 100% のコピー用紙の利用、古紙の裏面利用による再利用、廃棄物の分別、OA 機器等トナーカートリッジのリサイクルによる再生使用を引き続き行い、更なるリサイクルの推進に努めた。

**(3) 美術館施設の利用推進**

**外部への施設の貸出**

各館の貸出施設名	貸出日数	貸出可能日数	貸出利用率
東京国立近代美術館本館（講堂）	27日	316日	8.5%
東近美フィルムセンター（小ホール）	7日	188日	3.7%
東近美フィルムセンター（会議室）	32日	276日	11.6%
京都国立近代美術館（講堂）	11日	168日	6.5%
京都国立近代美術館（会議室）	12日	158日	7.6%
国立西洋美術館（講堂）	52日	231日	22.5%
国立西洋美術館（会議室）	7日	231日	3.0%
国立国際美術館（講堂）	47日	266日	17.7%
国立国際美術館（会議室）	12日	230日	5.2%
国立新美術館（講堂）	72日	265日	27.2%
国立新美術館（研修室 A）	67日	236日	28.4%
国立新美術館（研修室 B）	58日	236日	24.6%
国立新美術館（研修室 C）	45日	238日	18.9%
計	449日	3,039日	14.8%

・貸出可能日数は、年末年始休館及び館事業により使用した日数を除いたもの。

り、支給対象範囲や支給額の算出方法等について、国の基準に基づき設定されていることから、手当の設定内容について妥当であると認められる。

・随意契約の見直し計画どおりに進捗していない主な要因について、十分な分析がなされているとはいいがたく、今後、随意契約の見直し計画に向け、十分な分析を実施するとともに、随意契約の見直し計画の達成に向けた積極的な取り組みをすることが望まれる。

・競争性のない随意契約の金額が増加（8.8 億円）している主な要因は、土地購入に関する金額が平成 19 年度に比べ増額（約 15.0 億円）したことであると考えられるため、その他の契約については、一般競争入札等競争性のある契約へ移行するよう取り組んだものと認められる。

・1 者応札の実績件数は前年度から 9 件の減少を図り、1 者応札率の件数も 50% を下回っているほか、第三者への再委託を行っている契約がないことから、契約の適正化への取り組みに努めていると判断できるものの、前年度に比べ 1 者応札の実績金額が増加し、1 者応札率の金額が高くなっていることから、今後は、要因分析を踏まえて、更なる改善に取り組む必要がある。

・契約の適正化は実行されている。諸規程の整備及び内部のチェック体制は十分になされていると判断される。

**【よりよい事業とするための意見】**

・一般競争入札について、美術品の収集あるいは修理等、競争入札になじまない内容は、説明責任を果たしたうえで、業務の効率化の対象外とする検討も必要である。

・事務の一元化、民間委託の推進などの業務の効率化は、あくまで美術館活動の活発化を優先し、損なわない形で行われるのが望ましい。

・テレビ会議システムの導入は、出張費等の削減だけではなく、役職員の時間の有効利用にもつながるため、今後の有効活用が望まれる。

・人件費の削減については、無駄な部分を削減するだけではなく、組織全体の活性化に役立つような施策が期待される。

<p>(4) 民間委託の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一般管理部門を含めた組織・業務の見直しを行い、民間開放をさらに積極的に進める。</li> <li>・館の広報・普及業務について民間委託を推進する。</li> </ul> <p>(5) 競争入札の推進</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・契約業者の競合を一層推進することにより、経費の効率化を図る。</li> </ul> <p>2 外部有識者も含めた事業評価を年1回以上実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。また、研修等を通じて職員 の理解促進、意識や取り組みの改善を図っていく。</p>	<p>2 外部の有識者による評価及び職員の意識改善</p> <p>運営委員会及び外部評価委員会による業務の実績に関する評価を組織、事務、事業等の改善に反映させる。</p> <p>会計・人事等の研修を通じて職員の意識改革と資質の向上を図り、併せて組織の活性化を図る。</p>		<p>特記事項</p> <p>外部への施設の貸出については、館の事業に差し支えない範囲で、会議室、講堂、研修室の外部への貸出を行い、共催者から提案のあった講演会やイベント等への貸出ならびに展示室やロビー、エントランス等においてのイベントの開催等にも可能な限り対応を行うなどして利用の推進を図った。</p> <p>講堂については、利用促進PRのための利用案内ホームページ掲載し、フィルムセンターの小ホールについても、可能な限り外部への貸出を行った。</p> <p>また、京都国立近代美術館の会議室についても、平成20年度から外部への貸出を開始した。</p> <p><b>(4) 民間委託の推進</b></p> <p><b>一般管理部門を含めた組織・業務の見直しと民間委託の推進</b></p> <p>次の外部委託を行い業務の効率化を図った。</p> <p>(ア)会場管理業務、(イ)設備管理業務、(ウ)清掃業務、(エ)保安警備業務、(オ)機械警備業務、(カ)収入金等集配業務、(キ)レストラン運営業務、(ク)アートライブラリ運営業務、(ケ)ミュージアムショップ運営業務、(コ)美術情報システム等運営支援業務、(サ)ホームページサーバ運用管理業務、(シ)電話交換業務</p> <p>東京国立近代美術館ならびに国立新美術館は、個別に委託していた廃棄物処理業務を共同契約として、業務の効率化や経費の節減を図った。</p> <p>京都国立近代美術館は、釣銭準備業務、常駐警備業務の外部委託を平成20年度に検討を行い、平成21年度から実施する予定である。</p> <p>国立西洋美術館は、設備管理業務の委託を平成20年度に検討し、平成21年度から実施する。</p> <p>国立新美術館は、ホームページの更新について、業務効率化や広報戦略の見直しにより平成20年度から業務委託を開始した。</p> <p>なお、官民競争入札の導入に係る検討・取組状況については、「独立行政法人整理合理化計画(平成19年12月24日、閣議決定)」、(別表)「各独立行政法人について講ずべき措置」中の「【民間競争入札の適用】東京国立近代美術館等の管理・運営業務(展示事業の企画等を除く。)」について、民間競争入札を実施する。」のとおり、「東京国立近代美術館本館及び工芸館の管理・運営業務」を「競争の導入による公共サービスの改革に関する法律」に則り、業者の選定等を実施し、平成21年4月からの導入に向け、体制を整えた。</p> <p><b>広報・普及業務の民間委託の推進</b></p> <p>(ア)情報案内業務、(イ)広報物等発送業務、(ウ)交通広告等掲載、(エ)ホームページ改訂・更新業務、(オ)インターネット検索サイト、(カ)ラジオCM等を利用した総合的な広報宣伝業務、(キ)雑誌「びあ」広告掲載年間契約及びチケット販売委託、(ク)講堂音響設備オペレーティング委託を行った。</p> <p><b>(5) 競争入札の推進</b></p> <p><b>一般競争入札の実績</b></p> <p>別紙1「契約件数及び契約金額の状況(平成20年度)」、別紙2「随意契約見直し契約に関する進捗状況」ならびに別紙3「公益調達の適正化(財計第2017号)等に即した実施状況」を参照。</p> <p>特記事項</p> <p>競争契約は、平成19年度と比して件数で11件の減、契約額で468,579,235円の増となっている。これは、施設整備費補助金による工事が行われたことなどによるものである。</p> <p>また、随意契約については平成19年度と比して件数で88件の減、契約額で1,395,515,391円の増となっている。これは平成19年度から発生した契約で国立新美術館の土地購入費の増額(平成19年度:6,300百万円,平成20年度:7,800百万円)によるものである。</p> <p><b>2 事業評価及び職員の研修等</b></p> <p><b>外部有識者による事業評価</b></p> <p>ア 本部</p> <p>独立行政法人国立美術館運営委員会を2回(平成20年6月26日及び平成21年3月2日)開催し、平成19年度事業実績について説明聴取の上、意見交換を行った。また、平成20年度事業の実施状況及び21年度事業計画(案)について説明聴取の上、意見交換を行った。</p> <p>また、独立行政法人国立美術館外部評価委員会を3回(平成20年4月16日,5月21日及び6月12日)開催し、平成19年度事業実績について説明聴取の上、審議し評価報告書を取りまとめた。</p> <p>イ 東京国立近代美術館</p> <p>評議員会(美術・工芸部会)を2回(平成20年6月23日及び平成21年2月16日)開催し、平成19年度事業実</p>	
---	--	--	---	--

3 国立美術館が管理する情報の安全性向上のため、必要な措置をとる。

4 「行政改革の重要方針」（平成17年12月24日閣議決定）を踏まえ、人件費については、平成22年度において、平成17年度と比較して、5%以上削減する。ただし、今後の人事院勧告を踏まえた給与改定分については削減対象より除く。また、削減対象の「人件費」の範囲は、各年度中に支給した報酬（給与）、賞与、その他の手当の合計額とし、退職金、福利厚生費は含まない。  
また、民間資金との地域差、給与カーブのフラット化、勤務実績の給与への反映を内容とする国家公務員の給与構造改革を踏まえて、給与体系の見直しに取り組む。

人事評価制度について、見直しの検討を行う。

3 国立美術館が管理する情報の安全性の向上のため、コンピュータウイルスに関連する情報を、電子メール等により職員に周知し、注意喚起を促し、情報セキュリティへの意識向上に努める。

4 人件費を概ね1%削減する。

績、平成20年度事業の実施状況及び平成21年度事業計画（案）について説明聴取の上、意見交換を行った。  
また、評議員会（映画部会）を2回（平成20年6月20日及び平成21年2月26日）開催し、平成19年度事業実績、平成20年度事業経過報告及び平成21年度事業計画（案）について説明聴取の上、意見交換を行った。

ウ 京都国立近代美術館  
評議員会を1回（平成20年10月29日）開催し、平成19年度事業実績、平成20年度年度計画及び予算について説明聴取の上、意見交換を行った。

エ 国立西洋美術館  
評議員会を1回（平成20年7月7日）開催し、平成19年度事業報告及び平成20年度事業計画について説明聴取の上、意見交換を行った。

オ 国立国際美術館  
評議員会を1回（平成21年3月5日）開催し、平成19年度事業の外部評価結果、平成20年度事業の実施状況及び平成21年度事業計画について説明聴取の上、意見交換を行った。

カ 国立新美術館  
評議員会を2回（平成20年8月4日及び平成21年3月5日）開催し、平成20年度事業の実施状況及び平成21年度年度計画について説明聴取の上、意見交換を行った。

**3 管理情報の安全性向上**  
個人情報の保護については、個人情報保護に関する説明会への参加や情報漏えいの事例等の通知を行うとともに、個人情報ファイルの保有状況調査の実施等にあわせ、重要書類は鍵のかかる保管庫に納めること、個人情報を取り扱う業務中に離席する際は、当該書類やパソコン画面を他の職員等から見られないような措置を講じること、廃棄する際はシュレッダーにかけることなど、厳格に書類管理を行っている。ウイルス対応ソフトウェアの導入の徹底や最新のプログラムへの更新を随時行うなど、電子メール等による外部からのウイルス進入を回避する安全策を講じた。  
また、独立行政法人国立美術館保有個人情報管理規則第50条に基づき、当法人の保有個人情報の管理状況について、平成21年3月27日に監事による監査を実施した。

**4 人件費の抑制、給与体系の見直し**  
**人件費決算**  
決算額 976,216千円（対平成19年度比較 95.4%）  
・人件費は常勤職員を対象とし、退職金、福利厚生費を含まない。

特記事項  
人事院勧告の反映による地域手当の増額の要素が発生したが、退職者の後任不補充、新規採用や人事交流による職員の若返り等により、前年度と比較して4.6%減少した。

**給与体系の見直し**  
国家公務員の給与等を考慮して、平成18年4月から俸給表の水準を全体として平均4.8%引下げるとともに、級の構成の見直し、きめ細かい勤務実績の反映を行うため号俸の4分割を行ったほか、調整手当を廃止し、地域手当を新設するなど、国家公務員の給与構造改革を踏まえた給与体系の見直しを行った。  
また、国立美術館の職員が行う職務は、国の行政職俸給表（一）又は研究職俸給表の適用を受けるものと同等の職務であるとみなし、給与についても一般職給与法に準拠した給与制度で支給してきていることを前提に、これらとの比較を行った（「独立行政法人の役職員の給与等の水準（平成19年度）」平成20年7月24日総務省公表資料を参照。）。

ア 一般職俸給表の適用を受ける職員の給与水準  
<国との比較>

項目	国	国立美術館
平均年齢	40.7歳	38.7歳
学歴（大学卒の割合）	48.2%	73.3%
調整手当支給率 1	40.6%	100%

1 1級地、2級地及び4級地の支給地の割合

<他の独立行政法人との比較> 19年度年間給与額

項目	全独立行政法人	国立美術館
給与総額	7,342千円	6,056千円
平均年齢	43.3歳	38.7歳
ラスパイレ指数 2	107.3	99.3

2 国の行政職俸給表（一）適用者の給与を100としたときの給与水準の指数

イ 研究職俸給表の適用を受ける職員の給与水準

< 国との比較 >

項目	国	国立美術館
平均年齢	44.5歳	43.1歳
学歴（大学卒の割合）	96.8%	98.1%
調整手当支給率 3	40.6%	100%

3 1級地、2級地及び4級地の支給地の割合

< 他の独立行政法人との比較 > 19年度年間給与額

項目	全独立行政法人	国立美術館
給与総額	9,097千円	8,135千円
平均年齢	44.8歳	43.1歳
ラスパイス指数 4	101.3	93.9

4 国の研究職俸給表適用者の給与を100としたときの給与水準の指数

ウ 常勤役員の年間報酬

項目	全独立行政法人	国立美術館
法人の長	18,388千円	20,000千円
理事	15,762千円	18,997千円

平成20年度の役職員の報酬・給与等について

別紙4「独立行政法人国立美術館の役職員の報酬・給与等について」を参照。

1 S:特に優れた実績を上げている。(客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評価を付す。)

2 F:評価委員会として業務運営の改善その他の勧告を行う必要がある。(客観的基準は事前に設けず、業務改善の勧告が必要と判断された場合に限りFの評価を付す。)

一般管理費の削減状況 【参考指標】	平成22年度目標値 削減率 15%以上	一般管理費 750,226千円	実績：一般管理費 880,812千円、削減率 0.2% (前年度実績：一般管理費 790,160千円、削減率 10.5%)				
業務経費の削減状況 【参考指標】	平成22年度目標値 削減率 5%以上	業務経費 2,118,708千円	実績：業務経費 2,126,675千円、削減率 4.6% (前年度実績：業務経費 2,097,355千円、削減率 6.0%)				
省エネルギー化 (対前年度削減率) 【定量的に評価】	1	1.03%以上	0.72%以上 1.03%未満	0.72%未満	2	実績：対前年度削減率 10.5% (前年度実績：対前年度削減率 4.0%)	A
廃棄物減量化 【参考指標】	平成22年度目標値	138 t	実績：70t、削減率35.2% (前年度実績：108 t、削減率 10.2%)				
外部評価の開催回数 【定量的に評価】	1	1回以上	-	0回	2	実績：14回 (前年度実績：14回)	A
人件費の削減状況 【参考指標】	平成22年度目標値 削減率 5%以上	人件費 965,652千円	実績：人件費 976,216千円、削減率 4.6% (前年度実績：人件費 1,023,416千円、削減率 0.7%)				

# 財務・人事・施設整備に関する目標を達成するためにとるべき措置

評価 A

中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。

## 評価のポイント

厳しい予算の中で、努力しながら適切に実施されたものと認められ、良好な成果をあげているものと評価できる。

中期計画	中期目標		評価基準					主な実績及び自己評価	評価	評価委員会によるコメント																																																																																
	年度計画	評価項目	S	A	B	C	F																																																																																			
<b>財務内容の改善に関する事項</b> 税制措置も活用した寄付金や自己収入の確保、予算の効率的な執行等に努め、適切な財務内容の実現を図ること。																																																																																										
1 自己収入の増加 積極的に外部資金、施設使用料等、自己収入の増加に努めること。 また、自己収入額の取り扱いにおいては、各事業年度に計画的な収支計画を作成し、当該収支計画による運営に努めること。																																																																																										
2 固定経費の節減 管理業務の節減を行うとともに、効率的な施設運営を行うこと等により、固定経費の節減を図ること。																																																																																										
<b>予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画</b> 収入面に関しては、実績を勘案しつつ、外部資金等を積極的に導入することにより、計画的な収支計画による運営を図る。 また、管理業務の効率化を図る観点から、各事業年度において、適切な効率化を見込んだ予算による運営に努める。 1 予算（中期計画の予算）別紙のとおり																																																																																										
1 外部資金の活用、自己収入の増大に向けた定量的な目標を策定する。		<b>財務の状況</b> <b>【定性的に評価】</b>		<b>予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画等</b> <b>1 予算（単位：千円）</b>					A ・予算と実績の比較においては、展示会の入館者数の増加が展示事業等収入の増加につながっており、運営の努力が認められる。 ・運用を行っている金融資産等はないが、現金の管理には、引き続き留意する必要がある。  <b>【よりよい事業とするための意見】</b> 展示事業等収入は、展示会等の企画や運営状況によって増減することから、その増減要因の分析をおこない改善を図るなど、着実な収入が得られるような展示会等の企画・運営に努めることが期待される。																																																																																	
2 予算（年度計画の予算）左記のとおり。				<table border="1"> <thead> <tr> <th>区 分</th> <th>計 画 額</th> <th>実 績 額</th> <th>増 減 額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>収入</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>運営費交付金</td> <td>5,790,386</td> <td>5,790,386</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>展示事業等収入（注1）</td> <td>974,987</td> <td>1,344,623</td> <td>369,636</td> </tr> <tr> <td>寄附金収入</td> <td>0</td> <td>34,515</td> <td>34,515</td> </tr> <tr> <td>施設整備費補助金（注2）</td> <td>8,969,664</td> <td>9,249,638</td> <td>279,974</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>15,735,037</td> <td>16,419,163</td> <td>684,126</td> </tr> <tr> <td>支出</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>運営事業費</td> <td>6,765,373</td> <td>6,883,139</td> <td>117,766</td> </tr> <tr> <td>管理部門経費</td> <td>1,893,734</td> <td>1,938,126</td> <td>44,392</td> </tr> <tr> <td>うち人件費（注3）</td> <td>308,781</td> <td>331,053</td> <td>22,272</td> </tr> <tr> <td>うち一般管理費（注4）</td> <td>1,584,953</td> <td>1,607,072</td> <td>22,119</td> </tr> <tr> <td>事業部門経費</td> <td>4,871,639</td> <td>4,945,013</td> <td>73,374</td> </tr> <tr> <td>うち人件費（注5）</td> <td>824,042</td> <td>781,450</td> <td>42,592</td> </tr> <tr> <td>うち展覧事業費（注6）</td> <td>2,896,745</td> <td>2,963,646</td> <td>66,901</td> </tr> <tr> <td>うち調査研究事業費（注7）</td> <td>175,395</td> <td>201,099</td> <td>25,704</td> </tr> <tr> <td>うち教育普及事業費（注4）</td> <td>975,457</td> <td>998,816</td> <td>23,359</td> </tr> <tr> <td>施設整備費補助金（注2）</td> <td>8,969,664</td> <td>9,249,638</td> <td>279,974</td> </tr> <tr> <td>計</td> <td>15,735,037</td> <td>16,132,777</td> <td>397,740</td> </tr> <tr> <td>収支差引</td> <td>0</td> <td>286,385</td> <td>286,385</td> </tr> </tbody> </table>					区 分	計 画 額	実 績 額	増 減 額	収入				運営費交付金	5,790,386	5,790,386	0	展示事業等収入（注1）	974,987	1,344,623	369,636	寄附金収入	0	34,515	34,515	施設整備費補助金（注2）	8,969,664	9,249,638	279,974	計	15,735,037	16,419,163	684,126	支出				運営事業費	6,765,373	6,883,139	117,766	管理部門経費	1,893,734	1,938,126	44,392	うち人件費（注3）	308,781	331,053	22,272	うち一般管理費（注4）	1,584,953	1,607,072	22,119	事業部門経費	4,871,639	4,945,013	73,374	うち人件費（注5）	824,042	781,450	42,592	うち展覧事業費（注6）	2,896,745	2,963,646	66,901	うち調査研究事業費（注7）	175,395	201,099	25,704	うち教育普及事業費（注4）	975,457	998,816	23,359	施設整備費補助金（注2）	8,969,664	9,249,638	279,974	計	15,735,037	16,132,777	397,740	収支差引	0	286,385	286,385	主な増減理由 （注1）入場料収入等の増加による。	
区 分	計 画 額	実 績 額	増 減 額																																																																																							
収入																																																																																										
運営費交付金	5,790,386	5,790,386	0																																																																																							
展示事業等収入（注1）	974,987	1,344,623	369,636																																																																																							
寄附金収入	0	34,515	34,515																																																																																							
施設整備費補助金（注2）	8,969,664	9,249,638	279,974																																																																																							
計	15,735,037	16,419,163	684,126																																																																																							
支出																																																																																										
運営事業費	6,765,373	6,883,139	117,766																																																																																							
管理部門経費	1,893,734	1,938,126	44,392																																																																																							
うち人件費（注3）	308,781	331,053	22,272																																																																																							
うち一般管理費（注4）	1,584,953	1,607,072	22,119																																																																																							
事業部門経費	4,871,639	4,945,013	73,374																																																																																							
うち人件費（注5）	824,042	781,450	42,592																																																																																							
うち展覧事業費（注6）	2,896,745	2,963,646	66,901																																																																																							
うち調査研究事業費（注7）	175,395	201,099	25,704																																																																																							
うち教育普及事業費（注4）	975,457	998,816	23,359																																																																																							
施設整備費補助金（注2）	8,969,664	9,249,638	279,974																																																																																							
計	15,735,037	16,132,777	397,740																																																																																							
収支差引	0	286,385	286,385																																																																																							

2 収支計画  
別紙のとおり

3 収支計画  
左記のとおり。

(注2) 前年度繰越工事の完了ならびに当年度工事未完により次期へ繰越したことによる。  
(注3) 前年度繰越の退職手当支出相当額を計上したことによる。  
(注4) 支出経費の見直しによる。  
(注5) 定員の不補充ならびに定年退職者と新規採用者の給与の差額による。  
(注6) 展示室の空調設備強化等のための支出による。  
(注7) 受託事業費相当額を計上したことによる。  
金額は切り捨てのため、合計額が合致しない場合がある。

特記事項

運営費交付金を充当して行う業務では、人件費が予算に比べて20,320千円の支出減となった。これは前年度退職者給与と新規採用者給与との差額が発生したことが主な要因である。また、管理部門経費の人件費が支出増となったのは、前年度繰越を行った運営費交付金により退職手当を支出したことが主な要因である。物件費は、国立新美術館の展示室の空調設備を強化する等の要因により、予算に比べ138,083千円の支出増となった。

展示事業等収入は、展覧会の入館者数が目標入館者数を上回ったことが収入の増加に繋がった。その他事業収入では、国立新美術館の公募展事業収入が収入の増加に繋がった。これらの理由により、展示事業等収入は予算に比べて369,636千円の収入増となった。

施設整備費補助金は前年度に工事が未完となった東京国立近代美術館熱源機器設備更新工事（第1年次目）ならびに国立西洋美術館新館空調設備改修工事が当事業年度に完了したため収入ならびに支出が682,399千円増加し、工事が未完となった東京国立近代美術館熱源機器設備更新工事（第2年次目）ならびに京都国立近代美術館収蔵ラック等設置工事を翌事業年度に繰越をしたため402,425千円の収入の減少ならびに支出の減少となった。

寄附金については、64件、34,515千円を獲得した。うち9,694千円を当年度の収益とし、残りの24,821千円を次年度以降に繰り越して執行する予定である。

2 収支計画（単位：千円）

区 分	計 画 額	実 績 額	増 減 額
費用の部			
経常経費	5,604,999	5,914,175	309,176
管理部門経費	1,784,330	1,992,028	207,698
うち人件費	308,781	331,053	22,272
うち一般管理費（注1）	1,475,549	1,660,975	185,426
事業部門経費	3,706,174	3,757,998	51,824
うち人件費	824,042	781,450	42,592
うち展示事業費（注2）	1,769,345	1,797,432	28,087
うち調査研究事業費（注3）	169,520	194,631	25,111
うち教育普及事業費（注4）	943,267	984,485	41,218
減価償却費	114,495	164,149	49,654
収益の部			
運営費交付金（注5）	4,515,517	4,485,294	30,223
展示事業等の収入（注6）	974,987	1,481,279	506,292
資産見返運営費交付金戻入	47,605	145,263	97,658
資産見返寄附金戻入	-	1,413	1,413
資産見返物品受贈額戻入	67,054	14,848	52,206
経常利益		213,923	
臨時損失		15,564	
臨時利益		8,485	
当期純利益		206,844	
当期総利益		206,844	

主な増減理由

(注1) 施設整備費補助金による費用への計上が増えたことによる。  
(注2) 展示室空調設備強化等のための費用への計上が増えたことによる。  
(注3) 受託収入による費用への計上が増えたことによる。

<p>3 資金計画 別紙のとおり</p>	<p>4 資金計画 左記のとおり。</p>		<p>(注4) 固定資産の取得が見込より少なく、費用への計上が多かったことによる。 (注5) 計画に基づく美術品・収蔵品を収集できなかったことから運営費交付金債務を繰越したことによる。 (注6) 入場料収入等の増加ならびに施設費収益、受託収入等の計上による。 金額は切り捨てのため、合計額が合致しない場合がある。</p> <p><b>3 資金計画(単位:千円)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>区分</th> <th>計画額</th> <th>実績額</th> <th>増減額</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>資金支出</td> <td>15,735,037</td> <td>15,461,177</td> <td>273,860</td> </tr> <tr> <td>業務活動による支出(注1)</td> <td>5,490,504</td> <td>6,972,130</td> <td>1,481,626</td> </tr> <tr> <td>投資活動による支出(注1)(注3)</td> <td>10,244,533</td> <td>8,485,581</td> <td>1,758,952</td> </tr> <tr> <td>財務活動による支出</td> <td>-</td> <td>3,465</td> <td>3,465</td> </tr> <tr> <td>資金収入</td> <td>15,735,037</td> <td>15,473,801</td> <td>261,235</td> </tr> <tr> <td>業務活動による収入</td> <td>6,765,373</td> <td>7,111,633</td> <td>346,260</td> </tr> <tr> <td>運営費交付金による収入</td> <td>5,790,386</td> <td>5,790,386</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>展示事業等による収入(注2)</td> <td>974,987</td> <td>1,321,247</td> <td>346,260</td> </tr> <tr> <td>投資活動による収入</td> <td>8,969,664</td> <td>8,362,168</td> <td>607,496</td> </tr> <tr> <td>施設整備補助金による収入(注3)</td> <td>8,969,664</td> <td>8,362,168</td> <td>607,496</td> </tr> <tr> <td>資金増加額</td> <td></td> <td>12,624</td> <td></td> </tr> <tr> <td>資金期首残高</td> <td></td> <td>1,764,681</td> <td></td> </tr> <tr> <td>資金期末残高</td> <td></td> <td>1,777,306</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>主な増減理由 (注1) 活動内容の見直しによる。 (注2) 入場料収入等の増加による。 (注3) 前期繰越工事の完了および当期工事の未完による。 金額は切り捨てのため、合計額が合致しない場合がある。</p> <p><b>4 貸借対照表(単位:千円)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">資産の部</th> <th colspan="2">負債及び純資産の部</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>資産の部</td> <td></td> <td>負債の部</td> <td></td> </tr> <tr> <td>流動資産</td> <td>2,840,196</td> <td>流動負債</td> <td>2,061,081</td> </tr> <tr> <td>固定資産</td> <td></td> <td>固定負債</td> <td>1,144,463</td> </tr> <tr> <td>1.有形固定資産</td> <td>135,156,232</td> <td>負債合計</td> <td>3,205,544</td> </tr> <tr> <td>2.無形固定資産</td> <td>28,895</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>3.その他の資産</td> <td>33,135</td> <td>純資産の部</td> <td></td> </tr> <tr> <td>固定資産合計</td> <td>135,218,264</td> <td>資本金</td> <td>81,019,148</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>資本剰余金</td> <td>52,569,666</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>利益剰余金</td> <td>1,264,100</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>純資産合計</td> <td>134,852,915</td> </tr> <tr> <td>資産の部合計</td> <td>138,058,460</td> <td>負債及び純資産の部合計</td> <td>138,058,460</td> </tr> </tbody> </table> <p>金額は切り捨てのため、合計額が合致しない場合がある。</p>	区分	計画額	実績額	増減額	資金支出	15,735,037	15,461,177	273,860	業務活動による支出(注1)	5,490,504	6,972,130	1,481,626	投資活動による支出(注1)(注3)	10,244,533	8,485,581	1,758,952	財務活動による支出	-	3,465	3,465	資金収入	15,735,037	15,473,801	261,235	業務活動による収入	6,765,373	7,111,633	346,260	運営費交付金による収入	5,790,386	5,790,386	-	展示事業等による収入(注2)	974,987	1,321,247	346,260	投資活動による収入	8,969,664	8,362,168	607,496	施設整備補助金による収入(注3)	8,969,664	8,362,168	607,496	資金増加額		12,624		資金期首残高		1,764,681		資金期末残高		1,777,306		資産の部		負債及び純資産の部		資産の部		負債の部		流動資産	2,840,196	流動負債	2,061,081	固定資産		固定負債	1,144,463	1.有形固定資産	135,156,232	負債合計	3,205,544	2.無形固定資産	28,895			3.その他の資産	33,135	純資産の部		固定資産合計	135,218,264	資本金	81,019,148			資本剰余金	52,569,666			利益剰余金	1,264,100			純資産合計	134,852,915	資産の部合計	138,058,460	負債及び純資産の部合計	138,058,460	
区分	計画額	実績額	増減額																																																																																																									
資金支出	15,735,037	15,461,177	273,860																																																																																																									
業務活動による支出(注1)	5,490,504	6,972,130	1,481,626																																																																																																									
投資活動による支出(注1)(注3)	10,244,533	8,485,581	1,758,952																																																																																																									
財務活動による支出	-	3,465	3,465																																																																																																									
資金収入	15,735,037	15,473,801	261,235																																																																																																									
業務活動による収入	6,765,373	7,111,633	346,260																																																																																																									
運営費交付金による収入	5,790,386	5,790,386	-																																																																																																									
展示事業等による収入(注2)	974,987	1,321,247	346,260																																																																																																									
投資活動による収入	8,969,664	8,362,168	607,496																																																																																																									
施設整備補助金による収入(注3)	8,969,664	8,362,168	607,496																																																																																																									
資金増加額		12,624																																																																																																										
資金期首残高		1,764,681																																																																																																										
資金期末残高		1,777,306																																																																																																										
資産の部		負債及び純資産の部																																																																																																										
資産の部		負債の部																																																																																																										
流動資産	2,840,196	流動負債	2,061,081																																																																																																									
固定資産		固定負債	1,144,463																																																																																																									
1.有形固定資産	135,156,232	負債合計	3,205,544																																																																																																									
2.無形固定資産	28,895																																																																																																											
3.その他の資産	33,135	純資産の部																																																																																																										
固定資産合計	135,218,264	資本金	81,019,148																																																																																																									
		資本剰余金	52,569,666																																																																																																									
		利益剰余金	1,264,100																																																																																																									
		純資産合計	134,852,915																																																																																																									
資産の部合計	138,058,460	負債及び純資産の部合計	138,058,460																																																																																																									
<p>短期借入金の限度額 短期借入金の限度額は、1.2億円。 短期借入金が想定される理由は、運営費交付金の受入れに遅延が生じた場合である。</p>	<p><b>5 短期借入金</b> 実績なし</p>	<p>A 特になし</p>																																																																																																										
<p>重要な財産の処分等に関する計画 重要な財産を譲渡、処分する計画はない。</p>	<p><b>6 重要な財産の処分等</b> 実績なし</p>	<p>A 特になし</p>																																																																																																										



		【よりよい事業とするための意見】 保有資産について、当事業年度における減損の兆候はないとのことであるが、今後も入館者の利用実績を増やすことによる保有固定資産の活用を期待している。																					
<p>剰余金の使途 決算において剰余金が発生した時は、次の購入等に充てる。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 美術作品の購入・修理</li> <li>2 調査研究、出版事業の充実</li> <li>3 企画展等の追加実施</li> <li>4 入館者サービス、情報提供の質的向上、老朽化対応のための整備の充実</li> </ol>	<p><b>7 剰余金</b> <b>(1) 当期末処分利益の処分計画</b></p> <table border="1" data-bbox="882 290 1760 392"> <thead> <tr> <th>区分</th> <th>金額（円）</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>当期末処分利益</td> <td>206,844,009</td> </tr> <tr> <td>当期総利益</td> <td>206,844,009</td> </tr> </tbody> </table> <p><b>(2) 利益の生じた主な理由</b> 予算額を上回った自己収入があったことによる。 特記事項 国立新美術館及び国立国際美術館の両館で開催された「モディリアーニ展」において両館合わせた目標入館者数 282,000 人に対して 417,678 人、国立西洋美術館で開催した「コロネ 光と追憶の変奏曲」及び「ヴィルヘルム・ハンマースホイ 静かなる詩情」において両展を合わせた目標入館者 260,000 人に対して 465,729 人の入館者数があったことなどにより、収入予算額を上回る収入を得ることができた。</p> <p><b>(3) 目的積立金の使用状況</b> 今中期期間における目的積立金の承認がないため、実績はない。</p> <p><b>(4) 積立金（通則法第 44 条第 1 項）の状況（単位：円）</b></p> <table border="1" data-bbox="864 708 1760 813"> <thead> <tr> <th>使途の内訳</th> <th>期首残高</th> <th>当期増加額</th> <th>当期減少額</th> <th>期末残高</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>積立金</td> <td>277,898,619</td> <td>397,825,051</td> <td>0</td> <td>675,723,670</td> </tr> <tr> <td>前中期目標期間 繰越積立金</td> <td>381,532,745</td> <td>0</td> <td>0</td> <td>381,532,745</td> </tr> </tbody> </table> <p>通則法 44 条第 3 項の目的積立金の申請は行ったものの、認定されなかった理由として、「独立行政法人の経営努力認定について（平成 18 年 7 月 21 日（平成 19 年 7 月 4 日改訂）総務省行政管理局）」の（3）「独立行政法人の経営努力認定の基準」、 「経営努力認定の対象案件の利益の実績が原則として前年度実績額を上回ること（ただし、前年度実績が前々年度の実績を下回っている場合には、その理由を合理的に説明することが必要。）」に対する合理的説明が不足したことによる。</p>	区分	金額（円）	当期末処分利益	206,844,009	当期総利益	206,844,009	使途の内訳	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高	積立金	277,898,619	397,825,051	0	675,723,670	前中期目標期間 繰越積立金	381,532,745	0	0	381,532,745	<p>A</p> <p>経営努力認定の基準を満たす説明が困難であるため、目的積立金の申請を行わないということであるが、要因等を分析し、目的積立金が認められるよう、申請に向けて積極的に取り組むことが望まれる。</p> <p>【よりよい事業とするための意見】 剰余金は各館の努力で生まれる以上、インセンティブを重視する対応が望まれる。</p>
区分	金額（円）																						
当期末処分利益	206,844,009																						
当期総利益	206,844,009																						
使途の内訳	期首残高	当期増加額	当期減少額	期末残高																			
積立金	277,898,619	397,825,051	0	675,723,670																			
前中期目標期間 繰越積立金	381,532,745	0	0	381,532,745																			
<p><b>その他業務運営に関する重要事項</b></p>																							
<p>1 人事管理（人件費、意識改革等）、人事交流の適切な実施により、内部管理事務の改善を図ること。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用すること。</p>																							

<p>1 人事に関する計画 (1) 方針 国家公務員制度改革や類似独立行政法人等の人事・給与制度改革の動向を勘案しつつ、職員の能力や業績を適切に反映できる人事・給与制度を検討し、導入する。 人事交流を促進するとともに、職員の資質向上を図るための研修機会の提供に努める。また、効率的かつ効果的な業務運営を行うため、非公務員化のメリットを活かした制度を活用する。</p> <p>(2) 人員に係る指標 常勤職員については、その職員数の抑制を図る。 (参考 1) 1) 期初の常勤職員数 131 人 2) 期末の常勤職員数の見込み 131 人 (参考 2) 中期目標期間中の人件費総額見込み 5,220 百万円 但し、上記の額は、役員員に対し支給する報酬（給与）、賞与、その他の手当の</p>	<p>1 人事に関する計画 職員の研修計画 職員の意識向上を図るため、次の職員研修を実施する。 ア 新規採用者・転任者職員研修 イ 接遇研修 外部の研修に職員を積極的に派遣し、その資質の向上を図る。</p>	<p>人事の状況 【定性的に評価】</p>	<p><b>8 人事に関する計画</b> <b>職種別人員の増減状況（過去 5 年分）</b></p> <table border="1" data-bbox="864 1190 1760 1279"> <thead> <tr> <th>職種</th> <th>16 年度</th> <th>17 年度</th> <th>18 年度</th> <th>19 年度</th> <th>20 年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>定年制研究系職員</td> <td>60</td> <td>60</td> <td>61</td> <td>61</td> <td>61</td> </tr> <tr> <td>定年制事務系職員</td> <td>68</td> <td>70</td> <td>70</td> <td>70</td> <td>70</td> </tr> </tbody> </table> <p>「公務員の給与改定に関する取扱について（平成 18 年 10 月 17 日閣議決定）」に基づき、公務員の例に準じて措置、対処している。 人事交流の推進 事務系職員については、文化庁、国立大学法人及び他の独立行政法人との間で定期的な人事交流を行い、組織の効率化と個々の職員の能力の発揮とその向上を考慮して人事配置を行った。 職員の研修等 ア 東京国立近代美術館 ・ 人事院主催「関東地区係長研修」（1 名）</p>	職種	16 年度	17 年度	18 年度	19 年度	20 年度	定年制研究系職員	60	60	61	61	61	定年制事務系職員	68	70	70	70	70	<p>B</p> <p>・ 少ない人員の中、最大限の努力が認められる。 ・ 独立行政法人国立美術館安全衛生管理規則が定められており、職員の安全と健康を確保するとともに快適な職場環境の形成を促進する体制が整備されている点は評価できる。</p> <p>【よりよい事業とするための意見】 ・ 研究職を中心に、美術館事業の根幹を支える学識、人的ネットワークの充実を図るための職員の研修機会をより増やすことが期待される。 ・ 職員の健康の保持増進を図るため、医療体制の充実を図り、プライベートに配慮した職場のメンタルヘルスケアを積極的に推進することが期待される。</p>
職種	16 年度	17 年度	18 年度	19 年度	20 年度																	
定年制研究系職員	60	60	61	61	61																	
定年制事務系職員	68	70	70	70	70																	

<p>合計額であり、退職金、福利厚生費を含まない。</p>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京大学主催「東京大学副課長級研修」(1名)</li> <li>・東京大学主催「平成20年度東京大学係長級研修(初任者)」(1名)</li> <li>・財務省会計センター主催「政府関係法人会計事務職員研修」(1名)</li> <li>・財団法人日本人事行政研究所主催「給与実務研修会(諸手当関係)」(1名)</li> <li>・内閣府主催「人事・労務担当者講習会」(1名)</li> <li>・財団法人文化財虫害研究所主催「文化財の虫害・保存対策研修会」(1名)</li> <li>・平成20年度国立美術館新任職員オリエンテーション(14名)</li> <li>・文部科学省在外研究員として海外へ派遣(1名)</li> <li>・放送大学受講(1名)</li> <li>イ 京都国立近代美術館 <ul style="list-style-type: none"> <li>・人事院主催「近畿地区中堅係員研修」(2名)</li> <li>・内閣府主催「人事・労務担当者講習会」(1名)</li> <li>・財団法人日本人事行政研究所主催「給与実務研修会(諸手当関係)」(1名)</li> <li>・平成20年度国立美術館新任職員オリエンテーション(3名)</li> </ul> </li> <li>ウ 国立西洋美術館 <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国文学研究資料館主催「平成20年度アーカイブズ・カレッジ史料管理学研修会」(1名)</li> <li>・情報・システム研究機構国立情報学研究所主催「平成20年度ILLシステム講習会」(1名)</li> <li>・平成20年度国立美術館新任職員オリエンテーション(5名)</li> <li>・全国美術館会議主催「第24回学芸員研修会」(2名)</li> <li>・財団法人日本人事行政研究所主催「給与実務研修会(諸手当関係)」(1名)</li> <li>・文部科学省主催「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン(実施基準)」に関する研修会(2名)</li> </ul> </li> <li>エ 国立国際美術館 <ul style="list-style-type: none"> <li>・財団法人日本人事行政研究所主催「給与実務研修会(諸手当関係)」(1名)</li> <li>・内閣府主催「人事・労務担当者講習会」(1名)</li> <li>・平成20年度国立美術館新任職員オリエンテーション(3名)</li> <li>・消防訓練(平成20年5月9日、平成21年2月2日)</li> </ul> </li> <li>オ 国立新美術館 <ul style="list-style-type: none"> <li>・独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所主催「平成20年度保存担当学芸員研修」(1名)</li> <li>・文化庁・新潟市教育委員会主催「平成20年度著作権セミナー」(1名)</li> <li>・国立情報学研究所主催「目録システム講習会」(1名)</li> <li>・財団法人日本人事行政研究所主催「給与実務研修会(諸手当関係)」(1名)</li> <li>・(財)安全衛生普及センター「衛生推進者養成講習」(1名)</li> <li>・東京大学主催「平成20年度東京大学係長級研修(初任者)」(1名)</li> <li>・国立美術館主催「平成20年度新任職員オリエンテーション」(8名)</li> <li>・経済産業省主催「平成20年度事業場(ビル)のエネルギー使用合理化シンポジウム」(1名)</li> <li>・環境省主催「グリーン購入法基本方針説明会」(1名)</li> <li>・環境省主催「平成20年度環境配慮契約法基本方針説明会」(2名)</li> <li>・自衛消防訓練(業者含む。平成20年9月24日)</li> <li>・内閣府主催「人事・労務担当者講習会」(1名)</li> </ul> </li> </ul>		
<p>2 業務の目的・内容に適切に対応するため長期的視野に立った施設・設備の整備計画を作成すること。</p>					
<p>2 別紙のとりの施設整備に関する計画に沿った整備を推進する。</p>	<p>2 施設・設備に関する計画 施設・設備の整備を計画的に推進する。</p>	<p>施設整備の状況 【定性的に評価】</p>	<p><b>9 施設整備に関する計画</b> 東京国立近代美術館フィルムセンター外壁他改修ならびに東京国立近代美術館工芸館外壁等補修については新規事業として、国立新美術館土地購入については平成19年度からの継続事業として、平成21年度予算に施設整備費補助金が計上された。</p> <p><b>10 関連公益法人</b> <b>(1) 関連公益法人の概要</b> 平成19事業年度まで関連公益法人として記載のあった財団法人西洋美術振興財団については、独立行政法人会計基準第125「関連公益法人等の範囲」に該当しないため、平成20事業年度より記載しないこととなった。</p>	<p>A</p>	<p>少ない予算の中で、適正な整備状況であると認められる。</p>
		<p>関連公益法人 【定性的に評価】</p>		<p>A</p>	<p>これまで関連公益法人として整理していた法人と国立美術館との取引内容、資金の流れや人員の異動等については、今後とも常時把握する必要がある。</p>

## 内部統制（監査規定、体制、監査実績、監査内容等）についての評価委員会のコメント

- ・ 監事監査及び内部監査の監査規程及び監査体制の整備状況並びにそれぞれの監査実績によれば、有効に機能を発揮していると判断される。
- ・ 独立行政法人国立美術館職員倫理規則第16条において、倫理監督者への相談が規定されているが、相談の実績はないとのことである。当該規則の周知徹底を図ることが望まれる。